

博士論文

中国語を母語とする日本語学習者における接続詞の誤用に関する研究

—「添加型」を中心に—

唐 彬

広島大学大学院国際協力研究科

2019年9月

中国語を母語とする日本語学習者における接続詞の誤用に関する研究

—「添加型」を中心に—

D163012

唐 彬

広島大学大学院国際協力研究科 博士論文

2019年9月

広島大学大学院国際協力研究科

論文名： 中国語を母語とする日本語学習者における接続詞の誤用に関する研究
—「添加型」を中心に—

学位の名称： 博士（学術）

学生番号： D163012

氏名： 唐 彬

令和元年 7月 25日

審査委員会

委員長・教授

佐藤 暢治



教授

堀田 泰司



准教授

深見 兼孝



広島大学大学院文学研究科・教授

高永 茂



関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科・教授

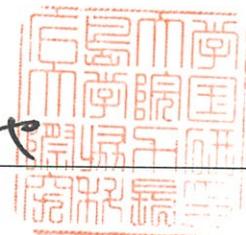
于 康



2019年 8月 30日

研究科長

馬場 卓也



印

目次

図	vi
表	viii
第一章 序 論	1
1.1 研究の目的と意義	1
1.2 研究資料と研究方法	3
1.2.1 研究資料	3
1.2.2 研究方法	4
1.3 用語説明	4
1.3.1 誤用の定義	4
1.3.2 誤用類型・誤用形態・誤用傾向	5
1.3.3 誤用の規則性	5
1.4 本論文の構成	5
第二章 接続詞に関する先行研究	7
2.1 接続詞の定義	7
2.1.1 先行研究における接続詞の定義	7
2.1.2 本研究における接続詞の定義	8
2.2 接続詞の分類	8
2.2.1 先行研究における接続詞の分類	8
2.2.1.1 市川（1978）による分類	8
2.2.1.2 森田（1987a）による分類	10
2.2.1.3 田中（1984）による分類	10
2.2.1.5 伊藤・阿部（1991）による分類	13
2.2.2 本研究における接続詞の分類	13
2.3 「添加型」に関する先行研究	14
2.3.1 個別の接続詞の用法・使い分けを扱った文献	15
2.3.1.1 栗原（1968）の研究	15
2.3.1.2 ひけ（1985）の研究	16

2.3.1.3	浜田（1995）の研究	16
2.3.1.4	岡本（1996）の研究	16
2.3.1.5	石黒（2000）の研究	17
2.3.1.6	森山（2006）の研究	17
2.3.2	接続詞の誤用を扱った文献	18
2.3.2.1	西谷（1973）の研究	18
2.3.2.2	市川（1998、2000）の研究	18
2.3.2.3	守屋（2000）の研究	19
2.3.2.4	浅井（2003）の研究	19
2.3.2.5	江後（2007）の研究	19
2.3.2.6	田代（2007）の研究	20
2.4	先行研究の問題点と課題	20
第三章	接続詞の誤用分布	21
3.1	接続詞の誤用全体像	21
3.2	学習歴による接続詞の誤用全体像	23
3.3	「添加型」の誤用類型	27
3.4	研究対象	30
第四章	「添加型」における不使用—「そして」「また」を中心に—	32
4.1	はじめに	32
4.2	「添加型」における不使用の実態	33
4.3	「添加型」における不使用の傾向	35
4.3.1	文章の形式上の特徴	35
4.3.1.1	「そして」	35
4.3.1.2	「また」	36
4.3.2	前後文の関係の特徴	37
4.3.3	不使用の傾向のまとめ	38
4.4	「添加型」における不使用の傾向の要因	38
4.4.1	句点に続く後文に「そして」と「また」を使用しない要因	39
4.4.2	句点に続く後文に「も」が現れる場合、「また」を使用しない要因	41

4.4.3 「そして」の不使用前後文に時系列関係が見られる要因	43
4.4.4 不使用の傾向の要因のまとめ	46
4.5 おわりに	47
第五章 「添加型」における過剰使用—「そして」「また」「それから」「それに」を中心に—	48
5.1 はじめに	48
5.2 「添加型」における過剰使用の実態	49
5.3 「添加型」における過剰使用の傾向	50
5.3.1 文章の形式上の特徴	50
5.3.1.1 「そして」	50
5.3.1.2 「また」	52
5.3.1.3 「それから」	53
5.3.1.4 「それに」	54
5.3.2 前後文の関係の特徴	56
5.3.3 過剰使用の傾向のまとめ	57
5.4 「添加型」における過剰使用の傾向の要因	58
5.4.1 読点に続く後文に「そして」「また」「それに」を過剰に使用する要因	58
5.4.2 「動詞のテ形等+読点」の後ろで「そして」「それに」を過剰に使用する要因	60
5.4.2.1 「そして」	61
5.4.2.2 「それに」	62
5.4.3 「動詞以外+読点」の後ろで「また」を過剰に使用する要因	64
5.4.4 句点に続く後文に「それから」を過剰に使用する要因	65
5.4.5 「そして」の過剰使用の前後文に非時系列関係が見られる要因	66
5.4.6 過剰使用の傾向の要因のまとめ	67
5.5 おわりに	68
第六章 「添加型」における混用—「そして」「それから」「それに」を中心に—	70
6.1 はじめに	70
6.2 「添加型」における混用の実態	71
6.3 「添加型」における混用の傾向	74

6.3.1 「*そして」	74
6.3.2 「*それから」	76
6.3.3 「*それに」	78
6.3.4 混用の傾向のまとめ	80
6.4 「*そして」「*それから」「*それに」における混用	81
6.4.1 「*そして・*それから・*それに→また」	81
6.4.1.1 「*そして→また」	84
6.4.1.1.1 母語話者における「そして」と「また」の捉え方	84
6.4.1.1.2 学習者における「そして」と「また」の捉え方	84
6.4.1.1.3 「そして」と「また」に見られる捉え方の違いの要因	86
6.4.1.2 「*それから→また」と「*それに→また」	89
6.4.1.2.1 「*それから→また」	89
6.4.1.2.2 「*それに→また」	90
6.4.2 「*そして→それから」と「*それから→そして」	91
6.4.2.1 母語話者における「そして」と「それから」の捉え方	91
6.4.2.2 学習者における「そして」と「それから」の捉え方	92
6.4.2.3 「そして」と「それから」に見られる捉え方の違いの要因	94
6.4.3 「*そして→それに」と「*それに→そして」	96
6.4.3.1 母語話者における「そして」と「それに」の捉え方	96
6.4.3.2 学習者における「そして」と「それに」の捉え方	97
6.4.3.3 「それに」と「そして」に見られる捉え方の違いの要因	98
6.4.4 「*それから→それに」と「*それに→それから」	99
6.4.5 混用の傾向の要因のまとめ	99
6.5 おわりに	101
第七章 結論	103
7.1 本研究のまとめ	103
7.1.1 「添加型」の不使用における傾向と要因	103
7.1.2 「添加型」の過剰使用における傾向と要因	104
7.1.3 「添加型」の混用における傾向と要因	105
7.2 「添加型」における誤用の規則性	106

7.3 今後の課題	108
参考文献	109
用例出典	114
謝辞	115

図

図 2-1	森山 (2006) の「添加」に関する分類.....	17
図 3-1	接続詞の誤用全体像 (n=1276)	21
図 3-2	学習歴 3 ヶ月以上 1 年未満 (n=266)	24
図 3-3	学習歴 1 年以上 2 年未満 (n=133)	24
図 3-4	学習歴 2 年以上 3 年未満 (n=83)	25
図 3-5	学習歴 3 年以上 4 年未満 (n=652)	25
図 3-6	学習歴 4 年以上 7 年未満 (n=87)	26
図 3-7	学習歴ごとに見られる接続詞の誤用全体像.....	26
図 3-8	「添加型」の誤用類型 (n=491)	27
図 4-1	「添加型」の不使用分布 (n=66)	33
図 4-2	「そして」の不使用における前後文の関係.....	38
図 5-1	「添加型」における過剰使用 (n=145)	49
図 5-2	「そして」の過剰使用における前後文の関係.....	57
図 5-3	「そして」「また」の不使用と過剰使用の形式上に見られる規則性.....	69
図 5-4	「そして」の不使用と過剰使用の文脈に見られる規則性.....	69
図 6-1	「添加型」の混用の誤用形態 (n=280)	72
図 6-2	「添加型」に修正された混用の誤用形態 (n=200)	73
図 6-3	「*そして」の混用傾向 (n=95)	74
図 6-4	「*そして→添加型」の内訳 (n=37)	75
図 6-5	「*それから」の混用傾向 (n=66)	76
図 6-6	「*それから→添加型」の内訳 (n=24)	77
図 6-7	「*それに」の混用傾向 (n=62)	78
図 6-8	「*それに→添加型」の内訳 (n=50)	79
図 6-9	「そして」「それから」「それに」「また」の文体差.....	83

図 6-10 「*そして→また」の混用における前後文の関係..... 86

図 7-1 「そして」「また」の不使用と過剰使用に見られる誤用の規則性..... 106

図 7-2 「そして」の不使用と過剰使用の文脈に見られる誤用の規則性..... 107

図 7-3 学習者における「そして」「それから」「それに」「また」に関する誤用の規則性
..... 108

表

表 2-1	市川（1978）による分類	9
表 2-2	森田（1987a）による分類	10
表 2-3	田中（1984）による分類	10
表 2-4	佐治（1987）による分類	12
表 2-5	伊藤・阿部（1991）による分類	13
表 2-6	本研究における接続詞の分類基準	14
表 3-1	「添加型」における誤用類型の分布	28
表 4-1	「そして」の不使用形式（n=32）	35
表 4-2	「また」の不使用形式（n=27）	36
表 4-3	「そして」と「また」の不使用に見られる傾向	38
表 4-4	「そして」と「また」に見られる不使用の傾向と要因	46
表 5-1	「そして」の過剰使用形式（n=69）	50
表 5-2	「、<*そして→○>」の特徴（n=40）	51
表 5-3	「また」の過剰使用形式（n=26）	52
表 5-4	「、<*また→○>」の特徴（n=21）	53
表 5-5	「それから」の過剰使用形式（n=20）	54
表 5-6	「それに」の過剰使用形式（n=18）	55
表 5-7	「、<*それに→○>」の特徴（n=11）	56
表 5-8	「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用に見られる傾向	58
表 5-9	「添加型」に見られる過剰使用の傾向と要因	68
表 6-1	「*そして」「*それから」「*それに」における混用傾向	80
表 6-2	「*そして」「*それから」「*それに」が「また」と混用された例における文体差 ..	82
表 6-3	「そして」と「また」の異同点	84
表 6-4	「そして」に対応する中国語の連詞	87

表 6-5 「それに」「それから」「そして」についてのイメージ.....	89
表 6-6 「そして」と「それから」の異同点.....	92
表 6-7 「そして」と「それから」の混用例数 (n=15)	92
表 6-8 母語話者と学習者における「そして」と「それから」の捉え方.....	94
表 6-9 「そして」と「それに」の異同点.....	97
表 6-10 「そして」と「それに」の混用例数 (n=12)	97
表 6-11 母語話者と学習者における「そして」と「それに」の捉え方.....	98
表 6-12 「添加型」に見られる混用の傾向と要因.....	101

第一章 序論

1.1 研究の目的と意義

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、「学習者」）が日本語を習得する過程で産出する接続詞の誤用実態に焦点をあてた研究である。接続詞は接続表現の一つである。日本語の接続表現には、接続詞、接続助詞とそれに相当する表現が含まれ、文章の展開において、文と文の意味的な接続関係を示す役割を有する（佐久間 1991：11）。

日本語は類似した意味をもつ接続詞が多く、それらがもつ意味によって細かく区別され使用されている。そのため、学習者が接続詞個々の意味を十分理解しないままに使用してしまうと、誤用が生じることがある。実際、どのような誤用が見られるのだろうか。「YUK タグ付き中国語母語話者の日本語学習者作文コーパス」Ver.8（以下、「YUK コーパス」）には、学習者の誤用として次のような例が見いだせる（下線は筆者による。以下同様）。

- (1) 大学に入学するまで、私は日本語を学んで日中企業の架け橋になりたいと思っていました。＜○→そして＞¹大学の経済情報に入学しました。
- (2) 文の成分の面では、中日記事で述語が最重要な文の成分である。＜○→また＞日本の記事では連体修飾語が多く重要な役に立っているが、目的語が少ない。
- (3) 大学の建学方針、カリキュラム、シラバスの設置など面で、中国の女子大学に対する経験について検討したい。＜それから→○＞インターネットで大学のホームページを調べると、日本の女子大学はそれぞれ特色があるカリキュラムを設置していることがわかった。
- (4) 上述の例から、「黒」は古くからもっていた不吉なイメージを感じさせやすく、＜それに→○＞語源説から見ても、何かを隠す暗さといわれるから、今は秘密、犯罪、失敗、失策などの意味で用いられている。
- (5) 前 11 時まで寝ます。以前、目覚まし時計が聞こえなかったので、朝寝坊をして授業に遅れたこともあります。＜そして→それから＞、日本のテレビドラマやアニメが大好きです。

¹ 于（2012：37）によると、誤用と正用を同時に表記するために、矢印記号「→」を使用する。矢印の前の成分が誤用を表し、「→」の後ろの成分が訂正後の表現を表している。「○」は当該の成分を使用しないことを表す。日本語の正誤判断については、1.3.1 節を参照されたい。

(6) 混浴も日本の独特の文化であり、時に家族と共に浴槽に入って、話したり笑ったりするのは楽しいものである。＜それから→また＞風呂についての産業も日本の経済の発展を促している。

(1) から (6) に出現する接続詞はどのように分類できるのだろうか。市川 (1978 : 90) に従えば、(1) から (6) の接続詞「そして」「また」「それから」「それに」は「前文の内容に付け加わる内容を後に述べる型」という「添加型」の接続詞（以下、「添加型」）に該当する。このように「添加型」に関係する誤用が「YUK コーパス」には最も多く観察されることから、学習者にとっては「添加型」が学習上困難な接続詞の一つになっていると言える。

そのため、「添加型」を正しく使用することが学習者には求められる。なぜなら、「添加型」は、学習者が最も誤用しやすい接続詞であることに加えて、日本語母語話者が頻繁に使用する接続詞だからである。浅井 (2003) は接続詞の使用頻度を種類ごとに比較し、日本語母語話者は「添加型」>「逆接型」>「同列型」の順に、一方、学習者（中国語母語話者）は「添加型」>「逆接型」>「順接型」の順に接続詞を多く使用していることを明らかにしている。要するに、日本語母語話者でも学習者でも使用率が最も高い接続詞は「添加型」なのである。

日本語の「添加型」の誤用、および学習に関わる先行研究として、佐藤 (1992)、守屋 (2000)、倉持・鈴木 (2007) などがある。しかし、これらの研究は、教師の指導に注目したり、個別の接続詞の用法に焦点をあてたり、少数の留学生を対象に論じたものであり、中国語母語話者における「添加型」の誤用を体系的に研究したものではない。

本研究の目的は、以上のような観点から、「YUK コーパス」を資料に、「添加型」の誤用実態に焦点をあて、母語（中国語）話者の視点から誤用が生じる規則性を解明することにある。以下では、どのような誤用パターンがあるのか。その誤用が生じる要因は何なのか。また、学習者にとって学習しにくい「添加型」は何なのかといった三つの課題に沿って、本研究を進めていきたい。

本研究の意義として、2点を挙げることができる。第一は、本研究が個別具体的な誤用を分析するに留まった先行研究の欠点を補うことができるという意義である。本研究は「大型」コーパスから抽出した誤用データを用い、接続詞の意味分析に加え形式上の特徴なども視野に入れ、多様な角度から学習者が生じさせる誤用の要因を考察する。そうすることで、研究対象である誤用パターンにおける誤用の規則性が体系的に解明できる。

第二は、本研究が接続詞に関する言語学研究や日中対照研究に貢献する可能性があるという意義である。連続する前文と後文の関係を論じる研究は文章論の一分野である連接論であり、

文章論の中で重要な位置を占めている。日本語には市川（1978）、永野（1986）、中国語にも張（2000）、呂（2005）などの研究があるが、日中両言語の文章論に関する対照研究は少ない。範（2012）がその一つではあるが、誤用の規則性の究明といった体系的な視点からの研究は見当たらない。さらに、本研究は研究対象の誤用の規則性にもとづいて日本語教育における接続詞の教材作りや教授法の改善に貢献する可能性があり、使用場面に相応しい接続詞の選択やその実用にも有益であると考えられる。

1.2 研究資料と研究方法

1.2.1 研究資料

本研究の誤用例は「YUK コーパス」から抽出したものである。これは、関西学院大学の于康研究室によって誤用研究のために開発された「大型」誤用コーパスであり²、対象は中国語を母語とする日本語学習者に限定されている。于（2011a、2012、2017）によると、本コーパスの内容は、中国の40校以上の大学で日本語を第一外国語として履修する学部生及び院生の日本語の作文データ（日本語教育に携わっている日本語母語話者により、添削、正誤タグ³および研究タグ付与済み）である。そして、作文データの文章ジャンルは感想文、卒業論文、修士論文など多種多様であり、テーマは言語学から文学、文化、経済などに及んでいる。

このコーパスに収録されている「作文」について、于（2012：36）は「感想文、研究計画書、レポート、宿題、メール、翻訳、外交通訳の録音資料、卒業論文、修士論文、といった文章化されたもので、話し言葉の記録ではないもの」と述べている。そのため、本コーパスに収録されたものは文体の柔らかいメールから硬い論文までの文章化されたもののみに限られ、話し言葉を含めたあらゆるジャンルの文章を扱っていないという限界がある。さらに、于（2011a：81）によって、コーパスが示す正用文は添削者によって異なった判断が示され、また添削された文章が作者の意思を十分に反映していないという問題点があることも指摘されている。

しかし、日本語教育の研究分野において、量的に蓄積された膨大な日本語誤用データを有する総合型の「YUK コーパス」は大変有意義なものである。なぜなら、日本における第二言語習得に関する公開されている学習者コーパスは極めて少ないからである（鎌田2006）。その背景には、量的にも質的にもデータ収集の困難さがあることが迫田（2009：31）によって指

² 「中国語母語話者の日本語学習者の誤用コーパス」の詳細な内容については、于（2011a、2012、2017）を参照されたい。

³ コーパスにおけるタグについて、于（2011a：80）は「性別、学年別、日本語学習年数別、滞日年数別、文章の類型別の他に、誤用の種類別を設け、正誤例も同時に表示するようにしている」と述べている。

摘されている。現時点で本コーパスは Ver.8 に更新され、接続詞に関するデータの総量は、ファイル数：3,872、文字数：5,698,706、タグ数：101,522 となっている。コーパスの容量から見ると、中国語母語話者に限定して誤用研究を行うのは、誤用の規則性を分析するうえで有用であると言える。

1.2.2 研究方法

以下の手順で「添加型」の誤用例の抽出作業を行う。第一の作業として、「YUK コーパス」を用い、学習者が産出した接続詞の誤用例から「添加型」の誤用例を抽出する。第二の作業として、抽出した誤用例にもとづき誤用を種類別にいくつかのパターンに分ける。第三の作業として、誤用の種類別に「添加型」の誤用数と誤用の割合を計算したうえで、学習者が誤用しやすい「添加型」を明らかにする。そして第四の作業として、その明らかにされた「添加型」の誤用例を形式上あるいは文体上などの特徴に従いデータを整理し、誤用例を分析する。

1.3 用語説明

1.3.1 誤用の定義

誤用とは何かについて、研究者の間には様々な説明と解釈が見られる。迫田 (2002: 11) は、誤用には「エラー」と「ミステイク」の2種類があると述べている。その迫田によれば、「エラー」とはその事柄に関して一貫して間違える場合であり、「ミステイク」とは緊張などでうっかり言い間違える一過性の誤用となる。小柳 (2004: 54-55) は、「誤り (error) とは、繰り返し起こり、学習者なりに作り上げた体系的な規則に基づいて起きるもの」と説明している。また、于 (2012: 34) は、「『誤用』とは、『中間言語 (interlanguage)』における目標言語話者の殆どが統語論的なおかつ意味論的に加え、語用論上容認困難な言語表現のことである」と定義している。

誤用の定義に関する議論は様々あるが、本研究は「YUK コーパス」を用いるため、誤用か否かの判別は「YUK コーパス」の判定基準に従っている。「YUK コーパス」における誤用は于 (2017: 3) に従うと、「①ほとんどの日本語母語話者が認めていない用法、②ほとんどの日本語母語話者が不自然に思う用法、③文法的には大きな間違いがなくて意味もわかるが、日本語母語話者の表現習慣に合わない用法、④使用条件に合うかどうか (翻訳は筆者)」となる。この定義は于 (2012) の「誤用」の定義と同じであり、つまり日本語母語話者の表現習慣に合わない用法が誤用である。これ以降、誤用の箇所は「*」で示す。

1.3.2 誤用類型・誤用形態・誤用傾向

本研究で使用する「誤用類型」、「誤用形態」、「誤用傾向」という用語については下記のように定義する。

「誤用類型」：「YUK コーパス」から抽出した「添加型」の誤用例を「不使用」、「過剰使用」、「混用」の3種類に分け、この3種類の誤用パターンを「誤用類型」と呼ぶ。

「誤用形態」：3種類の「誤用類型」内に出現する接続詞の誤用の様相を「誤用形態」と呼ぶ。誤用形態は「*接続詞→Y」のように示す。

「誤用傾向」：日本語学習者が接続詞を誤って使用する特定の傾向を指す。

これらの定義に従い、本研究を進めていく。

1.3.3 誤用の規則性

本研究でいう「誤用の規則性」とは、学習者の接続詞に関する誤用において、一定の条件のもとで規則的な「誤用類型」が生じるという誤用の様相である。

1.4 本論文の構成

本研究の目的は、学習者の「大型」作文コーパス「YUK コーパス」を用い、学習者の「添加型」の誤用実態を明らかにしたうえで、その誤用が生じる規則性を解明することである。本論文は7章で構成されるが、各章で述べる内容は以下のとおりである。

第一章は序論である。本研究の目的、意義、研究資料、研究方法などを述べる。

第二章は、接続詞に関する先行研究を整理する。まず接続詞とは何かについて、先行研究で示されている接続詞の定義にもとづき、本研究の接続詞の定義付けを行う。次に、接続詞の分類に関する先行研究を整理したうえで、本研究で使用する接続詞の分類基準を明確にする。さらに、本研究で論じる「添加型」に関する先行研究を整理したうえで、先行研究で明らかにされていない課題を指摘する。

第三章は、「YUK コーパス」から抽出された誤用例を用いて、学習者が最も誤用しやすい接続詞が「添加型」であることを示す。第四章から第六章は、「添加型」の誤用について、各誤用類型の要因を中心に、誤用類型を不使用、過剰使用、混用の三つに分けて論じる。

第四章では、「添加型」の不使用について、「そして」「また」に焦点をあて論じる。本章では、まず「そして」「また」に関する不使用の誤用形態を整理し、その誤用傾向を形式上の

特徴から明確にする。次に、「そして」を中心として、意味上の特徴から不使用の誤用例における前後文の文脈関係を明らかにする。そして、その分析結果を踏まえ、誤用が生じる要因を考察する。

第五章では、「添加型」の過剰使用について、「そして」「また」「それから」「それに」に焦点をあて論じる。本章では、まず「そして」「また」「それから」「それに」に関する過剰使用の誤用形態を把握し、その誤用傾向を形式上の特徴から明らかにする。次に、「そして」を中心として、意味上の特徴から過剰使用の誤用例における前後文の文脈関係を分析する。そして、その分析結果を踏まえそれらの誤用が生じる要因を論じる。

第六章では、「そして」「それから」「それに」を中心に「添加型」の混用を論じる。混用は不使用と過剰使用と根本的に質が異なる。不使用と過剰使用は接続詞を用いるかどうかの問題であるが、混用は常に接続詞を用いている。そのため、「そして」「それから」「それに」には、他の接続詞と対の関係で規則的に誤用が行われている可能性が考えられる。したがって、本章では、まず「添加型」の混用に関する誤用形態を整理する。それを踏まえ、「そして」「それから」「それに」と最も混用されやすい接続詞との関係を見ていく。次に、「そして」「それから」「それに」の三つの「添加型」の関係を検討する。

第七章は結論である。本論文で行ってきた議論を総合的に考察し、学習者の「添加型」に関する誤用の規則性を見出し、本研究の成果と残された今後の課題を提示する。

第二章 接続詞に関する先行研究

本研究は、「添加型」の誤用実態に焦点をあて、誤用が生じる規則性を解明することを目的としている。本章では、接続詞の定義と分類を明確にするため、先行研究で述べられている定義と分類を整理したい。2.1 節では、先行研究における接続詞の定義を確認し、本研究での定義を明示する。2.2 節では、接続詞の分類について、先行研究を提示しながら、本研究での接続詞の分類基準を明確にする。2.3 節では、「添加型」に関する先行研究を見ていく。そして2.4 節では、これまでの「添加型」の研究の問題点を述べ、先行研究に残された課題を提示する。

2.1 接続詞の定義

接続詞の定義は一様ではない。信太 (1989) が述べるように、日本語の接続詞は多種多様であり、厳密な定義付けを行うことは困難である。一般には複合的な表現、副詞、名詞などを含め、接続語句や接続語、あるいは接続表現などといった言い方で接続詞は一括りにされる。接続詞とは、一体、何であろうか。本節では、先行研究における接続詞の定義を確認し、本研究での接続詞の定義を示す。

2.1.1 先行研究における接続詞の定義

文と文とが繋がって、文脈が形成されていく。その文と文とを繋ぐのが「接続語句」である (市川 1978 : 88)。ここでいう「接続語句」とは、「接続詞」、「接続詞的機能をもつ語句」、「接続助詞」、「接続助詞的機能をもつ語句」から成り (市川 1978 : 70)、「接続語句」は文と文、あるいは節と節の関係性を示している (市川 1978 : 52)。接続語句の中で中心となる接続詞について、市川 (1978 : 59) は「二つの表現の中間に位置して、両者を対立させ、その関係を示すことによって、二つの表現を接続する働きをもっている」と指摘している。田中 (1984 : 83) は、接続詞について、「前後の文や語句の関係を示す役割をもつ単語であるが、文の構成要素として眺めた場合、後続の語句に対しては、やはり、一定の限定関係すなわち『かかりうけ』の機能をもっている」と説明している。石黒 (2008 : 27) は、接続詞とは「独立した先行文脈の内容を受けなおし、後続文脈の展開の方向性を示す表現である」と述べている。さらに、井手 (1988 : 553) は接続詞について、「構文論的に類別される品詞の一。単独で一文節をなし、二つ以上の語・句 (文節・連文節) ・文・段落 (文章)、またはそれ相当の形式によって表現された叙述内容相互間を関係づけ、結び合わせる職能をもつ」と述べている。

2.1.2 本研究における接続詞の定義

前述のように、これまでに行われてきた接続詞の定義は様々である。それらの定義に従うと、意味論からは前後文を接続させる、構文論からは品詞の一つであるという共通性が見られる。したがって、本研究では、「接続詞」とは前後文の関係を示す役割をもつ品詞と定義する。この定義に従い、本研究は「YUKコーパス」から接続詞の誤用例を選び出す。

2.2 接続詞の分類

前節では、先行研究における接続詞の定義を整理し、本研究における接続詞の定義を示した。前述したとおり、接続詞は多種多様であり、様々な意味をもっている。そのため、接続詞の分類を見ておく必要がある。

2.2.1 先行研究における接続詞の分類

接続された文と文の意味関係から接続詞を分類する研究として、市川(1978)、森田(1987a)、田中(1984)、佐治(1987)、伊藤・阿部(1991)、佐久間(1991)などがある。以下、接続詞の分類についての先行研究を提示しながら、本研究における接続詞の分類基準を明確にする。

2.2.1.1 市川(1978)による分類

市川(1978: 89-93)は、文と文がどのような論理関係で繋がれているかを「文の接続関係」と呼び、それに注目して接続語句を8類に分類し、さらにその八つの類型の接続語句を三つのグループにまとめている。その際、順接型・逆接型は「二つの事柄を論理的に結びつけて述べる関係」を表すため、グループ1の「論理的結合関係」にまとめられている。添加型・対比型・転換型は「二つ(以上)の事柄を別々に述べる関係」を表すため、グループ2の「多角的連続関係」にまとめられている。そして、同列型・補足型・連鎖型は「一つの事柄に関して拡充して述べる関係」を表すため、グループ3の「拡充的合成関係」にまとめられている。

さらに、接続語句の中の接続詞について、市川(1978: 65-66)は前後文の意味関係から3類7種を類別している。表2-1は、市川の分類とそれぞれに含まれる接続詞を整理したものである。

表 2-1 市川 (1978) による分類

意味関係	接続種類	前後関係	下位区分	主な接続詞
二つの事柄を論理的に結びつけて述べるのに用いる。	1.順接	前文の内容を条件とするその帰結を導く。	①順当	だから・それで・したがって・それなら
			②きっかけ	すると・と
			③結果	かくて・こうして
	2.逆接	前文の内容に反する内容を導く。	④反対	しかし・けれども・だが
			⑤背反	それなのに・そのくせ・しかるに
			⑥意外	ところが・それが
二つ（以上）の事柄を別々に述べるのに用いる。	3.添加	前文の内容に付け加わる内容を導く。	⑦累加	そして・そうして
			⑧序列	ついで・つぎに
			⑨追加	そのうえ・それに
			⑩並列	また・ならびに
	4.対比	前文の内容に対して対比的な内容を導く。	⑪比較	というより
			⑫対立	そのかわり
			⑬選択	それとも・あるいは・または
	5.転換	前文の内容から転じて、別個の内容を導く。	⑭転移	ところで・ときに
			⑮課題	さて
			⑯区分	それでは・では
			⑰放任	ともあれ
	一つの事柄に関して拡充して述べるのに用いる。	6.同列	前文の内容を同等とみなされる内容を導く。	⑱反復
⑲根拠づけ				なぜなら・というのは
7.補足		前文の内容を補足する内容を導く。	⑳制約	ただし・もつとも
			㉑補充	なお・ちなみに

2.2.1.2 森田（1987a）による分類

森田（1987a：141-142）では、接続詞をそれがもつ意味から表 2-2 のように 8 類に分類している。

表 2-2 森田（1987a）による分類

類型	接続詞の例
並列	そして、および、かつ、ならびに、それから等
累加	また、それに、そのうえ、しかも等
選択	あるいは、または、もしくは、それとも等
順接	したがって、すると、それで、だから、ゆえに等
逆接	が、けれど、しかし、でも、ところが等
説明	すなわち、つまり、例えば、要するに等
補足	ただし、だって、なぜなら等
転換	さて、では、ときに、なお、もつとも等

2.2.1.3 田中（1984）による分類

田中（1984）は、「接続表現」を、個々の文体的・場面的な使用領域の差異と機能用法という両方の視点から整理している。その中で、田中は、接続の機能について文や語句の結び付き方の視点から、「対等の接続」と「承前の接続」と「転換の接続」といった 3 種類にまとめることのできる可能性を示唆している。また、「対等の接続」は「列挙」「累加」「選択」「同一」に分けられ、「承前の接続詞」は「経過」「前提」「仮定」「理由」「説明」「逆節説」「例示」「対比」「限定」に分けられ、「転換の接続」は話題の「しめくくりをつけ」と「切り出し」に分けられている。田中の分類は接続詞だけではなく、接続助詞も含んでいる。本研究は接続詞のみを対象としているため、田中による接続表現の分類から接続詞だけを抽出し、表 2-3 に示す。

表 2-3 田中（1984）による分類

		← 普通 →			かたい 文語的	
		うちとけた 会話的	話ことば的	書きことば的		
対 等 の 接 続	列挙				オヨビ ナラビニ	
	累加		ソレカラ ソレニ	ソノウエ シカモ	ソシテ マタ サラニ	クワウルニ アマツサエ カツ
	選択				マタハ アルイハ	モシクハ ナイシハ ハタマタ
	同一			ツマリ	スナワチ	

続表

承前の 接続	経過	デ	ソウスルト ソウシテ コウシテ	ソレデ ツギニ	スルト ソシテ	カクテ ツイデ
	前提	ダトスルト		トスルト		
	仮定	ダッタラ ナラ デナイト デナケレバ	ナラバ	サモナイト サモナケレバ		シカラバ サレバ サモナクバ
	理由	ナノデ ダモンデ	ダカラ	シタガッテ	ツイテハ ヒイテハ	ユエニ ヨッテ
	説明	ダッテ ナゼッテ タダ		モットモ	トイウノハ ナゼナラ ナオ	ナントナレバ ナゼナレバ タダシ
	逆説	ケド ダガ デモ ナノニ	ダケド トコロガ ソレナノニ	ケレドモ	シカシ ガ トハイエ ニモカカワラズ	シカシナガラ サリトテ サレド シカルニ
	例示			タトエバ	オナジク	チナミニ
	対比	ヤッパリ カエッテ	セメテ ナカデモ	ヤハリ マシテ	イワバ	イウナレバ マシテヤ
	限定		イウマデモナク	トクニ コトニ	トリワケ ワケテモ	ナカンズツ イワンヤ
	転換の 接続	しめ くく り	ナニニシロ	イズレニセヨ イズレニシロ ソレハソレトシテ	トニカク トモカク イズレニシテモ ナニニシテモ	
切り 出し		ソレハソウト ジャア	トコロデ	サテ ソコデ デハ	トキニ	マズハ ソモソモ

2.2.1.4 佐治（1987）による分類

佐治（1987）は、「接続詞」・「接続語」の品詞論と構文論における位置付けを明らかにすることを目的としたものである⁴。佐治の分類によれば、接続詞は、文中の項を結び合わせるものを「文の内がわの接続詞」と、文および段落を結び合わせるものを「文の外がわの接続詞」との2種類に分類される。佐治の分類は表 2-4 のとおりである。

表 2-4 佐治（1987）による分類

グループ		代表的な接続詞		関係のあり方			
文の内がわの 接続詞	a	並立	ならびに、および	共存			
	b	並立	また、そして			選択	
			あるいは、または、もしくは、それとも、ないしは、はた、はたまた				
	c	注釈	つまり	すなわち		言い換え	
				というのは、なぜなら		説明	
				要するに		要約	
ただし、もつとも			但し書				
		たとえば、なかんずく	例示				
文の外がわの 接続詞	d	列叙	そして、おまけに、しかも、また、そのうえ、それから、それに、なお、かつ、しこうして、しかのみならず、ついで、で	添加	順接		
			e	条件		それなら、そしたら、さらば、しからば	仮定
	f	条件				すると	確定
						それでも	仮定
	g	条件	でも	確定			
h	条件	しかし、しかしながら、だが、だけど、けれども、ところが、それなのに、かかれど、されど、さるに、しかるに	逆接				
	j	転換	さて、ところで、ときに、そもそも、それ				

⁴ 佐治（1987：141）に「接続詞の分類」の表があるが、これは接続詞の意味と用法による分類とされている。佐治（1970：38-39）の「接続詞の分類」を引用したもの。「文の外がわの接続詞」を「話題の内がわの接続詞」と「話題の外がわの接続詞」に分けている点に特色がある。

2.2.1.5 伊藤・阿部（1991）による分類

伊藤・阿部（1991）は、実験で得た結果から接続詞の分類を試みたものである。大学生 30 人に二つの文からなる文章を 45 種与え、二つの文の間に接続詞が必要であるかどうかを 7 段階で評価させるとともに、適切と思われる接続詞を選択させ、クラスター分析によって交換可能性の高い接続詞を分類している。表 2-5 に示した 6 類型がその結果である。

表 2-5 伊藤・阿部（1991）による分類

反予想型	もっとも・ただし・でも・ところが・だが・しかし など
確認型	ようするに・つまり・すなわち・なぜなら・とにかく など
順接型	それで・そこで・だから・そのため・したがって・すると など
新話題型	では・それでは・ところで・さて・たとえば など
累加型	それから・そして・しかも・さらに・また・いっぼう など
対比型	それとも・あるいは

2.2.2 本研究における接続詞の分類

以上、先行研究における接続詞の分類を見てきた。多様な接続詞の分類が見られるが、それらは個々の研究者の研究目的に応じたものであった。田中（1984）の「転換の接続」であるか否かという分類基準、佐治（1987）の「話題の外がわ」なのか「話題の内がわ」なのかという分類基準、伊藤・阿部（1991）の 2 文間で使用できるかどうかによる分類がそうである。そのため、どれが正しい分類かを判断することは容易ではない。

しかし、文章中の連続する 2 文間の接続関係の指標に注目して、接続詞を意味機能によって分類している市川（1978）の議論は説得力がある。なぜなら、ほとんどの先行研究は市川（1978）の分類に従って接続詞の分類を行っていることが西（1995）によって指摘されたからである。西は、新聞社説における接続詞の出現状況調査において、佐久間まゆみ（1983）の分類に佐治（1970、1987）と田中（1984）の分類を加え、それら三つの接続詞に関する分類名称の比較を検討している。その結果について、西（1995：85-87）は「諸説中最も多く使われている接続詞の名称が、『累加型』以外はすべて市川案と一致していることがわかる」と述べている。したがって、市川（1978）の分類は分かりやすく、しかも見てもすぐ理解できるよくできた伝統的な分類であり、教科書等を含めて、多くの接続詞分類がこれをもとにして分類している。

その市川（1978）の分類を踏まえ、本研究における接続詞の分類基準を表 2-6 で示す⁵。本研

⁵ 市川（1978）の分類は伝統的な分類であるが、接続詞の分類は研究者によって異なる。例えば、「そして」はその意味機能から見れば、「前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる」という機能をもっている。

究では、第三章で行う「大型」コーパスを用いた接続詞の誤用実態の分析と、第四章から第六章で行う「添加型」の不使用・過剰使用・混用の分析を試みる際には、この表2-6の分類基準を用いることとする。

表 2-6 本研究における接続詞の分類基準

接続類型	主な接続詞の例
順接型 ⁶	前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型。
	だから・ですから・それで・したがって・そこで・それなら・そのため・すると・と・かくて・こうして
逆接型	前文の内容に反する内容を後文に述べる型。
	しかし・けれども・だが・それなのに・しかるに・そのくせ・ところが・それが
添加型	前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型。
	そして・そうして・ついで・つぎに・それから・そのうえ・それに・さらに・しかも・また・ならびに
対比型	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型。
	というより・そのかわり・それとも・あるいは・または
転換型	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型。
	ところで・ときに・さて・それでは・では・ともあれ
同列型	前文の内容を同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型。
	すなわち・つまり・要するに
補足型	前文の内容を補足する内容を後文に述べる型。
	なぜなら・というのは・ただし・もともと・なお・ちなみに

2.3 「添加型」に関する先行研究

2.1節では接続詞の定義を示し、2.2節では接続詞の分類について代表的なものを挙げた。本節では、「添加型」に関する先行研究における現時点での課題を提示する。馬場（2010）の分類⁷を参照し、ここでは「個別の接続詞の用法・使い分けなどを扱った文献」と「接続詞の誤用

そのため、高橋（2008）では「そして」は「順接型」に分類されている。市川の分類には課題もあるが、西（1995）が述べているように、接続詞の分類のほとんどは市川の分類と一致している。そのため、本研究は市川の分類を採用し、本研究では接続詞の分類に関する議論は行わないこととする。

⁶ ここで言う「...型」は市川（1978）の接続語句を表す「...型」と異なり、接続詞だけを指す。

⁷ 馬場（2010：419-420）は、日本語教育における接続詞に関わる学習指導及びその習得を主に扱った文献は、接続詞習得についての研究内容にもとづいて3種類に分類されると説明している。その分類に従えば、第一は「日本語学習・指導を特に念頭において、個別の接続詞の用法・使い分けなどを扱った文献」、第二は「読

を扱った文献」という2領域の先行研究を概観する。

2.3.1 個別の接続詞の用法・使い分けを扱った文献

接続詞を適切に使用するには、個別の接続詞について、その意味用法や使用上の制約、さらには類義表現との使い分けなどを正しく理解しておかなければならない。そのためであろう、「添加型」に関する研究は個別の接続詞の用法やその使い分けに焦点をあてたものに留まっている。1980年以前に接続詞の意味と用法を扱った文献としては、「それから、すると、では」を取り上げた栗原(1968)、並列表現の用例に注目し調査を行った水谷・田中(1972)がある。

1980年以降のものとしては、接続詞類別に中級読解教材における接続詞の類義表現の違いを分析した北條(1980)と柴田(1986、1988)、「機能-意味的な観点」から「そして」及び「それから」等の意味の記述的研究を行ったひけ(1985、1996a、1996b)と比毛(1989)、副詞と接続詞に共通した「また」の意味・機能を考察した天野(1994)や岡本(1996)がある。そのほかにも、接続詞の構文的特徴などの観点から接続詞「そして」と「それで」と「それから」を論じた浜田(1995)、話し言葉における接続詞「そして」と「それで」と「それから」を論じた福島(1997)がある。

2000年以降のものとしては、意味用法から「そして」が日本語初級で導入するのに適する接続詞かどうかを検討した石黒(2000)、類似した接続詞である「それに」と「そのうえ」、「しかも」を扱い、前文に含まれる情報に後文の情報を添加する接続詞を分析した伊豆原(2004)、「そして、それから」及び「それに、そのうえ」の4語の中国語訳との対照を通じて、それら4語の使い分けを明らかにし、それらの意味に関する異同を考察した楊・馬場(2004)がある。

比較的新しい研究としては、マンガで用いられる「そして」を扱った川端(2006)、「並べたて」の特徴にもとづいて「あるいは」と「また」を扱った浜田(2006)、「添加」の機能にもとづいて「そして」と「それから」を扱った森山(2006)などがある。以下、代表的な先行研究を詳述する。

2.3.1.1 栗原(1968)の研究

栗原(1968)は、「それから」の用法について説明した。「それから」には、具体的行為を時間的順序に従って述べる「順序的用法」と思考の流れに従って思い付くままに言い添える「附加的用法」があることを指摘している。そして、順序的用法の指導では「行動動作的な動詞や、

解指導や作文指導などの指導の際の一つの観点として、接続詞に着目して指導法などを検討した文献」、第三は「接続詞の誤用や習得過程を扱った文献」となる。

急移行の動詞など、時の制約を受け易い動詞」を選び、附加的用法の指導では「形容詞、性状の動詞、存在を示す動詞など」を選ぶのが望ましいとしている。「それから」の前文と後文は独立した二つの存在であり、論理的かつ必然的な関係がないと栗原は説明している。

2.3.1.2 ひけ (1985) の研究

ひけ (1985) の研究は、接続詞「そして」と「それから」の文中での働きを分析したものである。ひけは、以下のように「そして」と「それから」の相違を説明している。「そして」は、複数の文が連結し主体の継起的行動を表す場合には、一つ一つの動作が全体的な行動の一要素として関係づけるために用いられる。一方、「それから」は一つ一つの動作を実際の時間的順序に従って連結させるために用いられる。さらに、両者の働きとして、「それから」は「動作ごとに意味的な完結性がつよく、『そして』のばあいのように統一された行動をつくりだすわけではない (p.53)」と述べている。並列的な関係の文についても同様である。対象を複数の部分に分けられたそれぞれの文の場合、「そして」を用いることで連結し全体像を作り出すことができ、「それから」は前文の内容とは関係性がない文を単につけだす機能をもつと述べている。

2.3.1.3 浜田 (1995) の研究

浜田 (1995) は、「そして」と「それで」と「それから」の三つを後文の表現類型に注目し比較したものである。「そして」「それで」「それから」は演述型の文が後文にきても問題はないが、「そして」の後ろに疑問型や情意表出・訴え型の文が接続することや、「それから」の後ろに感嘆型の文が接続することには問題あるいは制限があると述べている。

2.3.1.4 岡本 (1996) の研究

岡本 (1996) は、「また」(接続詞と副詞)を、(1)「前に述べた内容(動作・状態)と同じ内容(動作・状態)が、再び起こることを示す」、(2)「ある事柄と同様であることを示す」、(3)「同一話題内で、今まで述べた事柄とは別の事柄を提示する」、(4)「驚き、驚嘆などの感情を強調する」と四つの用法に大別したものである。「また」には、その構文的特徴として「『同様』を示すパターン」や「感情を強調するパターン」、「『ふたたび』のニュアンスを示すパターン」、「『同一話題内の別観点』を示すパターン」があると述べている。そして、「また」は「内容を『事柄化』し、同一線上に並べ、以前にあった観点の定位点を移動させる (p.45)」という本質的な機能を有すると述べている。

2.3.1.5 石黒（2000）の研究

石黒（2000）は、「そして」が日本語初級で導入すべきかどうかを検討したものである。ここで指摘されたのは、「そして」が、幅広い用法（並列、因果関係〔結果、結局〕、時間〔経過、継起〕）を有すること、単なる添加でなく後続内容が「決定的」な事態（それ以上進めない最終的な到達点）を表すこと、論文と講義などの一方向的な語り（書き言葉的なもの）の中で多用されることなどである。そして、石黒は、初級では、話し言葉で用いる状況においては「それから」がまず導入されるべきであるが、それと同時に、書き言葉も重要であるという立場から「そして」も早い段階で導入されるべきであると述べている。その際には、「そして」がもつ独自の決定的な事態を表すという特徴や、話し言葉ではあまり用いられないという特徴に留意する必要があるとも述べている。

2.3.1.6 森山（2006）の研究

森山（2006）は、「添加」は「同類異項目性」をもち、「そして」と「それから」に共通する機能は「大きくは同じつながりのことでありながら、その下位情報としていわば『次のこと、別のこと』という『異項目』としての次の頭出しをする標識（p.193）」であると述べている。また、森山（2006）は「文脈共通性」及び「異類・同類」に注目し、図 2-1 のように「添加」について細かく分類している。それに従うと、「それから」は「継起性を明示する」という基本的な役割をもち、「そして」は「明確な継起性があるわけではなく、説明的な文が後続するような場合」や「広い意味での付帯的同時的な接続」の場合にも使用されることなど、さまざまな機能の違いがあることになる。

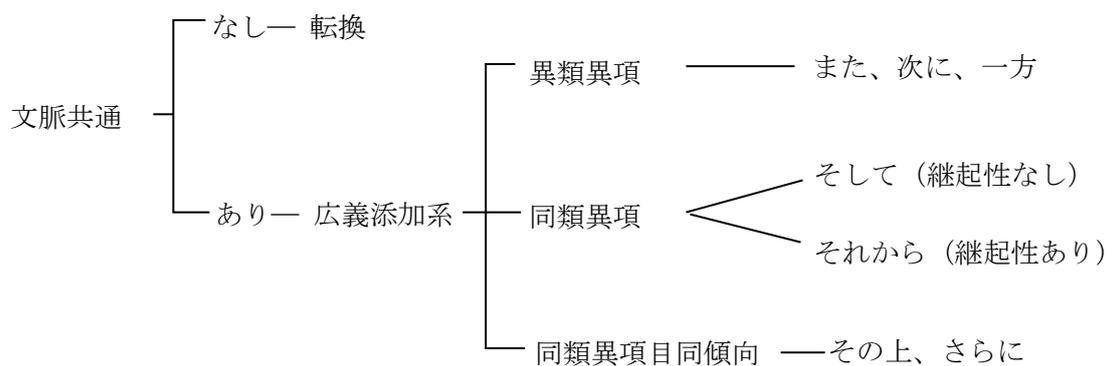


図 2-1 森山（2006）の「添加」に関する分類

2.3.2 接続詞の誤用を扱った文献

接続詞の誤用を扱った初期の文献では、西谷（1973）の「そして」の誤用研究がある。遠藤（1978）と佐藤（1992）は、学習者の誤用例を用いて誤用要因を考察し、文章全体の意味と関連させた接続詞の指導の必要性を指摘している。徳田（1995）は誤用例を示すとともに練習法を提案し、市川（1998）は体系的に接続詞の誤用を分析している。また、市川（2000）は接続詞の誤用の要因や指導の留意点を示し、体系的で詳細な誤用例文小辞典を作成している。守屋（2000）は誤用回避という観点から「そして、それから」を扱っている。さらに、日本語母語話者と比較して学習者の接続詞使用の特徴を明らかにした江後（2007）がある。

接続詞の誤用研究には、母語話者別に分析を行った文献も多い。渡邊（1996）は、韓国語や中国語やドイツ語母語話者の日本語の談話展開について分析をしている。中国語母語話者を対象とした研究としては、財部（2001）が中国語母語話者の日本語レベル別の問題点を見出し、浅井（2003）が中国語母語話者の論説的文章に焦点をあて、田代（2007）が中国語母語話者の意見文を対象として分析している。少数の留学生を対象とした接続詞の誤用研究としては、倉持・鈴木（2007）がある。以下に代表的な接続詞の誤用研究を詳述し、説明を加えたい。

2.3.2.1 西谷（1973）の研究

西谷（1973）によると、「そして」の正しい用法は、動作を表す内容の文節と文節・文と文を接続するものとなる。「そして」の適切な用法とは異なり、近年（1970年代）は「本、鉛筆そしてノート（p.71）」のような語と語を繋ぐ使い方が話し言葉に多く用いられている。しかし、「そして」は「そうして」から派生した語であり、前にある動作を指し示すために本来用いられるものである。そのため、「本、鉛筆そしてノート」のような「そして」の使用は本来なら適さないと指摘している。さらに、このような「そして」の使用方法について、西谷（1973：72）は「従来の日本語の表現にはなかったもので、外国文学の移入により、いわゆる翻訳調が生まれたもの」と考えている。そして、このような場合、西谷は「それに」を用いることで解決できると述べている。

2.3.2.2 市川（1998、2000）の研究

市川（1998）は、接続詞文に見られる学習者の誤用類型として「接続詞そのものに関する誤り」、「S2の主題・主語の脱落」、「接続詞のうしろの副詞・副詞句の脱落」、「S2における助詞の不適切使用」、「S2の文末表現に関する誤り」、「S1、S2の文体に関する誤り」を示している（S1は先行文、S2は後続文を表す）。さらに、接続類型ごとに混同の多い接続詞や間違

って使用されやすい接続詞などの誤用の傾向を指摘するとともに、接続詞ごとに誤用の傾向や用法の特徴を示している。また、市川（2000）は、学習者の日本語初・中級レベル前半で習う接続詞30語・副詞50語を対象として、誤用例を提示しながら談話レベルの誤用と指導法を詳細に説明している。そのうえで、語ごとに関連する誤用の項目や誤用例（原因別に「脱落・付加・誤形成・混同・位置・その他」に分類）、正用例、誤用の傾向（誤用要因の分析説明）、指導上の留意点を示している。接続詞として取り上げられた語は、「いわば、結局、けれども、さえ、さらに、しかし、しかも、したがって、実は、すなわち、すると、そこで、そして、そのうえ、それから、それで、それでは、それに、だが、だから、つまり、ですから、でも、というのは、ところが、ところで、また、または、もっとも、要するに」である。

2.3.2.3 守屋（2000）の研究

守屋（2000）は、日本語初級教科書では「そして」と「それから」の取り上げ方が不十分であることに加え、例文も不自然なものが見られることと、学習者の現状として二つの接続詞の使い分けに困難が見られることを指摘したものである。「そして」と「それから」の適切な使い分けには、日本語教育への応用および誤用の回避という観点から、「そして」の前後文の「ひとまとまり性」、「それから」の「分離性」ならびに発話時や談話時において話者が想起したことを「言い足す」用法を理解することが必要であると述べている。

2.3.2.4 浅井（2003）の研究

浅井（2003）は、市川（1978）の文の接続関係による接続表現の類型法にもとづき、日本語母語話者と中国語母語話者上級日本語学習者の作文における接続表現を分類し、両者の接続表現の特徴をまとめたものである。学習者のほうが接続詞の使用数およびその種類が多く、これは母語話者が接続詞を使用しない場合でも学習者は接続詞を使用するためであると論じている。

2.3.2.5 江後（2007）の研究

江後（2007）は、上級レベルの日本語学習者が論説的な文章を書く際に必要な接続詞や習得が難しい接続詞を明らかにするために、日本語母語話者（朝日新聞『私の視点』、朝日新聞『社説』、大学受験用小論文問題集の解答例）と日本語学習者の文章に現れた接続詞を調査したものである。接続詞の使用率は「小論文>学習者>視点>社説」の順であり、日本語学習者の特徴として特定の語（「しかし」「また」「たとえば」等）を多用する傾向があること、前文と後文の論理的な関係を把握する訓練が不足しているため、「そして」の誤用が最も多いことが

明らかにされている。

2.3.2.6 田代（2007）の研究

田代（2007）は、論理展開に関わる接続節と接続詞に注目したものである。中級レベルの学習者と日本語母語話者の意見文を比較分析し、学習者の文章に使用される接続表現の量の特徴を考察している。田代は、t検定を行った結果、文と文の接続を示す接続詞の平均使用量は学習者のほうが母語話者より多く、5%水準で有意差が認められたと報告している。そして、学習者は逆接的接続や同列・補足の接続詞の使用が母語話者より少ないため、学習者の主張は制限され反駁等の論理展開が母語話者ほど多くないことが明らかになったと述べている。

2.4 先行研究の問題点と課題

2.3節では、「添加型」の用法や誤用に関する先行研究を概観した。以下では、これらの研究の問題点と課題について指摘しておきたい。

これまでの先行研究は、個別の接続詞の使い分けや接続詞の誤用に注目したり、使用実態を調査したり、様々な視点から進められている。先行研究によって接続詞の誤用実態が徐々に明らかにされてはいるが、誤用の現象と傾向を指摘するに留まり、誤用の規則性を解明する、あるいは誤用を改善するための研究は少ない。

日本語の「添加型」については、すでに多くの研究が行われている。ひげ（1985）、浜田（1995）、森山（2006）などの研究がその代表的な例である。それらの先行研究では、「そして」や「それから」などの「添加型」の用法や使い分けが異なる視点から分析と説明がなされている。しかしながら、個別の接続詞を指摘するに留まり、体系的な研究にまで立ち入っていない。そして、これまでの誤用の視点は常に文法研究者の視点を中心であり、誤用を生じさせる学習者に視点を置き、誤用の実態とその規則性を論じることはなかった。上述した用法分析の限界を乗り越えるためには、用法分析に加え形式上の特徴なども視野に入れ、学習者の視点から誤用の規則性を明らかにすることが求められる。

研究方法にも問題があった。先行研究は、学習者と日本語母語話者が作成した特定のジャンルの文章を扱い、かつ研究対象の誤用例は「典型」⁸例と言えるものではなく、限定された被験者やアンケート調査から得られたものであった。学習者の誤用実態を捉えるためには、「大型」コーパスから抽出した学習者の誤用例を用いた分析が必要となる。

⁸ 于（2012：33）によると、「『典型』とは、誤用の頻度が最も高く、なおかつ傾向性を示すことができるもの」となる。

第三章 接続詞の誤用分布

本章は、学習者の接続詞の誤用分布を明らかにしていく。3.1 節では「YUK コーパス」から接続詞に関するすべての誤用例を抽出し、接続詞の誤用全体像を把握する。3.2 節では学習歴別における接続詞の誤用全体像を把握する。3.3 節では接続詞の誤用全体像から「添加型」の誤用類型を明らかにする。3.4 節では、前節で明らかにした「添加型」における誤用類型に従い、本研究の研究対象を示す。

3.1 接続詞の誤用全体像

2.2.2 節で定義した接続詞の分類に従い、「YUK コーパス」から接続詞に関する誤用例をすべて抽出し整理すると、図 3-1 のようになる。（「n」は総例数を表す。以下同様）

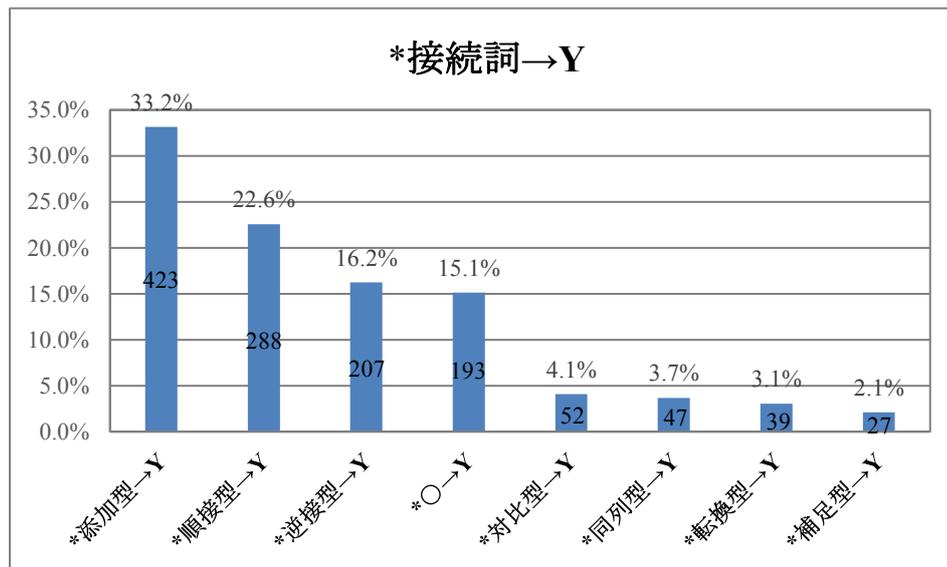


図 3-1 接続詞の誤用全体像 (n=1276)

図 3-1 から見てとれるように、種類を問わない正用の総称を Y とすると、誤用数の高い順に「*添加型→Y」>「*順接型→Y」>「*逆接型→Y」>「*○→Y」>「*対比型→Y」>「*同列型→Y」>「*転換型→Y」>「*補足型→Y」のように列記することができる。

各類型の接続詞の例を (7) から (22) に 2 例ずつ列挙する。「*添加型→Y」が (7) と (8)、「*順接型→Y」が (9) と (10)、「*逆接型→Y」が (11) と (12)、「*○→Y」が (13) と

⁹ 学習者の学習歴については、于 (2015) によると、3 ヶ月以上 1 年未満、1 年以上 2 年未満、2 年以上 3 年未満、3 年以上 4 年未満、4 年以上 5 年未満、5 年以上 6 年未満、6 年以上 7 年未満といった分類が行われている。4 年以上 5 年未満、5 年以上 6 年未満、6 年以上 7 年未満が書いた作文の数は少ないので、この三つの学習歴については「4 年以上 7 年未満」にひとまとめにして考察する。

(14)、「*対比型→Y」が(15)と(16)、「*同列型→Y」が(17)と(18)、「*転換型→Y」が(19)と(20)、「*補足型→Y」が(21)と(22)である。

- (7) 大都会で就職や勉強をしている人が家族と一緒に春節を過ごすために、新年の前日、一斉に家に帰る。＜*そして→だから＞交通は混乱し、家に帰ることも困難になる。
- (8) は、政府の政策の恩恵を十分に享受することができるのである。所得が増えると同時に、生活の負担は減少し、＜*また→O＞入国・出国の新しい管理制度のもとで、不法就労も減りつつある。それにより、外国人労働者の犯罪もゆっくり…
- (9) 教養がある人こそその美しい言葉が使える。その点では、平等主義と民主主義とはあまり対立しない。＜*だから→したがって＞、田中氏の見解は極端な部分を持つ。敬語は使う必要があると思う。
- (10) 一度に借用されたのではなく、中国社会の変化とともに次々と引用されてきたのである。＜*それで→そのため＞、全面的な借用より分散的な引用が多いのである。
- (11) 実際に、勉強は忙しいです。日本語も数学もみな難しいです。いつも、私たちは十二時ごろに寝ます。＜*しかし→そして＞、私たちはいつも六時ごろ起きます。だから、授業中私たちは本当に疲れます。
- (12) 読書が好きではなくて普段はあまり本を読んでいない。＜*それなのに→だから＞、愛読書について書こうとした時、何をどのように書いたらいいか迷った。
- (13) 今は幅広くなって、かわいくてきれいな物を全部“萌”という言葉を使って形容することができる。＜*O→一方＞中国語の“萌”は二次元、三次元と関わらず、可愛いものを形容するだけである。
- (14) 本国において採用される働き方を分析し、他の国の雇用方式が持っている有利さを研究することは、企業＜*O→及び＞国家の利益を向上させる上で重要である。
- (15) まず、多数の流行語は時代の特色を反映し、人々の共通した心の声が描かれ、＜*あるいは→また＞、衝撃的な影響力を見せ付ける社会的な事実を示している。
- (16) 子供にはスマートフォンの値段が高い。＜*それとも→さらに＞、勉強に対して悪い影響がある。だから、子供にスマートフォンは必要ではない。
- (17) 理学学科を設置し、ハイテックの分野に踏み込めるため女性人材を提供する女子学院も積極的に創立すべき。＜*すなわち→O＞日本の女子大学で家政科のような生活類の学科を主な学科として設置されている大学も、国際的に向いている…

- (18) また直接食べ物の旨みを表現するオノマトペがあり、その食感については<*例えば→○>、「ぷりぷり海老マヨ」、「シャキシャキ大根サラダ」、…
- (19) 私は過去を見て、成長する方法を学習します。私は非常に無知ですが、善悪を区別することはできません。<*さて→だから>、私の家族や友人を守るために成長を学びます。後、私は一生懸命勉強するつもりです。
- (20) 私は趣味をたくさん持っています。たとえばバドミントンをすること、映画をみると、音楽を聞くことです。<*ところで→ちなみに>、私の一番好きな歌手は韓国人です。
- (21) 夢がかなった。だからといって、これで終わりを迎えたわけではなく、むしろスタートを切ったばかりである。<*なお→これから>、大学を卒業して、仕事を探すのではなくて、日本へ行って大学院で勉強しつづけたいと思う。
- (22) 公害が現れるのは、<*なぜなら→○>人間が生活と生産する時なので、汚染問題はあまり気にならない。

3.2 学習歴による接続詞の誤用全体像

3.1節では、学習者の日本語学習年数に関わらず、学習者全体に観察される接続詞の誤用全体像を見てきた。しかしながら、学習者の言語学習には「化石化」¹⁰といった現象が存在する。言語学習の化石化といった現象を把握するためには、学習歴別の誤用データが不可欠である。本節では、学習歴別の接続詞の誤用数を算出し、学習歴における接続詞の誤用全体像について考察したい。

¹⁰ 迫田 (2002 : 29) によると、化石化 (fossilization) とは「ある項目が誤用のまま改善されずに残る現象」である。

図 3-2 は、学習歴が 3 ヶ月以上 1 年未満の学習者における接続詞の誤用全体像である。

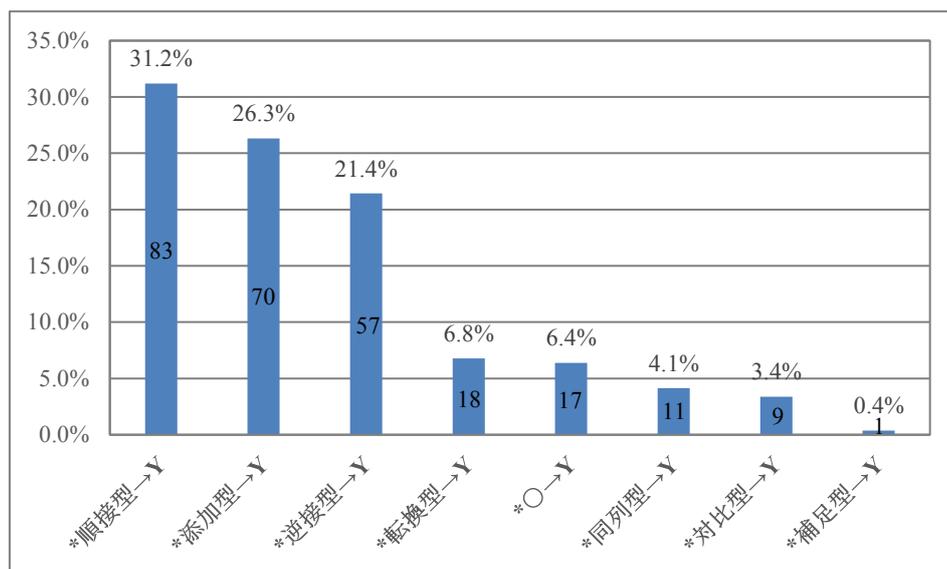


図 3-2 学習歴 3 ヶ月以上 1 年未満 (n=266)

図3-3は、学習歴が1年以上2年未満の学習者における接続詞の誤用全体像である。

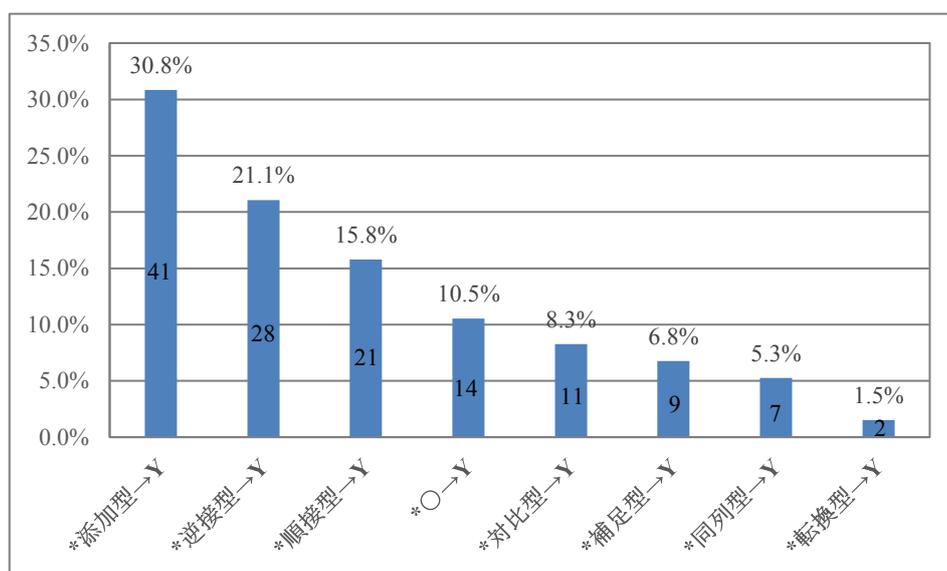


図 3-3 学習歴 1 年以上 2 年未満 (n=133)

図3-4は、学習歴が2年以上3年未満の学習者における接続詞の誤用全体像である。

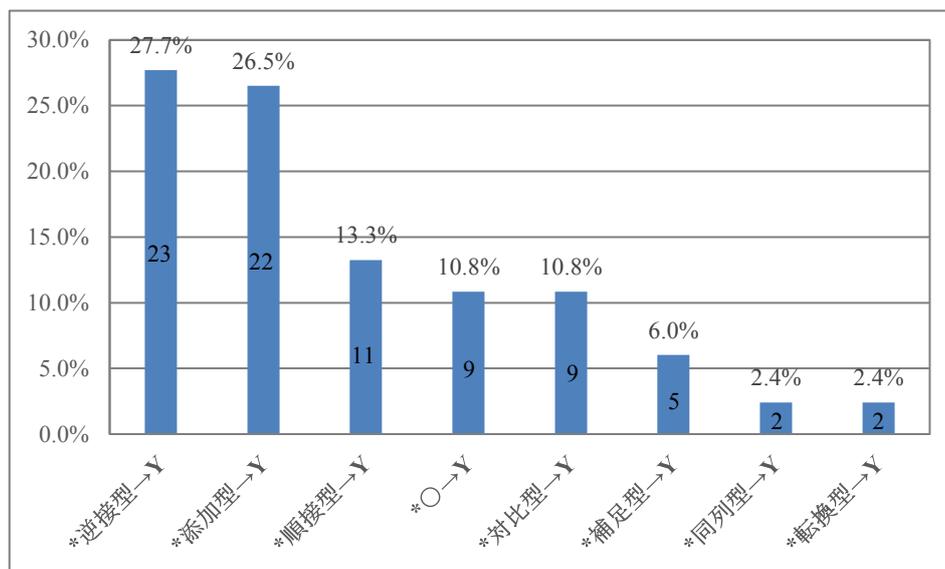


図 3-4 学習歴 2 年以上 3 年未満 (n=83)

図3-5は、学習歴が3年以上4年未満の学習者における接続詞の誤用全体像である。

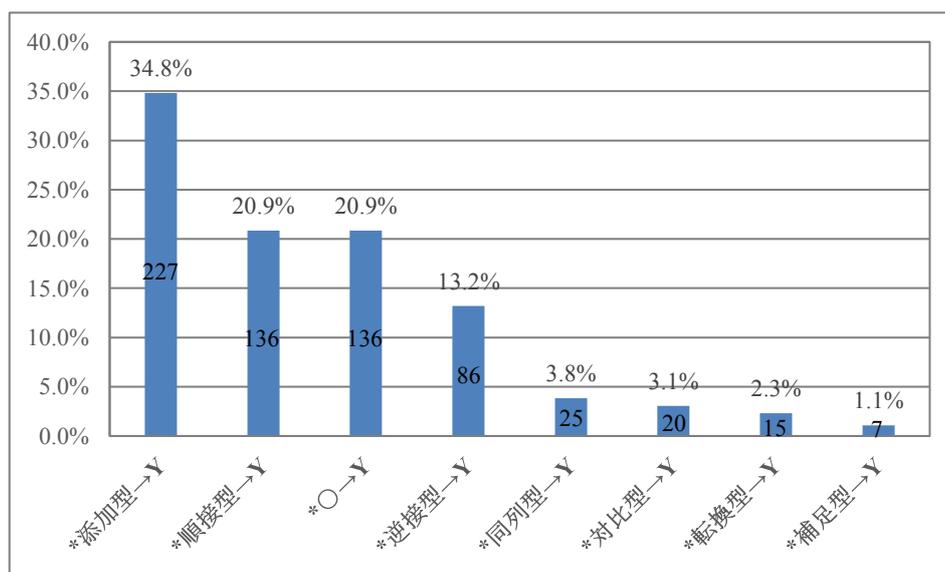


図 3-5 学習歴 3 年以上 4 年未満 (n=652)

図3-6は、学習歴が4年以上7年未満の学習者における接続詞の誤用全体像である。

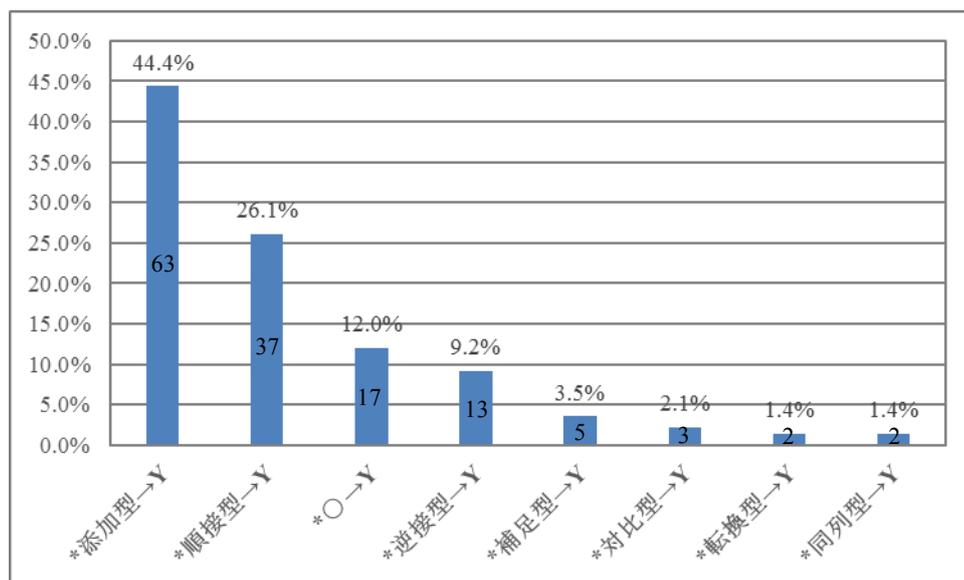


図 3-6 学習歴 4 年以上 7 年未満 (n=142)

図 3-2 から図 3-6 を一つの図にまとめて示すと、図 3-7 のようになる。

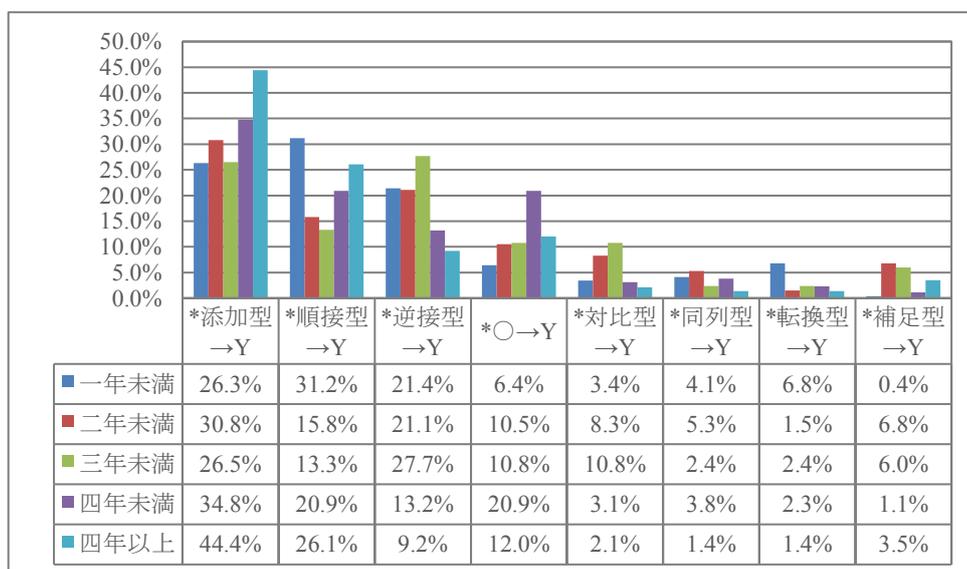


図 3-7 学習歴ごとに見られる接続詞の誤用全体像 (n=1276)

図 3-7 が示すように、「YUK コーパス」に出現した接続詞の中で、繰り返し誤用が起きているのは「添加型」「順接型」「逆接型」である。その中でも学習歴が高くなるにつれて、誤用の出現率が増えていくのは「添加型」であり、この事実は「添加型」の学習の困難さを端的に示している。すなわち、学習者は「添加型」「順接型」「逆接型」の意味用法を正しく理解せず、その誤用を認識しないまま繰り返していることになる。

接続詞の誤用全体像と学習歴における接続詞の誤用全体像を通じて、「添加型>順接型>逆接型」の順に接続詞の誤用が生じやすいことが明らかになった。そのため、本研究では、最も多く誤用されている「添加型」を研究対象とする。本研究の接続詞の分類基準によると、「添加型」は「そして、そうして、ついで、つぎに、それから、そのうえ、それに、さらに、しかも、また、ならびに」が該当する。

3.3 「添加型」の誤用類型

本節では「添加型」の誤用実態について説明したい。「YUK コーパス」から抽出した「添加型」の誤用例は、大きく3種類に分けられる。

「*○→添加型」＝「不使用」：「添加型」を使用しなければならないにもかかわらず、学習者が使用しないことによって生じた誤用。

「*添加型→○」＝「過剰使用」：「添加型」を含め接続詞を使用してはいけないにもかかわらず、学習者が「添加型」を過剰に使用したことによって生じた誤用。

「*添加型→Y」＝「混用」：「添加型」以外の接続詞あるいはある「添加型」を使用する方が適切であるにもかかわらず、「添加型」を使用することによって生じた誤用。

本研究は、上述した3種類の誤用類型ごとに出現数を集計した。そして、誤用の全体数から各誤用類型の割合を計算したうえでその誤用順位を表すと、図3-8のようになる。図3-8が示すように、「添加型」の誤用は491例あり、そのうち不使用は66例、過剰使用は145例、他の接続詞などとの混用は280例である。

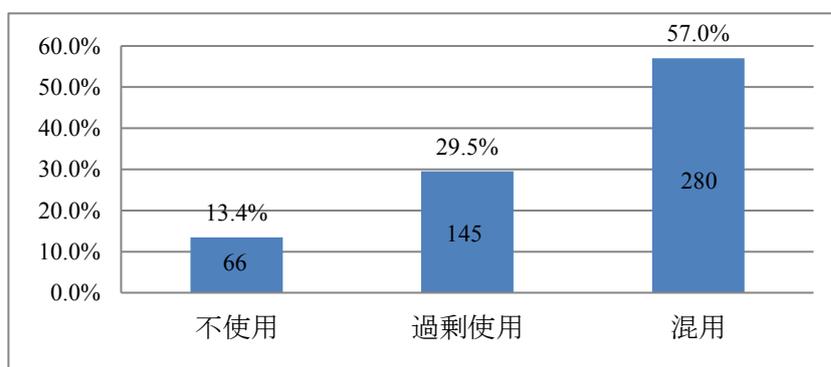


図3-8 「添加型」の誤用類型 (n=491)

「YUK コーパス」に現れる「添加型」は、「そして¹¹、また、それから、そのうえ、それに、つぎに、しかも」である。それ以外の「ついで、さらに、ならびに」は1例も現れていない¹²。以上を踏まえ、縦軸に接続詞、横軸に誤用類型を置き「添加型」の数と割合を示すと、表 3-1 のようになる。

表 3-1 「添加型」における誤用類型の分布

接続詞	不使用	過剰使用	混用
そして	32 (48.5%)	69 (47.6%)	95 (33.9%)
また	27 (40.9%)	26 (17.9%)	36 (12.9%)
それから	4 (6.1%)	20 (13.8%)	66 (23.6%)
そのうえ	1 (1.5%)	11 (7.6%)	16 (5.7%)
それに	1 (1.5%)	18 (12.4%)	62 (22.1%)
つぎに	1 (1.5%)	0 (0.0%)	1 (0.4%)
しかも	0 (0.0%)	1 (0.7%)	4 (1.4%)
合計	66 (100%)	145 (100%)	280 (100%)

「添加型」の誤用類型の例を一つずつ (23) から (41) に挙げておく。

- (23) 料理を食べながら友達と会話をします。それはとても楽しいことです。午後は一時から授業が始まります。<*○→そして>五時に終わります。それから、友達と一緒に食堂へ行って晩ご飯を食べます。
- (24) CCL コーパス (北京大学中国語学センターコーパス) を利用し、もう一度「結束」の意味を吟味した。<*そして→○>以下の例を用いて分析する。
- (25) 日本語は難しく、勉強すればするほど難しくなりました。例えば、助詞は多くの使用方法があります。<*そして→しかし>、日本が大好きだから、日本語を勉強して、日本との距離をますます近く感じるようになりました。
- (26) 一言で言うと、私は現実的で、楽観的で、思いやりの気持ちで友達と接し、<*○→また、>自分の趣味をもち、不断に努力する人間になりたいのである。それが私の人生に対しての設計である。

¹¹ ここでの「そして」は「そうして」も含んでいる。

¹² 本研究で扱っている誤用例は「YUK コーパス」から抽出されるものに限られている。そのため、ここに誤用が現れていないことがそのまま誤用が生じえないということを保証しているわけではない。

- (27) 何年か前から日本は高齢社会と呼ばれていますが、最近では<*また→○>孤独死、無縁死の問題が出てきています。私から見れば、高齢者がだんだん増えるのに伴って、免れないことです。
- (28) 気持ちの良さを追求する。そのほか、日本人の中には、ゴルフをする人が多い。高い会費を納めて、<*また→さらに>値段が高い用具を買っても、彼らも気にしない。
- (29) 西元の6世紀中葉、仏教は中国から朝鮮を通じて日本に入っていた。<*○→それから>仏教の日本での発展の歴史が始まった。
- (30) 作ったお菓子は美味しくない。しかし、楽しいです。大学生として、勉強だけでは足りないので、<*それから→○>私は学校の活動に参加しました。ボランティア活動など本当に意味がありました。
- (31) 大学本科合計入学率は1955年の5.5%から1970年の17.8%、1975年の32.4%に増えた。<*それから→よって>、女子高等教育の大衆化が実現した。
- (32) 双国は互いに学び合い、補完し合う関係で、両国の文化と習慣は非常に似ているところがある。<*○→その上、>日中の酒文化の歴史、その飲酒の習俗、酒に対する態度や飲酒の礼儀は大同小異であるといってもよい。
- (33) したがって、日本女子は学校に入って、たゆまず努力をして、自らの教養と技術を向上させようとしている。<*その上→○>伝統的な見方や考え方を変え、世界的な視点から物事を見ようとする。
- (34) 廃水を勝手に川の中に出す工場がたくさんあります。そして、魚などが生きられる環境がなくなっています。<*その上→さらに>、そんな廃水にいる魚を食べる人間も病気になるかもしれません。
- (35) 著者は、日本人は自己開示が下手で精神的緊張度の高い民族である。<*○→それに>、日本では「和」の精神が強く、自分の意見や気持ちを相手に伝えたり、行動したりする時、相手の気持ちや立場…
- (36) いろいろな物を使われなければならない。それなのに、ものが使い終わったあと、いろいろなゴミが出る。<*それに→○>こんなにたくさんのゴミをどう処理すればいいのか問題である。
- (37) これらの研究を見ても、「はずだ」が自由に使えるようになったわけではなく、まだ理解できないこともある。<*それに→さらに>、これらの解説が抽象的で理解しにくく、すぐにそれを利用して表現できないことにも気がついた。

- (38) まず経済の豊かさである。これは最も基本的な生活需要で、具体的には物質の充足と安定を求めることである。<*○→次に>身体健康である。これは生命を維持するために最も基本的な需要で、経済の豊かさとは深い関係がある。
- (39) 大学を対象に追跡調査を実施した。結果、まず、退学や留学、死亡などによる未卒の割合がほとんどないこと。<*次に→また>、留年者のほぼすべては就職活動がうまくいかない学生たちであるという実態を確認したという。
- (40) 休み時間、私はよく運動します。私はバドミントンが大好きです。<*しかも→○>、私はバドミントンをすることが上手です。
- (41) 日本語がだんだん好きになります。勉強の進歩とともに、私の大学生活も豊かになると思います。<*しかも→そして>、夏休み、私もアルバイトをします。最重要の夢は友達と一緒に勉強など楽しむことです。

3.4 研究対象

表 3-1 からわかるように、接続詞によって誤用の実態が異なることから、接続詞には誤用されやすいものと誤用されにくいものがあることになる。このような分布は、「添加型」の学習の困難さを知るための手掛かりになりうる。本研究は各誤用類型において見られた誤用の規則性を見いだすことを目的としている。そのため、本研究は、誤用の出現頻度が高い典型的なものを分析対象とする。

そこで、改めて表 3-1 に注目すると、各「添加型」の誤用類型の数値にはばらつきが見られることに気づく。不使用では、「そして」の出現率が 48.5%で最も多く、次いで「また」が 40.9%を占めている。過剰使用では、「そして」が 47.6%で最も多く、次いで「また」が 17.9%、「それから」が 13.8%、「それに」が 12.4%と続く。混用では、「そして」の出現率が 33.9%で最も高く、「それから」が 23.6%、「それに」が 22.1%、「また」が 12.9%と続く。

以上の数値を見ると、「そして」と「また」の誤用類型が不使用、過剰使用、混用とも目立つこと、「それから」と「それに」の過剰使用と混用の出現率が不使用より圧倒的に高いことが読み取れる。学習者は作文を書くとき、「そして」「また」の不使用・過剰使用・混用という誤用を生じさせやすく、「それから」「それに」の過剰使用と混用という誤用を起こしやすいと言える。

そうした背景を踏まえ、本研究は「添加型」のうち、誤用数の多い「そして」「また」「それから」「それに」を研究対象にする。ただし、不使用及び過剰使用は接続詞を使用するか使用しないかの問題であるが、混用は接続詞を常に使用するため、両者は根本的に質が違う。そ

のため、本研究はまず不使用を取り上げ、その際には、特に学習者が最も誤用しやすい「そして」「また」という二つの接続詞を取り扱う。その次に、「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用を説明する。そして最後に、「添加型」の混用という誤用類型の中から頻度が上位3位までの「*そして→Y」「*それから→Y」「*それに→Y」を取り上げる。

第四章 「添加型」における不使用

—「そして」「また」を中心に—¹³

4.1 はじめに

本章では、「YUK コーパス」から抽出した「添加型」の不使用に関する誤用例を分析する。そのうえで、不使用の誤用形態と誤用傾向を明らかにし、その誤用が生じる規則性を考察する。

「YUK コーパス」には、「添加型」の誤用例として (42) から (44) のような誤用がある。

- (42) 次に身体の健康である。これは生命を維持するために最も基本的な需要で、経済の豊かさとは深い関係がある。<*O→そして>精神が安定である。これは自分と親密な人間関係の中で、相互に感情を出すことを通じて、承認され、そして尊敬する。
- (43) 日本人も気づきにくい指摘ではないだろうか。<*O→また>翻訳で彼は俳句や和歌のわび・さびを説き、中国語に訳しただけでなく、落語の面白みも理解した。
- (44) ふだん授業がない時、私はよく図書館で勉強します。学校の図書館には多くのきれいな本があります。<*O→それから>友達と一緒に食堂で晩ご飯を食べます。よく、私たちはチャットしながら、食事をします。

(42) から (44) はいずれも、学習者が「添加型」を使用すべきところで使用しない、「不使用」の誤用である。「YUK コーパス」には「添加型」の誤用が491例あるが、その中に「不使用」の誤用は第三章の表3-1で見たように66例あり、全体の13.4%を占めている。

「添加型」の不使用に関わる先行研究として、市川 (2000) などがある。しかし、誤用類型に焦点をあて、どのような誤用がどのような要因で生じているのかを詳細に分析したものはない。

本章の目的は、「YUK コーパス」を資料に、「添加型」の不使用に焦点をあて、その誤用が生じる規則性を明らかにすることにある。不使用の中でも、特に「そして」と「また」という二つの接続詞を論じる。「そして」と「また」を論じる理由は、4.2節の分析結果が示すように、「添加型」の中で学習者が最も誤用しやすい接続詞だからである。

¹³ 第四章は唐 (印刷中) をもとに加筆修正したものである。

以下、4.2 節では「添加型」における不使用の実態を考察する。4.3 節では、「そして」と「また」における不使用の傾向を考察する。4.4 節では、「そして」と「また」の不使用に見られる傾向の要因を考察する。そして 4.5 節では、本章で考察した結果をまとめる。

4.2 「添加型」における不使用の実態

第三章の表 3-1 で示したように、「YUK コーパス」から抽出された「添加型」の不使用の誤用は 66 例である。その 66 例には、どのような傾向が認められるのであろうか。第三章（3.3 節）で述べたように、「YUK コーパス」に現れる「添加型」の不使用 66 例は「そして、また、それから、そのうえ、それに、つぎに」のいずれかであり、それら以外の「ついで、さらに、しかも、ならびに」の例はない。図 4-1 は、第三章の表 3-1 から「添加型」の不使用例の誤用分布を示したものである。

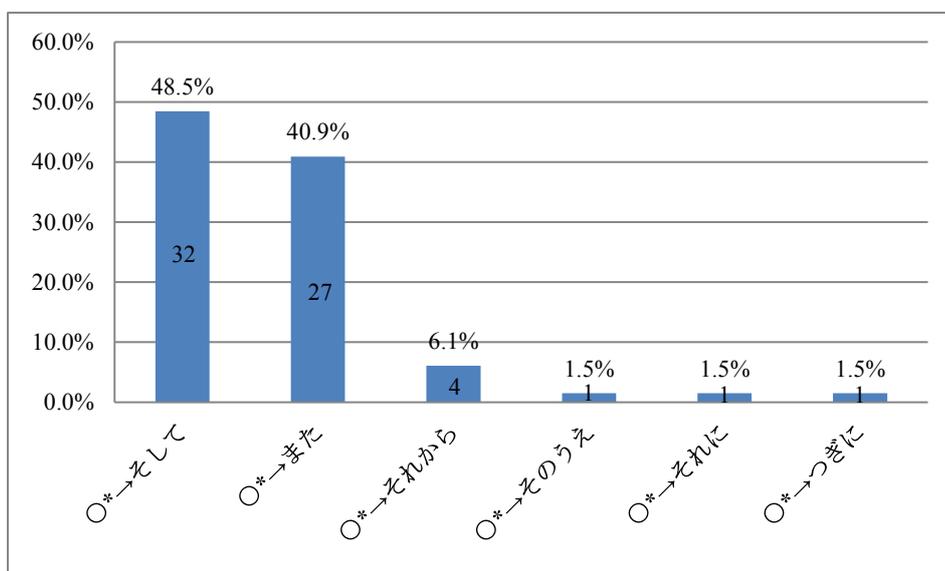


図 4-1 「添加型」の不使用分布 (n=66)

図 4-1 に示した誤用例として、(45) から (50) のような例がある。

- (45) それにハチはいつもと違ってキャッチボールをした。でも、教授は学校へ行ってしまった。<*○→そして>授業中病気でなくなった。
- (46) その上で、自分の個性に適応した将来の進路を決定し、その一般知識の素養と職業技能をマスターするのである。<*○→また>大学では、就職説明会、履歴書の指導や社交活動のマナーの学習国家公務員の説明会などが行われる。
- (47) に伝播して、中国、日本などで栄えた。西元の 6 世紀中葉、仏教は中国から朝鮮を通じて日本に入っていった。<*○→それから>仏教の日本での発展の歴史が始まった。

- (48) 双国は互いに学び合い、補完し合う関係で、両国の文化と習慣は非常に似ているところがある。<*○→そのうえ、>日中の酒文化の歴史、その飲酒の習俗、酒に対する態度や飲酒の礼儀は大同小異であるといってもよい。((32) を再掲)
- (49) 著者は、日本人は自己開示が下手で精神的緊張度の高い民族である。<*○→それに>、日本では「和」の精神が強く、自分の意見や気持ちを相手に伝えたり、行動したりする時、相手の気持ちや。((35) を再掲)
- (50) まず経済の豊かさである。これは最も基本的な生活需要で、具体的には物質の充足と安定を求めることである。<*○→つぎに>身体健康である。これは生命を維持するために最も基本的な需要で、経済の豊かさとは深い関係がある。((38) を再掲)

「添加型」において、なぜ、学習者は不使用という誤用を起こしてしまうのであろうか。先行研究では、日本語学習者の誤用は文法知識の欠如、「母語の負の転移」¹⁴、「過剰般化」¹⁵、「ねじれ誤用」¹⁶などに起因すると指摘されている。第二章で繰り返し述べたが、「そして、また、それから」といった接続詞に注目し、それらの誤用傾向と誤用要因を明らかにした研究はない。したがって、本章では各接続詞に焦点を置き、誤用頻度の高い「そして」と「また」に関する誤用例を挙げ、「添加型」の不使用の傾向と要因を考察する。

¹⁴ 白畑他(2010: 2)は母語の負の転移について、「母語からの転移(transfer from L1 あるいは L1 transfer)とは、私達が第二言語を学習する際に、母語の特性に影響を受けることを言う。転移は、さらに正の転移(positive transfer)と負の転移(negative transfer)に下位区分できる。正の転移とは、母語からの影響が習得上良い方向に働く場合で、そのため習得を促進させると一般に考えられている。負の転移とは、母語の特性が第二言語の習得に悪い方向に働く場合で、別名、干渉(interference)とも呼ばれ、習得を遅延させる場合が多いと考えられている。母語からの転移は、音声の領域、語彙の領域、形態・統語の領域、意味の領域など、言語のあらゆる領域にさまざまな形で生じ得る」と述べている。

¹⁵ 迫田(2002: 30)によると、「過剰一般化は、過剰般化あるいは過般化とも呼ばれる。言語内エラーの一種であり、ある1つの規則を別の語へも適用できると考えて広く一般化すること」と説明されている。

¹⁶ 于(2012: 43)によれば、ねじれ誤用は「中国語母語話者の日本語学習者は、中国語にない文法規則の適用について自分の判断に基づいて行うので、その判断の過程においては、使用者の理解と文法規則の予期する内容とはミスマッチが生じることによって、現れてくる誤用のこと」である。

4.3 「添加型」における不使用の傾向

本節では、句読点といった文章の形式上の特徴と、接続詞で繋がれた前後文の文脈関係から「添加型」の不使用に見られる傾向を整理したい。

4.3.1 文章の形式上の特徴

4.3.1.1 「そして」

「そして」の不使用の例は、形式的に、前後文を区切るのが句点（「。」）なのか読点（「、」）なのか（以下は句点、読点）によって、不使用の状況に大きな違いが見られる。「そして」の不使用は図 4-1 で示した 32 例であるが、そのうちの 28 例は「。<*○→そして>」であり、「、<*○→そして>」はわずか 1 例¹⁷しかない。残りの 3 例は段落の第一文目に現れる例であり、それらを「。<*○→そして>」に含めると、「。<*○→そして>」は 31 例となる。「そして」の不使用形式を整理すると、表 4-1 のようになる。

表 4-1 「そして」の不使用形式 (n=32)

形式	例数
「。<*○→そして>」	31
「、<*○→そして>」	1

「。<*○→そして>」の例として、(51) と (52) のようなものがある。

(51) 大学に入学するまで、私は日本語を学んで日中企業の架け橋になりたいと思っていました。<*○→そして>大学の経済情報に入学しました。（(1)を再掲）

(52) 未来、日本人と中国人はきっと支え合います。<*○→そして>美しい生活をつくります。

表 4-1 からわかるように、多くの場合、「そして」の不使用が生じるのは、文と文の間に句点がある形式のときである。すなわち、学習者は、前文と後文との間に句点がある場合、「添加型」の「そして」を使用しないという傾向があると言える¹⁸。

¹⁷ この 1 例というのは、学習者が意識せずに句点を読点に書き間違えたと思われる次の例である。「忙しいでも楽しい生活を送ります、<*○→そして>美しい未来を望んでいます。」

¹⁸ 本節では「不使用」の規則性として形式的側面にのみ注目したが、このほかにも意味的側面がある。意味的側面では、時系列関係の場合に誤用が多く見られる。この点については 4.3.2 節で論じるが、たとえば、「私は毎日六時に起きます。それから食堂で朝ごはんを食べて教室に行きます。<*○→そして>五時に終わります。」という誤用例がある。

4.3.1.2 「また」

「また」の不使用は、第三章の表 3-1 及び図 4-1 で示したように 27 例である。「そして」と同様、文章の形式上の特徴から「また」の不使用を分類すると、「。<*○→また>」と「、<*○→また>」の二つに分けられる。「。<*○→また>」は 22 例ある（この中には段落の第一文目に現れる 5 例も含まれている）が、「、<*○→また>」は 5 例しかない。「また」の不使用形式を表 4-2 に整理しておく。

表 4-2 「また」の不使用形式 (n=27)

形式	例数
「。<*○→また>」	22
「、<*○→また>」	5

「。<*○→また>」の例として、(53) と (54) のようなものがある。

(53) 要請が高いにもかかわらず、原則として外国人労働者の受け入れは行わないという基本方針が採用されていた。<*○→また、>日本の少子高齢化などの問題も深刻になりつつあり、労働力不足の感があった。

(54) 上の例から見ると、「どうも」を使う場合は本当に多く、意味は数え切れない。<*○→また>近年以来、「どうも」の使用は次第に増えており、日常生活の中で特別な曖昧語になる。

「、<*○→また>」の例として、(55) と (56) のようなものがある。

(55) 一言で言うと、私は現実的で、楽観的で、思いやりの気持ちで友達と接し、<*○→また、>自分の趣味をもち、不断に努力する人間になりたいのである。（(26) を再掲）

(56) 人がそれを受け止め、ホテルにおける 13 階と 13 番部屋はお客様を嫌な気持ちにさせないように事務用として、<*○→また>羽田空港での 13 番目のエプロンを設けないのである。

このように「そして」と同様「また」も、不使用の誤用は文と文の間に句点に来る場合のほうが、読点に来る場合に比べ圧倒的に多い。

また、「.<*○→また>」22例のうち、11例には後文に取り立て助詞の「も」が現れる。しかも、(57)から(59)に見られるように、その11例は前文と後文に同じ動詞を使用しているか、あるいは類似した意味をもつ動詞を使用している。

(57) 一方で日本の国内経済は、産業構造と人口構造が大きく変化し、労働力不足が深刻な問題となっている。<*○→また、>外国人労働者が急速に増えたことで、医療、教育、保険などの新たな社会問題も起こっている。

(58) 私はそんな強い心を持っている人間になりたい。<*○→また>他の人に幸せを感じさせる人にももなりたい。

(59) 現は人間関係により異なり、理由を付けず、頻度が高いという中国語の詫び表現との相違点が明らかになった。<*○→また>文化背景の観点から、差異の原因も分かった。

4.3.2 前後文の関係の特徴

不使用の誤用例が最も多く、つまりは学習者にとって最も学習しにくい接続詞が「添加型」の「そして」であることは、上で述べたとおりである。本節では「そして」の不使用の例文から、その前文と後文の関係を分析する。

学習者はどのような文脈で「そして」を使用しないのであろうか。(60)と(61)は「そして」が使用されるべきところで、「そして」が使用されていない例である。

(60) 本当に坂口安吾さんの言った通りだ。「人は墮ちる。」<*○→そして>、そこからのぼる。

(61) 90年代の初期、バブル経済の中の日本のCMは西洋の人気俳優にも馬鹿な真似をさせた。<*○→そして>2004年になると日本では新しいスタイルの外人CMを試みた。それは韓国の俳優ペ・ヨンジュンである。

(60)と(61)は、「そして」を用いて接続される前文と後文とが同じ論理関係の中にあり、前文なくして後文は成立しないという時系列関係にある。(60)は、坂口の『墮落論』の中にある「人間は生き、人間は墮ちる」という名言をもとに、人は墮ちれば、その後そこから必ずのぼるという時系列関係が成立している。「墮ちる」と「のぼる」という二つの要素はこの一連の出来事にとって不可欠なものとなっている。(61)は日本のCMの時間的変化について述べているが、「90年代の初期でのCMの特徴」という前文がないと、「2004年に出現したCMの特徴」という後文は導きだせない。

これらの例文から、「そして」の不使用における前後文脈の関係は図 4-2 のように示すことができる。長方形は2文間の論理関係を表し、長方形の中にある円はそれに従属する出来事を表している。A は「そして」で繋がれる前文の出来事を示し、B は「そして」で繋がれる後文の出来事を示す。A と B は長方形である論理関係を構成する。矢印はそれに従属する出来事の組み合わせ方向であり、A と B の出来事が同じ一つの論理関係に従属し時系列関係にもとづき接続されている。

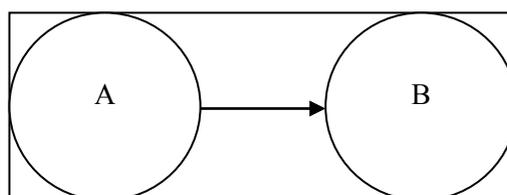


図 4-2 「そして」の不使用における前後文の関係

4.3.3 不使用の傾向のまとめ

4.3 節では、学習者の作文における「添加型」の不使用の実態を明らかにしたうえで、「そして」と「また」における不使用の形式上の特徴と、「そして」の前後文脈の関係を分析した。「そして」と「また」の不使用に見られる文の特徴を表 4-3 に示しておく。

表 4-3 「そして」と「また」の不使用に見られる傾向

	不使用の傾向
傾向①	句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間に「そして」と「また」は使用されない傾向にある。
傾向②	句点に続く後文に「も」が現れる場合、「また」は不使用の傾向にある。
傾向③	「そして」の不使用の前後文には時系列関係が見られる。

4.4 「添加型」における不使用の傾向の要因

前節では、「そして」と「また」における不使用の傾向を示した。4.4.1 節では、句点の場合に「そして」と「また」の不使用が顕著に認められるのはなぜなのか。4.4.2 節では、「また」に取り立て助詞の「も」が後続する場合に不使用の傾向が認められるのはなぜなのか。4.4.3 節では、「そして」の不使用の前後文に時系列関係が認められるのはなぜなのかを考察する。

4.4.1 句点に続く後文に「そして」と「また」を使用しない要因

「。<*○→そして>」と「。<*○→また>」の例を(51)から(54)で示したが、「そして」のそのほかの例を(62)と(63)に、「また」のそのほかの例を(64)と(65)に示しておく。

- (62) 簡潔かつ明瞭で、読者を引きつけるために、日本の記事の見出しも中国の記事の見出しも省略する傾向がある。<*○→そして>日本の記事の見出しは中国のより省略文がずいぶん多い。
- (63) 日系企業がウェブサイトで公表した求人広告を調べ、日本語人材像を支える資料を整理し、分析する。<*○→そして>今現在の時点で、日系企業が求める日本語人材像はどのような素質を備えているのかを探り出す。
- (64) 普通に結婚して、安定した生活を送るか、それとも仕事で活躍するか。<*○→また>、どんな仕事を選ぶか。ある有名な先生の本に、自分の答えを見つけることができた。
- (65) 「日本化」した仏教を通じて日本人の現世利益観を理解する。<*○→また>日本人の民族の性格を、更には日本の社会の思想の根源を明らかにしたいと思う。

いずれの例も、文の終点を示す句点の後ろで誤用が生じている。なぜ、そのような規則的な誤用が起きているのであろうか。李(2008:35-36)は日本語と中国語の文章における文の区切り方の違いを、二つの観点から次のように説明している。その一つは接続詞の出現位置についてであり、日本語の接続詞は後文の文頭に出現するのが一般的であるのに対し、中国語の接続詞は文中に出現するほうが多いと述べている。もう一つは文脈の展開についてであり、日本語では主語や、視点や、また部分的な話題の転換時に文を切るが、中国語では句点を打つまで何文も継続されると述べている。

接続詞の出現位置と文脈の展開を見るために、まずは日本語の例として『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド(下)』¹⁹から(66)を挙げる。

- (66) 日が暮れると僕はベッドから起きあがって冷たい水ではれた目を洗い、黒い眼鏡をかけ、雪の積った丘の斜面を下って図書館にでかけた。しかし眩しい光に目を痛めた日には、僕にはいつものように多くの夢を読むことができなかった。ひとつかふたつの頭骨を処理すると、その古い夢が発する光のせいで僕の眼球はまるで針で刺されたよ

¹⁹ 村上春樹(1985)新潮社。

うに痛んだ。そして目の奥のぼんやりとした空間が砂でもつめられたように重くなり、それにつれて指先がいつもの微かな感覚を失っていった (p.14)。

(66) には文頭に接続詞の「しかし」と「そして」が現れている文があるが、このことは、日本語では後続の文頭に接続詞が来るのが一般的であるという李 (2008) の説明と一致する。また、この例文は僕の出来事をめぐって、「僕の行動」→「僕の夢」→「僕の眼球」→「僕の間」に関わる出来事が次々と展開されている。李 (2008) が説明したように、部分的な話題の転換が認められるため文が切られている。

つぎに、『梦里花落知多少』²⁰から中国語の例を見てみよう。

(67) 我和陆叙进了电梯，在电梯里面我终于忍不住嚎啕大哭，陆叙在我旁边手忙脚乱地不知道该做什么，于是从口袋里摸出一方手帕递给我，我一看见就想起顾小北和他有一个习惯，于是哭得更伤心，陆叙是彻底崩溃了不知道怎么劝我，靠在电梯墙壁上一声叹息 (p.37)。

(67) では接続詞“于是”はいずれも読点の後ろに使用されている。また、(67) はエレベーター内での「我和陆叙 (私と陸叙)」の一連の行動について、「我和陆叙 (私と陸叙)」→「我 (私)」→「陆叙 (陸叙)」→「陆叙 (陸叙)」→「我 (私)」→「我 (私)」→「陆叙 (陸叙)」→「陆叙 (陸叙)」に関わる出来事が次々と展開されている。このように文章が繋がれるのは、中国語では前後文の論理関係が変わらない限り、文は読点で次々繋ぐことができるからである。

日本語と中国語における接続詞の出現位置と文脈の展開の相違についてより詳細な分析をするために、「中日対訳コーパス」(第一版)²¹を利用して、原文が日本語で中国語に翻訳された(68)を見ていく。

(68) a 「ボくら」というのは、アメフト部時代のチームメイト。揃いも揃って浪人し、なかよく一年後に早稲田大学に入学した。しかし、ボくらは敬遠されて、むしろ当然だったかもしれない。この混雑のなかでも、頭 1~2 個分、浮いている巨漢のリョウ。ボクらの学年のキャプテンで、貫禄充分、オヤジ顔のナリ。黒いスーツでビシッと

²⁰ 郭敬明 (2003) 春风文艺出版社。

²¹ 「中日対訳コーパス」(第一版)には、日本文学作品 22 篇、中国文学作品 23 篇とそれぞれの訳本をあわせて計 105 件 (約 1130.3 万字) が収録されている。それら以外にも、日本 14 篇、中国 14 篇、日中共同 2 篇とそれぞれの訳本をあわせた計 45 件 (ほぼ 574.6 万字) が収録されている。このコーパスは収録した作品のジャンルとそれに対応する訳本が豊富であり、話題の偏りが研究に及ぼす影響は少ない。そのため、本研究は、このコーパスを用例収集の有効な道具として利用することにした。後ろの『』、《》は作品名を表している。

決め、「何か、マフィアみたい」と言われるカゲ。そして、ボクはと言えば、髪が肩まである、いわゆる「ロン毛」。 『五体不満足』

b 所谓小团体，就是户山高中时代美式橄榄球俱乐部的伙伴，我们都是补习一年后考进来的。旧友相逢，格外亲密。那个膀大腰圆的壮汉是阿良，那个老气横秋、一脸威严的“老头儿”是阿成，身穿笔挺黑色西服，外号“黑手党”的是阿影，而我则一头披肩发。

(68) については、「この混雑のなかでも」以降を取り上げ、「ボクラ」のメンバーを紹介する文章を分析する。日本語の原文 (68a) では四カ所句点で区切られているが、その中国語訳 (68b) では一カ所句点で区切られているだけである。「ボクラ」のメンバーを紹介する際、日本語の原文 (68a) は一人ずつの紹介が終わるごとに、句点が付けられている。このように、「ボクラ」のメンバーが代わるたびに句点で区切られ、新しい文がつけられている。他方、中国語訳 (68b) では一つの複文を用いて 4 人の紹介をし、この複文の中で短い文が読点で繋がれている。また、(68a) では、「そして」で繋がれた前文「黒いスーツでビシッと決め、『何か、マフィアみたい』と言われるカゲ」の後ろで、「ボクラ」のメンバー紹介が「ボク以外」から「ボク自身の紹介」に変化した。そのため、日本語では「句点+そして」を用いているが、その中国語訳 (68b) では「句点+そして」と同様の意味をもつ「読点+而」になっている。

学習者が作文を書くとき、句点を打つと後続する文に接続詞を使用しない傾向が生まれる。「YUK コーパス」から抽出した (62) から (65) のような不使用の誤用が生じるのは、文中における接続詞の出現位置及び句点で文と文の論理展開がなくなるといった中国語の干渉を受け接続詞が使用されなくなったことを示している。

4.4.2 句点に続く後文に「も」が現れる場合、「また」を使用しない要因

「また」の不使用の誤用例には 22 例の「.<*○→また>」があり、そのうちの 11 例は後文に取り立て助詞の「も」が付いていることは 4.3.1 節で述べたとおりである。(57) から (59) 以外にも、(69) と (70) のような例がある。

(69) 量がまだ不足している。これからの研究でさらにデータの量をふやし、さらにくわしい分析を行う必要がある。<*○→また>筆者自らがアンケート調査を行うことも必要である。

(70) 次に同じ報道文内の高頻度語、異なる語数と延べ語数、語の品詞の対照から中日記事の用語を考察する。<*○→また>日中記事の慣用文型も実例からまとめて対照する。そして、感情表現の面から比較する。

なぜ、取り立て助詞「も」が使用された場合、「また」が使用されていないのであろうか。その疑問を明らかにするために、「また」と「も」の先行研究を整理しておきたい。石黒(2008: 96)は「また」の機能として情報の追加を指摘し、楊(2018)や沼田(1986、2000、2009)は「も」の基本機能として「類似事態の追加」²²を指摘している。日本語では、通常、情報を追加する「また」と類似した事物を並べる「も」は組み合わせて使用する傾向にある。

「また…も」に対応する中国語は何であろうか。日本語の取り立て助詞「も」を中国語に翻訳するとき、しばしば“也”が用いられる。この“也”と「も」の間に、「老师也讲课，也提问题（先生は説明もするし、質問も出す）」のような対応が実に多く見られることは、既に大河内(1977)、中川(1982)などによって指摘されている。(69)と(70)の「も」に該当するのは中国語の“也”であり、類似した事物が並列することを表している。“也”は副詞として、「2つの事柄が同じであることを表す」と呂(2003: 432)は述べている。副詞の“也”を用いる場合、読点で二つの文は繋がり、この“也”で前後文の関係は類似した事柄を列挙したり、同様の事柄がまだあることを暗示したりするため、副詞“也”が文章中にあれば他の接続詞は必要ではない。

「中日対訳コーパス」(第一版)には、(71)から(73)のような例がある。

(71) a 僕は君を束縛しない。僕は君を愛しているが、しかし君は自由だ。また僕も自由で
 ありたい。束縛することが愛ではないんだ。 『青春の蹉跎』

b 我并不想束缚你。我虽然爱你，但你有你的自由，我也有我的自由。束缚对方并不是
 爱。

(72) a 為体の知れない娘と駈落ちのように帰ってしまうことは、駒子への激しい謝罪の方
 法であるかとも思われた。またなにかしら刑罰のようもあった。 『雪国』

b 他觉得同一个不明身世的姑娘近似私奔地回到东京，也许是对驹子的一种深深的歉意，
也是对自己的一种惩罚。

(73) a 結婚するまでの日本人の友人との関係はひどく疎遠となる。また、日本人側も、現
 地日本人コミュニティのように、こうした人に対して、きわめて冷い態度をとるた

²² 楊(2018: 112)。

めに（ある意味で敵側にまわったものというような感じをもつ）いっそう同胞との
間隔が開くのである。 『適応の条件』

- b 她婚前的日本朋友也早已疏远，就连国内的日本人，也象当地的日本人社区一样，对她们采取极其冷淡的态度（在某种意义上，把她们当做投敌的人），这进一步加剧了她和同胞之间的隔阂。

中国語ではこのように接続詞を用いず副詞の“也”だけで添加関係を表すことができる。学習者はこうした中国語の副詞“也”だけで添加関係を表すという文法規則をそのまま日本語にも適用させているのである。つまり、学習者は日本語の文と文の間に「また」を使用せずとも「も」で文と文の添加関係を表すことができると誤認識し、(69) (70) のような誤用を生みだしていると考えられる²³。

4.4.3 「そして」の不使用の前後文に時系列関係が見られる要因

4.3.2 節からわかるように、学習者の作文には、「そして」に関する不使用の誤用例の前後文に時系列関係があるという特徴が多く見られる。(74) から (77) にも、その誤用傾向が見てとれる。

- (74) 本当に坂口安吾さんの言った通りだ。「人は墮ちる。」<*O→そして>、そこからのぼる。((60) を再掲)
- (75) 90年代の初期、バブル経済の中の日本のCMは西洋の人気俳優にも馬鹿な真似をさせた。<*O→そして>2004年になると日本では新しいスタイルの外人CMを試みた。それは韓国の俳優ペ・ヨンジュンである。((61) を再掲)
- (76) 尤も、唐代に遣唐使は中国にきて様々な知識を学んだ。その中のマナーについての知識がいろいろあった。<*O→そして>日本に帰って習得した中国のマナーを真似ていた。
- (77) 私は毎日六時に起きます。それから食堂で朝ごはんを食べて教室へ行きます。<*O→そして>教室で勉強します。午後も授業があります。時々体育館で運動します。午後5時ごろ授業が終わります。

²³ 学習者は、前後文の論理的関係が捉えきれない可能性もある。

学習者は、なぜ、前文と後文に時系列関係があるとき、「そして」を使用しないのであろうか。この点を考察するために、ひけ（1985）と森田（1987b）と石黒（2000）を参考に、「そして」の意味用法を整理する。

ひけ（1985）は、第二章で示したように、「そして」の働きは、複数の文が連結し主体の継起的行動を表す場合には、一つ一つの動作を全体的な行動の一要素として関係づけるものであると述べている。森田（1987b）は、「そして」は「そうして」から派生したくだけた言い方で、「そのようであって」を意味していること、そして同じ話題の中に「ある事柄や叙述にもう一つの事柄や叙述を並べたり付け加えたりするときに用いる接続詞（p.359）」であり、「並列」と「累加」に分けられると述べている。石黒（2000）は、「そして」は幅広い用法（並列、因果関係〔結果、結局〕、時間〔経過、継起〕）をもつこと、単なる添加でなく後続内容が「決定的」な事態であることなどを指摘している。このように、前文と後文に時系列関係があるとき、「そして」を用いて前後文の関連性が示さなければならない。しかし、(74) から (77) のように、学習者は「そして」を用いていない。

「そして」の不使用に中国語はどう関係しているのであろうか。(74) から (77) を中国語で表現すると、そのすべてが「そして」を使用しなくても文法的に適格な文として成立する。その理由は、秦（1994）が指摘しているように、中国語は「意合法（「連詞」²⁴を使用せずに意味で二つの文を繋げる）」を通じて前後文の論理関係が理解できるからである。また、中国語には意合法の一つの表現として、時序範疇というものがある。時序範疇について、李（2016：32）は以下のように説明している。

事件本身有先后，语句通过语序完成连贯，事件本身无先后，则需要时形式显化其连贯。表达时形式标记使前后话语更具有连贯性…因此，时序范畴具有使话语连贯的话语特征。（事柄そのものに前後の順序がある場合、語順で前後文の関係性が示される。〔それに対して、（筆者加筆、以下同）〕事柄そのもの

²⁴ 中国語では、文と文を接続する「つなぎ言葉」のことを呂（2005）は“连接词”、張（2000）は“连词”と名づけている。張（2000：141-142）は“汉语的连词是一种具有多层次连接功能的虚词，既可以连接词和短语，也可以连接小句和句子，还可以连接句子和句组”（中国語の連詞は多次元的接続機能をもつ機能語であり、語と語、節と節、文と文などを接続することができる）と指摘している。本研究は文と文を接続する連詞のみを考察対象としたいと考えている。中国語では、連詞の類型について、語、節、文のどのレベルで使用されているかによって分類する先行研究が多いが、ここでは文の接続の意味関係にもとづいて分類する張（2000：188-189）の類型を取り上げる。張（2000）によると、中国語では、文の接続関係は大きく“联合”“偏正”の2種類に分けられる。“联合”はまた“并列”“连贯”“递进”“选择”の4種類に分けられ、“偏正”はまた“因果”“转折”“假设”“条件”“目的”の5種類に分けられ、全部で9種類の類型となる。

に前後の順序がない場合、時序形式〔時間的関係性を示す語句〕で前後文の関係性を明確に示さなければならぬ…したがって、時序範疇には文と文を連貫させる機能がある。)

「中日対訳コーパス」(第一版)を見ると、日本語原文には時系列関係を表す「そして」が使用され、その中国語訳には接続詞が省略される例がある。

(78) a 二つ目の特二の室へ入った。そしてその中程まで行った時、そおれ、つかまえた。
『あした来る人』

b 他跨进第二节特二车厢，∅行至中间，不由心中叫道：“有了！抓到了！”

(79) a 八千代が声をかけると、相手はむっくりと起きあがった。そして八千代の方に視線をあてたが、そのまま声は出さないで、あっ気にとられた表情を取った。
『あした来る人』

b 八千代招呼道。对方应声而起，∅眼睛盯着八千代，却迟迟不开口，一副愕然的神情。

(80) a 杏子の白い手が額に置かれたような気がするのと、それと同時に、克平は今朝鹿島槍を下った二本の足を床の上で真っ直ぐに伸ばした。そして間もなく彼は眠りの中へ静かに落ち込んでいった。
『あした来る人』

b 他恍惚觉得，杏子那雪白的手正抚摸着自已的额头，旋即他把今早登过鹿岛枪的双腿直挺挺地在褥子伸展开来。∅不一会儿，便静静地进入了梦乡。

(78) は、「室へ入った」と「その中程まで行った時」という時間的連続している二つの動作から構成されている。前の動作がないと、後ろの動作は成り立たない。そのため日本語では、前後文の関係を「そして」で表現している。他方、中国語では前後文に時系列関係が生じる場合には、節の語順だけでその関係性を表現できるため接続詞を使用していない。(79) と (80) も (78) と同様に解釈できる。

上記の例が示すように、日本語と中国語とでは文章構成が異なる。前後文が時系列関係にある場合、日本語では「そして」を使用し前後文の関係を明確に示すが、中国語では接続詞を使用せず前後文の関係を把握する。繰り返しになるが、前後文の間に時系列関係がある場合、中国語は「意合法」の時序範疇により接続詞を省略する。他方、日本語は、前後文は時系列関係にある場合でも、なるべく接続詞を用い前後文の論理関係を表現する。

誤用例を見ると、(74) は「墮ちる」から「のぼる」、(75) は「90年代の初期」から「2004年」、(76) は「中国にきて」から「日本に帰って」、(77) は「教室に行く」から「教室で勉強する」のように、前後文の間には顕著な時系列関係があるため、中国語では節の語順だけ

で文と文を接続させている。ところが、学習者が中国語のこの文法規則をそのまま日本語に適用させ、日本語の文と文の間に「そして」を使用せず文章の連貫性をもたせることができると誤認識すると、例のような誤用が生まれてくる。

4.4.4 不使用の傾向の要因のまとめ

以上、「YUK コーパス」を利用して、「添加型」の「そして」と「また」をめぐる不使用の傾向とその傾向が生じる要因を考察した。その結果、次のことが明らかになった。

まず、「添加型」の「そして」と「また」の不使用には一定の規則的な傾向が見られる。句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間に「そして」と「また」は使用されない傾向にある。なぜなら、学習者の母語である中国語の接続詞の出現位置と文脈の展開が影響しているからである。中国語の接続詞は、文中に出現するほうが多く句点を打つまで何文も継続されるため、句点の後に使用されにくい。

そして、句点に続く後文に「も」が現れると「また」が使用されない傾向がある。この要因も、「も」と対応する中国語の副詞“也”で前後文の添加関係を表現することができるという中国語の文法規則を学習者が日本語に適用させているからにはほかならない。

また、前後文に時系列関係が見られる場合、「そして」の不使用が生じる。それは、日本語と中国語の文章構成が異なるからである。中国語では「意合法」に従い、接続詞を省略し節の語順で時系列関係を示す。それに対し、日本語では接続詞を用いて前後文の論理関係を表現する。そのため、「そして」を使用しないという誤用が生まれるのである。

以上の結果は、表 4-4 のようにまとめることができる。

表 4-4 「そして」と「また」に見られる不使用の傾向と要因

	傾向	要因
①	句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間で「そして」と「また」は不使用の傾向にある。	中国語における接続詞の出現位置と文脈の展開の影響。
②	句点に続く後文に「も」が現れる場合、「また」は不使用の傾向にある。	中国語文法規則の影響。
③	「そして」の不使用の前後文には時系列関係が見られる。	日本語と中国語とで文章構成が異なる。

4.5 おわりに

本章は、「YUK コーパス」を利用して、「添加型」の不使用の傾向とその傾向が生じる要因を考察した。その結果、以下3点が明らかにされた。第一は、句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間で「そして」と「また」が不使用の傾向にあることである。第二は、句点に続く後文に「も」が現れる場合、「また」が不使用の傾向にあることである。第三は、「そして」の不使用の前後文に時系列関係が見られることである。そして、これらの要因には、学習者の母語である中国語の影響が見られることが明らかになった。

続く第五章では、「そして」「また」「それから」「それに」を中心に、「添加型」の過剰使用の傾向と要因を明らかにしていく。

第五章 「添加型」における過剰使用

—「そして」「また」「それから」「それに」を中心に—²⁵

5.1 はじめに

本章では、「YUK コーパス」から抽出した「添加型」の過剰使用に関する誤用例を分析する。そのうえで、過剰使用の誤用形態と誤用傾向を明らかにし、誤用が生じる規則性を考察する。

「YUK コーパス」から「添加型」の誤用例を精査してみると、「そして」「また」「それから」「それに」に過剰使用が見いだせる。

- (81) 生命と美しい意味している。この点で完全に一致する。違うのは中国語の中の「青」はもっと多くの色を表し、<*そして→O>日本では、「少年」「幼稚」「成熟しない」というイメージを伴うことも多い。
- (82) 仏教の「日本化」という現象を通じて仏教の日本での発展を探求し、<*また→O>「日本化」した仏教を通じて日本人の現世利益観を理解する。
- (83) <*それから→O>具体的な諺と慣用句を見してみる。
- (84) 日本の神社と祠の共通点の小さな違いについて検討する。それは神社の場合なら、先祖だけでなく、神様も祀られ、<*それに→O>祀られている人の子孫だけが参拝しているわけでもない、しかし、中国の祠の場合は、その一族の子孫だけが参拝している。

(81) から (84) はそれぞれ学習者が実際に陥った「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用の誤用例である。「YUK コーパス」には「添加型」の誤用が 491 例あるが、過剰使用の誤用数は第三章の表 3-1 で示したように 145 例（全体の 29.5%）あり、混用に続き第 2 位の誤用類型になる。このように、学習者は「添加型」の過剰使用という現象を頻繁に起こしている。

「添加型」の過剰使用に関わる先行研究として市川（2000）があるが、これは談話レベルの誤用と指導法に関する誤用例を提示しながら説明したにすぎない。管見の限り、「添加型」の過剰使用について、どのような誤用が見られ、その誤用要因が何であるのかを明らかにした研究はない。

²⁵ 第五章は唐（印刷中）をもとに加筆修正したものである。

本章の目的は、「YUK コーパス」を資料に、「添加型」の過剰使用に焦点をあて、その誤用が生じる規則性を明らかにすることにある。5.2 節では、「添加型」における過剰使用の実態を整理する。5.3 節では、「そして」「また」「それから」「それに」それぞれにおける過剰使用の傾向を分析する。5.4 節では、誤用が生じる要因を考察する。そして、5.5 節では本章で明らかになったことをまとめ、第四章と第五章から見出した誤用の規則性を述べる。

5.2 「添加型」における過剰使用の実態

第三章の表 3-1 で示したように、「YUK コーパス」に認められる「添加型」の過剰使用の誤用例は 145 例である。第三章（3.3 節）で述べたように、その 145 例は「そして、また、それから、それに、そのうえ、しかも」のいずれかである。それら以外の「ついで、つぎに、さらに、ならびに」の例はない。図 5-1 は、第三章の表 3-1 に従い「添加型」の過剰使用例の誤用分布を示したものである。

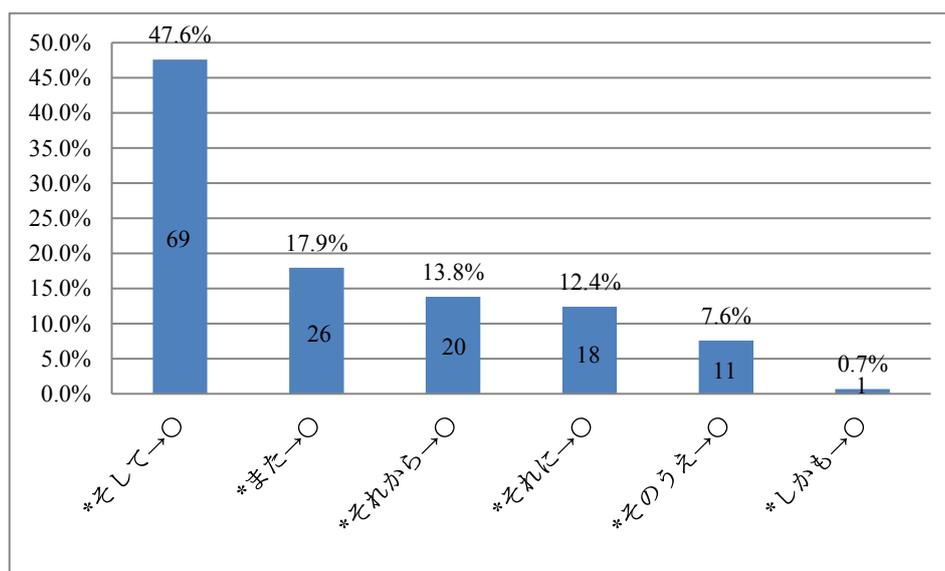


図 5-1 「添加型」における過剰使用 (n=145)

図 5-1 に示した過剰使用として、(85) から (90) のような例がある。

(85) 第一点、日本固有の神道は、日本民族の文化に対して深遠な影響を与えた。<*そして→○>それは現実的な伝統の思想を重視した日本人の宗教観に現実主義の色を現す。

(86) 夏の初代国王の禹の時代の儀狄と酒の神様と言われる守康氏の二人である。<*また→○>『漢事始』には、「呂氏春秋にいう、儀狄酒醪を造りて五味を変ず。古史考にまたいう、儀狄酒を造る。

(87) 作ったお菓子は美味しくない、しかし、楽しいです。大学生として、勉強だけでは足

りないので、<*それから→○>私は学校の活動に参加しました。(30)を再掲)

(88) 政府は外国人留学生に継ぎの福利を与えている。一、自費留学生は毎年 130 万円の奨学金を得ることができる。<*それに→○>、学費も学校や専攻によって違うが、3 万から 7 万円ぐらいでよい。

(89) そして、バスケットボールをすることもとても上手です。だから、たくさんの女の子は彼が大好きです。<*そのうえ→○>いつもどうにもならなくなると、彼は自分の言葉で膠着を打ち破ります。

(90) 休み時間、私はよく運動します。私はバドミントンが大好きです。<*しかも→○>、私はバドミントンをすることが上手です。(40)を再掲)

図 5-1 に注目すると、接続詞個々の過剰使用の数値にばらつきが見られる。「そして」の過剰使用が過剰使用全体の 47.6%を占め、「また」が 17.9%、「それから」が 13.8%、「それに」が 12.4%と続く。こうした数値を見ると、「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用が「そのうえ」「しかも」より圧倒的に多いことが読み取れ、学習者は作文を書くとき、「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用を起こしやすいと言える。本章では「そして」「また」「それから」「それに」に絞って、過剰使用の誤用を分析する。

5.3 「添加型」における過剰使用の傾向

5.3.1 文章の形式上の特徴

5.3.1.1 「そして」

本節では「そして」の過剰使用について、その形式上の特徴を把握する。前章で述べた不使用の場合と同様、「そして」の前後文を区切るのが句点なのか読点なのかに注目する。「そして」の過剰使用の総数は図 5-1 で示した 69 例であるが、「。<*そして→○>」が 29 例(段落の第一文目に現れる 9 例を含む)あり、「、<*そして→○>」が 40 例ある。「そして」の過剰使用形式を整理すると、表 5-1 のようになる。

表 5-1 「そして」の過剰使用形式 (n=69)

形式	例数
「。<*そして→○>」	29
「、<*そして→○>」	40

「。<*そして→○>」の例として (91) と (92)、「、<*そして→○>」の例として (93) と (94) のようなものがある。

- (91) 新聞などの報道から日本の学生たちは小学校から防災訓練を受けていることが分かりました。<*そして→○>本格的な災害が発生したとき、人々は避難知識を運用できます。それによって被害の程度が減少されます。
- (92) CCL コーパス（北京大学中国語学研究所センターコーパス）を利用し、もう一度「結束」の意味を吟味した。<*そして→○>以下の例を用いて分析する。（(24) を再掲）
- (93) 日本で、飲酒する時、自然な振る舞いには相手に不快な感じを与えるかもしれず、<*そして→○>「飲酒のマナー」は堅苦しいものにしても、習う必要がある。
- (94) 日本政府も「風呂敷」を使うのを宣伝し、<*そして→○>専門的に「風呂敷」文化の研究所を創立し、全国で多くの「風呂敷」の展覧会を開いている。

句点で文章を二つに分割する「。<*そして→○>」よりも、読点を用い文章を連続させる「、<*そして→○>」過剰使用のほうが多く見られる。

その「、<*そして→○>」の 40 例を分析してみたい。読点の前に使用されるのが動詞なのか動詞以外なのかによって違いが見られる。読点の前に動詞が使用されると、「そして」の過剰使用が圧倒的に多く現れる。40 例のうち、読点の前に動詞が使用されているのは 31 例であるが、動詞以外のものが使用されているのは 9 例しかない。このことを表で示すと表 5-2 になる。

表 5-2 「、<*そして→○>」の特徴 (n=40)

形式	例数
「動詞、<*そして→○>」	31
「動詞以外、<*そして→○>」	9

読点の前に動詞がある例として、(95) と (96) のようなものがある。

- (95) 「卧薪尝胆」という成語が述べるストーリーは、紀元前 6 世紀ごろ、越王勾践が呉国との戦争に負けて、<*そして→○>呉王夫差の下部になった。
- (96) 今、経済の発展とともに、人々の食生活はだんだんよくなり、<*そして→○>大晦日の夕食も変わってきた。

他方、読点の前に動詞以外のものが使用される例として、(97) と (98) のようなものがある。

- (97) 他動詞相当の使役動詞は「(さ)せる」の使役構文を持っているが、<*そして→○> 動作者に意図的な動作をさせるのではなく、他動詞のように、対象に直接働きかけることを表わす。
- (98) まず、会社発表の就職情報誌で告知し、調査対象がサイトで回答する方法をとる一方、<*そして→○>会社主催の各種合同企業セミナー会場にてアンケートを配布し、回収する方法も実施。

5.3.1.2 「また」

「また」の過剰使用の傾向を分析する。第三章の表 3-1 及び図 5-1 で示したように、「また」の過剰使用は 26 例である。「そして」と同様、文章の形式上の特徴から「また」の過剰使用を「。<*また→○>」と「、<*また→○>」に分けると、前者は 5 例（段落の第一文目に現れる 1 例も含む）だけであるが、後者は 21 例ある。「また」の過剰使用形式を表で示すと、表 5-3 になる。

表 5-3 「また」の過剰使用形式 (n=26)

形式	例数
「。<*また→○>」	5
「、<*また→○>」	21

「。<*また→○>」の例として、(99) と (100) のようなものがある。

- (99) 今週末は私の誕生日です。<*また→○>高校時代の友達が多くて、私には、彼女たちは非常に大切です。

- (100) 本論文は「51job」と言う中国の有名な招聘ウェブサイトから情報を集めた。<*また→○>求人広告を集めた時期帯は2013年12月4日から2014年3月6日までである。

他方、「、<*また→○>」の例として、(101) と (102) のようなものがある。

- (101) 将来の環境がよくなるかどうか分からないけど、<*また→○>できるだけいろいろな努力をするようにする。

(102) 浄土宗の本願寺派の大谷光瑞仏主は、戦争の時と<*また→○>第二次近衛内閣時に参議官、小磯内閣の顧問などの職を担当して、直接軍国の大事に参与した。

このように「、<*また→○>」が21例を占めており、二つの文章が読点で繋げられるとき「また」の過剰使用が多く現れる。学習者は、読点の場合、文と文の間に「また」を使いすぎるといふ傾向があると言える。「、<*また→○>」の21例のうち、読点の前に使用されるのが動詞なのか動詞以外なのかで分類してみると、後者が前者より多い。表5-4に示したように、読点の前に動詞が使用される例は6例であり、動詞以外の品詞が使用される例は15例である。

表 5-4 「、<*また→○>」の特徴 (n=21)

形式	例数
「動詞、<*また→○>」	6
「動詞以外、<*また→○>」	15

読点の前に動詞が使用されている例として(103)と(104)のようなものがあり、読点の前に動詞以外のものが使用されている例として(105)と(106)のようなものがある。

(103) 日本人の結婚式はキリスト教会で行うことが多く、子供の誕生日は神社で祝い、<*また→○>葬式は寺院で開催する。

(104) 人間の健康に悪い影響を与える二酸化窒素を吸着し毒性のない一酸化炭素に変える機能がある。耐久性を持ち、<*また→○>表面が傷ついても畳表を張り替えるだけで、まったく新しい畳のようになる。

(105) 大学の生活は昔の生活と違います。勉強するほかに、<*また→○>人との付き合いをしなければなりません。特に仕事をする時に、私は本当に緊張しています。

(106) 寮の部屋には六人が住んでいる。私と二人のクラスメートのほかに、<*また→○>三人の英語科の学生だ。

読点の前に使用される語の品詞という点から見ると、動詞以外が多用される「また」の過剰使用は動詞が多用される「そして」の過剰使用と対の関係にあることになる。

5.3.1.3 「それから」

本節では「それから」の過剰使用の形式上の特徴を考察する。前後文を区切るのが句点なのか読点なのかによって、過剰使用の状況に大きな違いがある。「それから」の過剰使用は図5-1で示した20例であるが、「.<*それから→○>」が14例(段落の第一文目に現れる5例も含

まれている)あり、「、<*それから→○>」が6例ある。「それから」の過剰使用形式を表5-5に整理しておく。

表5-5 「それから」の過剰使用形式 (n=20)

形式	例数
「。<*○→それから>」	14
「、<*○→それから>」	6

「それから」の過剰使用は、「そして」「また」の場合と逆の関係にある。つまり、文と文の間に句点に来る形式では「それから」の過剰使用が起りやすいことになる。句点の後、「それから」を使用した誤用例として、(107)と(108)のようなものがある。

(107) 私の夢は科学者になることです。中学校の時、それはありえないと認識してから、夢は学校の先生になりました。<*それから、→○>大学に入ってから、私に夢はないです。

(108) 私はすぐ寝たいと思いました。二時間くらい経ちました。食事の時間になりました。<*それから、→○>自分でカップ麺を食べて、小説をよみつづけました。

他方、「、<*それから→○>」の例として、(109)と(110)のような例がある。

(109) 創設、男女共学、六・三制などを勧告し、これに基づいて1947年3月教育基本法と学校教育法が公布され、<*それから→○>新しい教育制度が始まった。

(110) 日本は昔から社会の発展、政治と経済と文化の毎回の変革が一定程度日本人が入浴する動機と形式に影響し、<*それから→○>入浴心理と浴場構造などの変化の面でも一つの側面から日本の社会変遷を反映できると述べている。

5.3.1.4 「それに」

本節では「それに」の過剰使用の傾向を分析する。「それに」も、「そして」「また」「それから」と同様に、前後文を区切るのが句点なのか、読点なのかによって2種類に分けて整理する。図5-1で示した「それに」の過剰使用18例のうち、「。<*それに→○>」が7例(段落の第一文目に現れる3例も含まれている)、「、<*それに→○>」が11例である。「それに」の過剰使用形式を表5-6に示す。

表 5-6 「それに」の過剰使用形式 (n=18)

形式	例数
「。<*それに→○>」	7
「、<*それに→○>」	11

「それに」の過剰使用の形式上の特徴として、文と文の間に読点がある形式の場合過剰使用が多く出現していると言える。

「。<*それに→○>」の例を (111) と (112) に挙げておく。

(111) いろいろな物を使われなければならない。それなのに、ものが使い終わったあと、いろいろなゴミが出る。<*それに→○>こんなにたくさんのゴミをどう処理すればいいのか問題である。(36)を再掲)

(112) 政府は外国人留学生に継ぎの福利を与えている。一、自費留学生は毎年130万円の奨学金を得ることができる。<*それに→○>、学費も学校や専攻によって違うが、3万から七万円ぐらいでよい。(88)を再掲)

「、<*それに→○>」の例を (113) と (114) に挙げておく。

(113) では、「人」はなぜ「人」と呼ばれるのか。性別も成長環境も関係なく、人の初めと終わりは同じだ、<*それに、→○>重要なのは人が夢をもっている、つまり、人には明確な目標があるということだ。

(114) 他の人は「草食男子」の出現が一種の衰退だと批判する。男がますます臆病になり、冒険もしなくなり、<*それに→○>外見にも注意しすぎ、女みたいに柔和では、社会の活力と生命力に莫大な影響を与えてしまうかもしれない。

「、<*それに→○>」11例のうち、読点の前に使用されるのが動詞なのか動詞以外なのかで分類してみると、前者が後者より多い。読点の前に動詞が使用された例は9例であるが、読点の前に動詞以外のものが使用された例は2例にすぎない。「、<*それに→○>」の特徴を表5-7に示す。

表 5-7 「、<*それに→〇>」の特徴 (n=11)

形式	例数
「動詞、<*それに→〇>」	9
「動詞以外、<*それに→〇>」	2

「動詞、<*それに→〇>」の例として、(115) と (116) のようなものがある。

(115) 民層の分解を促した。このような対外的危機意識、幕府の弱体化、下級武士や農民の困窮化などが重なり合い、<*それに→〇>將軍継嗣問題も絡まって、倒幕的尊王攘夷が起こった。

(116) それらが言語表現の中でどのように捉えられ、どんな意味上の共通点と相違点を持つのかを明らかにし、<*それに→〇>、「腹」を含む慣用句の中日異同から中日両国の文化で異同を解明したい。

「動詞以外、<*それに→〇>」の例として、(117) のようなものがある。

(117) 17 世紀、日本政府は鎖国の政策を実施するが、オランダだけが、<*それに→〇>除かれた。これは、オランダからのいくつかの外来語が広く使用されていることの要因と言える。

また、「、<*それに→〇>」の 11 例のうち、6 例には後文に取り立て助詞「も」が付いているという特徴がある。(118) を参照されたい。

(118) 封建的幕藩体制の弊害がだんだん顕現してきた。国内で、農民一揆や都市騒擾、打毀しなどが頻発し、<*それに、→〇>十九世紀後半から外国からの開国の要求も一段と高まった。

上記の例から、学習者には、「それに」と「も」とを一つのかたまりとして捉えている傾向があることも読み取れる。

5.3.2 前後文の関係の特徴

「そして」を中心に、過剰使用が前文と後文とどのような関係にあるのか考察する。(119)

と(120)は「そして」が過剰に使用された例²⁶である。

(119) 呉敏と申します。私は福建省の綺麗なところからきました。私が赤ちゃんの時、両親は私が将来美人になって、<*そして→○>、頭がいい子になることを願って、この名前にしました。

(120) そのため、筆者は戦後の日本の女子教育の変遷の状況とその変遷の原因をまとめ、<*そして→○>女子の価値観の変化の原因も分析しようと思う。

「そして」の不使用に見られる時系列関係と異なり、「そして」を過剰使用した(119)と(120)の場合、前文と後文の関係は非時系列関係にある。(119)の前文「私が将来美人になって」と後文「頭がいい子になる」は両親が抱く私への願いであるが、その願いを前文と後文で単に並べているだけである。(120)の前文「その変遷の原因をまとめ」と後文「女子の価値観の変化の原因も分析」も非時系列的に並列されているにすぎない。これらの例文から、「そして」の過剰使用における前後文脈の関係は図5-2のように示すことができる。長方形は2文間の論理関係を表し、長方形の中の丸はそれに従属する出来事を表し、前文の出来事Aと後文の出来事Bはプラスマークで繋がっている。(119)と(120)はそれぞれの論理関係に従属している出来事が付け加えられていると言える。

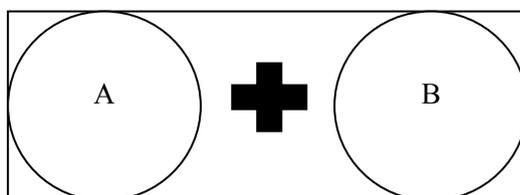


図 5-2 「そして」の過剰使用における前後文の関係

5.3.3 過剰使用の傾向のまとめ

「YUK コーパス」から抽出したデータから、学習者の作文には「添加型」の過剰使用が多く観察されることがわかった。5.3 節では、そのような学習者の「添加型」の過剰使用の実態

²⁶ ここでは、読点の後に「そして」が過剰に使用される用例のみを示しているが、句点の後に「そして」が過剰に使用される例も存在する。例えば次の i のような例である。

- i. もっとも相応しい助数詞が分からない場合には、どの名詞にも、「個」や「つ」使用する傾向があるからだ。<*そして→○>それは名詞の使用において、「個」と「つ」を乱用する状況が常に出てくることを意味する。」

この例では、前後文が句点で繋がれてはいるが、後文の文頭には指示詞が用いられているため、「そして」を使用しなくてもよい。しかし、このような例はあまりないため、ここでは数多く見られる読点が見られる前後文の関係を分析する。

を明らかにしたうえで、「そして」「また」「それから」「それに」における過剰使用の形式上の特徴と、「そして」の前後文脈の関係を分析した。「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用に見られる文の特徴を表 5-8 にまとめておく。

表 5-8 「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用に見られる傾向

	過剰使用の傾向
傾向①	読点によって文章が区切られる場合、文と文の間に「そして」「また」「それに」が過剰に使用される傾向にある。
傾向②	文中で読点の前に動詞が使用されると「そして」、続く後文に「も」が現れると「それに」が過剰に使用される傾向にある。動詞以外のものが使用されると「また」が過剰に用いられる傾向にある。
傾向③	句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間に「それから」が過剰に使用される傾向にある。
傾向④	「そして」の過剰使用の前後文には非時系列関係が見られる。

5.4 「添加型」における過剰使用の傾向の要因

前節で述べたように、読点によって二つの文章が区切られる場合、学習者は「そして」「また」「それに」を過剰に使用する。そして、それらの接続詞を過剰に使用するとき、読点の前に動詞が使用されると「そして」「それに」を選択し、動詞以外のものが使用されると「また」を選択するという、学習者独自のルールにもとづいて日本語を操っている傾向がある。一方、二つの文章が句点によって区切られる場合、続く後文に「それから」を使用する傾向が見られる。

5.4.1 節では、読点がある場合に学習者が「そして」「また」「それに」を過剰に使用するのなぜなのか。5.4.2 節では、読点の前に動詞が使用される場合に学習者が「そして」「それに」を過剰に使用するのなぜなのか。5.4.3 節では、読点の前に動詞以外のものが使用される場合に学習者が「また」を過剰に使用するのなぜなのか。5.4.4 節では、句点に続く後文に学習者が「それから」を過剰に使用するのなぜなのか。5.4.5 節では、「そして」の過剰使用の前後文に非時系列関係が認められるのなぜなのかを考察する。

5.4.1 読点に続く後文に「そして」「また」「それに」を過剰に使用する要因

読点で繋がれる二つの文のうち、「そして」「また」「それに」の例はそれぞれ 5.3.1 節の (93) と (94)、(101) と (102)、(113) と (114) で示した。そのほかの例として、「そして」を (121)

に、「また」を(122)に、「それに」を(123)に示しておく。

- (121) 綱領によって、地方軍隊の創立者の側面から、高杉と曾との軍事思想を成している各要素について考察を行い、<*そして→○>比較し、彼らの共通点と相違点を分析したいと思う。
- (122) 面倒を避け知らない人とワンナイトラブして寂しさを紛らわしても、<*また→○>叶えない恋に苦しむ同性愛者がどれぐらいいるだろう。
- (123) 日本では、高齢者の孤独死が急増し、<*それに→○>それが大きな社会問題のひとつとなっていることを聞き、私は大変びっくりした。

どの例も、文と文の繋がりを示す読点の後で誤用が生じているという特徴をもつ。第四章でも説明したが、李(2008: 35-36)によれば、中国語の文章における文脈の展開は、水が流れるように進むことが特徴であり、句点を打つまで何文が続いても論理の展開を妨げることはない。また、接続詞は文中に現れる方が多い。しかし、佐久間鼎(1983: 30-31)によると、言語美学が考慮される日本語では、句法の緊縮や文章の簡潔さが求められ、接続詞を省略することによって文章を整理する。とりわけ、文章中に接続詞がなくとも、自然に前後文の関係を理解できたり、他の手段によって認知できたりすることがあると説明されている。

楊・馬場(2004)は、中国語訳の観点から、「区切り」²⁷が感じられる点で“然后”は「それから」に対応するのに対し、「連続性」²⁸が感じられる点で“接着”は「そして」に対応すると指摘している。また、「それに」は、多くの場合話し言葉として用いられることから、中国語の“而且”に対応すると述べている。そこで、“然后”“接着”“而且”を対象にして、「中日対訳コーパス」(第一版)から抽出した「中国語原文 - 日本語訳文」の例を見てみよう。

- (124) a 父亲亲眼见到瓦盆的碎片从砖头上迸起的情景，接着想起余大牙的脑壳也像瓦片一样迸裂的情景。 《红高粱》
b 素焼きの大皿が煉瓦に当たって飛び散るのを見て、ø父は余大牙の頭が瓦のようにはじけた様子を思い出した。
- (125) a 过了很久，地主西大院的凶狗忽然发疯般地叫起来，接着是人的喊叫声。《金光大道》
b 長い時間がたった。突如、地主の屋敷の西側の庭のあたりで、øけたたましく犬が吠え、人の叫び声があがった。

²⁷ 林(1986: 46)によると、「『それから』は区切りを感じさせ、『そして』は連続性を感じさせる」。

²⁸ 注27と同じ。

(126) a 拒绝这个协定，就是表示国民党反动派在今年一月一日所提议的和平谈判，不过是企图阻止人民解放军向前推进，以便反动派获得喘息时间，然后卷土重来，扑灭革命势力。
《毛泽东选集第四卷》

b この協定を拒否したことは、ことし一月一日の国民党反動派の和平交渉提案は、反動派が息つぎの時間をかせいで ∅ 勢いをもりかえし革命勢力をおしつぶすために、人民解放軍の前進をはばもうとするたくらみから出たものにすぎなかったことをしめしている。

(127) a 但无论如何那是清平湾历史上有数的几桩自由恋爱之一，而且确实极富浪漫色彩。

《插队的故事》

b しかしいづれにしてもこれは清平湾の歴史において特筆すべき自由恋愛の例であり、∅ たしかに極めてロマンチックである。

(128) a 坐在泉边吃茶闲谈的时候，我和三弟问起四弟的身体，四弟叹息着说些悲观的话，而且常常偷眼看 H。
《关于女人》

b 泉のほとりで茶を飲みながらおしゃべりした。私と三弟が身体の具合を聞くと、四弟はため息まじりに悲観的なことをいい、∅ ちらちらと H のほうをぬすみ見する。

4.4.1 節で述べたように、中国語では前後文の論理関係が変わらない限り、それに従属する出来事は読点で繋げられる。その特徴に従い、中国語原文の (124a) から (128a) では、接続詞が読点をともなって使用されている。しかし、日本語訳文では接続詞を用いず、動詞の形態を変化させた連用形の「て」や接続詞以外の手段を用いている。

学習者の作文で読点の後に接続詞が付加される傾向があるのは、不使用と同様に、接続詞の出現位置と文脈の展開という中国語の影響があると考えられる。

5.4.2 「動詞のテ形等+読点」の後ろで「そして」「それに」を過剰に使用する要因

「動詞のテ形等+読点」の後ろで学習者が「そして」と「それに」を過剰に使用するのとはなぜだろうか。「そして」の過剰使用である (129) から (131)、「それに」の過剰使用である (132) と (133) から過剰使用の要因を探っていく。

(129) 「卧薪尝胆」という成語が述べるストーリーは、紀元前 6 世紀ごろ、越王勾践が呉国との戦争に負けて、<*そして→∅>呉王夫差の下部になった。(95) を再掲)

(130) 今、経済の発展とともに、人々の食生活はだんだんよくなり、<*そして→∅>大晦日の夕食も変わってきた。(96) を再掲)

- (131) 日本政府も「風呂敷」を使うのを宣伝し、<*そして→○>専門的に「風呂敷」文化の研究所を創立し、全国で多くの「風呂敷」の展覧会を開いている。((94)を再掲)
- (132) 民層の分解を促した。このような対外的危機意識、幕府の弱体化、下級武士や農民の困窮化などが重なり合い、<*それに→○>将軍継嗣問題も絡まって、倒幕の尊王攘夷が起こった。((115)を再掲)
- (133) それらが言語表現の中でどのように捉えられ、どんな意味上の共通点と相違点を持つのかを明らかにし、<*それに→○>、「腹」を含む慣用句の中日異同から中日両国の文化で異同を解明したい。((116)を再掲)

益岡(2012)の定義を用いると、(129)の文中に見られる「て」は「テ形接続」、(130)の「よくなり」と(132)の「重なり合い」は「中立形接続」ということになる。両者とも連用接続機能をもつ。(131)と(133)の「し」も接続機能をもつ。これらすべての例はいずれも文中で接続の意味を示すことができる。また森田(1998)によると、「そして」は一つの話題で統一されている時によく用いられ、接続助詞「て」と同様な使われ方がされる。これに対し、「それに」は、事柄や話題などを累加する説明的叙述として用いられ、文中で用いられる接続助詞「し」と同様な使われ方がされると説明されている。

先行研究が示すように、「テ形接続」や「中立形接続」が現れると、文中で接続詞を用いずとも接続関係を示すことができる。しかし、学習者は読点で文が切れていないことは理解しているが、接続詞を用いず接続関係を示す手法を理解してはいない。その結果、文中接続や接続助詞の理解不足が文中における「そして」「それに」の過剰使用を生じさせている。

5.4.2.1 「そして」

「そして」の過剰使用の要因を考察していきたい。広島大学の中国語母語話者の日本語学習者²⁹が作成したレポートや日記、感想文を収集した。その中から、(134)から(137)を以下に示しておく。

- (134) 彼女がそのアイデアに対するどう考えているのかはわからないが、少なくとも、主人はペンションが出来上がったとき少年のように目を輝かせ、うれしくて泣いてしまったところを見ると、彼女は主人が喜ぶならば、文句一ついわずに主人のために朝から晩まで働けると思い、そしてそうしてきた。

²⁹ 調査対象は、全員広島大学の大学院で学んでいる中国語を母語とする留学生である。全員日本語能力試験N1取得者であり、日本語母語話者とほとんど変わらない日本語レベルにあると思われる。

- (135) 食堂でご飯を食べて、そして授業に行きます。
- (136) ここでの言説とは、社会集団が歴史的・社会的立場に制約された思想・意識をイデオロギーとして捉え、そして書物やマスコミなどを通して世間に反映した行為であると考えている。
- (137) このように、先進国出身の女性は生産労働力化してきて、そして再生産部門の担い手である途上国出身の女性を家事労働者として雇うことによって、グローバル的な女性間の階層化が進んでおり、「女性」間の分断が現れてきたことがわかった。

これらの例文から、読点の前に動詞が使用される場合に「そして」を使用するのは、「YUK コーパス」だけでなく、学習者に見られる日常的な現象であると言えるであろう。そして、「そして」の使用理由を明らかにするため学習者に聞き取りを実施した³⁰。すると、「そして」の『て』は前に来る動詞の形と同じであるから、同じ意味で、口調がいい」という回答があった。つまり、「そして」と「テ形接続」における形式の類似性から誤用が生じているということになる。

5.4.2.2 「それに」

この節から「YUK コーパス」を用いた説明に戻る。二つの文章を読点で繋がれる文のうち、後ろに「も」が付いている「それに」の過剰使用の例としては(138)と(139)のようなものがある。

- (138) 封建的幕藩体制の弊害がだんだん顕現してきた。国内で、農民一揆や都市騒擾、打毀しなどが頻発し、<*それに、→○>十九世紀後半から外国からの開国の要求も一段と高まった。(118)を再掲)
- (139) 養老はよく老人人口と青年人口の代間関係の矛盾を解決するとしても、大きな制約性がある。家庭規模が縮小し、<*それに→○>家庭メンバーも減少するために、老人の世話の重責はいつも息子の嫁となる。

語構成の観点から、「それに」は「それ」と「に」に分解でき、「それ」を基点として「に」で累加の意味が示される。つまり、「それに」で接続される文章において、前文の出来事は終了せず、前文の出来事の上に後文の出来事が重なるというイメージをもっている。この点については、楊・馬場(2004)に同様の指摘がある。

市川(1978: 77-78)によると、接続語句は、その用法として、補助的な場合と必須的な場合

³⁰ 2018年5月17日に聞き取りを行った。

とが区別され、補助的な場合は省略されやすい。例えば、助詞「も」が用いられることによって、前文と後文の関係がつかみやすくなっていることから、接続語句を必ずしも必要としない。

(138) と (139) のように、添加の意味を表す「も」が用いられているため、「それに」は省略すべきである。しかし、学習者は「それに」を「も」と一緒にひとかたまりで捉えている傾向がある。それはなぜであろうか。

5.4.1 節で説明したように、「それに」は中国語の“而且”と対応している。中国語の“而且”は“也”と頻繁に一緒にペアとして使用されていて、“而且…也”になる。“而且…也”と意味的に近いフレーズは“况且…也”や“再说…也”などがある。

「中日対訳コーパス」(第一版)で検索すると、(140) から (142) のような例がある。

(140) a 「あの人、悪い人じゃないのよ。ときどきひどいこと言うから頭にくるけど、少くとも根は正直な人だし、お母さんのことを心から愛していたわ。それにあの方はあの人なりに一所懸命生きてきたのよ。」 『ノルウェイの森』

b “他那人，人并不坏。有时说话挺气人，但至少秉性耿直，一个心眼地爱我妈。而且他也在尽他的努力来生活。”

(141) a それに僕にしたところで何かの折りにふとそう思っただけで、それを深く追求してみようなんていう気はさらさらなかったのだ。 『ノルウェイの森』

b 况且就我而言，也是姑妄想之而已，从来就没想寻根问底。

(142) a 少しぐらい欠点があっても、貴女のところなら我慢しますがね、それにミシンのあることは有難い、いろいろ手伝ってもらえる。実際に女手がほしいんですよ。縫ってもらいたいものはふんだんにあるんです。 『あした来る人』

b 如果是您那里，即使有点缺欠也可以将就。再说，有缝纫机也很难得，这个那个的好能请您帮帮忙。也真需要女子帮把手，要缝的东西多着哩！”

「それに」は“而且…也”“况且…也”“再说…也”と対応している。したがって、学習者が中国語における“而且…也”などの組み合わせとしての使い方をそのまま日本語にも適用させると、日本語の文と文の間に「それに」と「も」で添加関係を表すことができると誤認識し、上記のような誤用が生まれてくると考えられる。

以上からわかるように、読点の後に、学習者は単に添加関係を表したいときには「そして」を使用し、後ろに「も」など添加を表す語がある場合は上に重なるというイメージから「それに」を選んでしまう傾向がある。

5.4.3 「動詞以外+読点」の後ろで「また」を過剰に使用する要因

5.4.2 節で、学習者がどうして動詞の後ろに「そして」「それに」を過剰に使用するののかについて、その要因を考察した。その結果は、動詞でない場合であれば、「また」を選択してしまうことを示している。(143) から (146) は、「また」の過剰使用の例である。

(143) 大学の生活は昔の生活と違います。勉強するほかに、<*また→○>人との付き合いをしなければなりません。特に仕事をする時に、私は本当に緊張しています。(105) を再掲)

(144) 寮の部屋には六人が住んでいる。私と二人のクラスメートのほかに、<*また→○>三人の英語科の学生だ。(106) を再掲)

(145) このように、いろいろな新たな用法、<*また→○>単語が出てくるかもしれない。今はまさに新しい物を受け入れる時代と言えるだろう。

(146) 白色は明るくて、清らかなイメージを表すことができる反面、<*また→○>死亡、邪悪、恐ろしい、不祥なシンボルとしても使われる。

これらの誤用例に見られる特徴は、「ほかに」や「反面」などという情報追加のマークが「また」に付随して用いられることである。これらの例文では、文中の追加マークのみで接続の意味を表すことが十分可能であり、再び接続関係を表す接続詞を使用する必要はない。それにもかかわらず、学習者はこの規則を十分に把握していないために「また」を不適切に使用している。

では、学習者はどのような意図から「また」を使用してしまうのであろうか。「また」がもつ意味を検討してみたい。石黒 (2008 : 95-96) は、「また」は並列を表し情報の追加を示唆すると説明している。それとともに説明の中で、「そして」とは異なり、「また」は並列したものに情報の面で軽重が生じることはないことも示唆している。森山 (2016 : 31) は、『また』は別のことを挙げるのに対して、『そして』は同類別項目のこととしての位置づけを示すと指摘している。つまりは、情報の面で軽重が生じない異類なものの追加が「また」の主な用法ということになる。

「また」の過剰使用の例文である (143) から (146) を分析すると、いずれもの例文でも二つの事柄が並列しているときに「また」が用いられている。(143) では「勉強」→「人との付き合い」、(144) では「私と二人のクラスメート」→「三人の英語科の学生」、(145) では「用法」→「単語」、(146) では「清らかなイメージを表すことができる」→「死亡、邪悪、恐ろ

しい」という具合である。そのため、学習者は単純な情報追加を表すときに、「また」を使用してしまう傾向があると言える。

5.4.4 句点に続く後文に「それから」を過剰に使用する要因

形式上、「そして」「また」「それに」と逆の関係にある「それから」を過剰に使用する要因を分析していく。二つの文章が句点で繋がれる文のうち、「それから」の例は(147)から(149)に示したとおりである。

(147) 私の夢は科学者になることです。中学校の時、それはありえないと認識してから、夢は学校の先生になりました。<*それから、→○>大学に入ってから、私に夢はないです。(107)を再掲)

(148) 私はすぐ寝たいと思いました。二時間くらい経ちました。食事の時間になりました。<*それから、→○>自分でカップ麺を食べて、小説をよみつづけました。(108)を再掲)

(149) 挨拶をします。そして、朗読をします。それから、毎朝八時から授業を受けます。そして、晩ご飯を食べます。<*それから→○>毎晩九時に勉強をします。そして、十一時に寝ます。私の趣味はスポーツです。

グループ・ジャマシイ編(1998:173)によると、「それから」は、「そのあと」の意味を持ち、テ形に続いて「V-て、それから」の形になることが多い。楊・馬場(2004:30)は語構成の観点から、「それから」は「それ」と「から」で構成されており、その「から」は起点を表すため「それから」で結び付けられた前後文の間には区切り性が存在すると指摘している。守屋(2000)は、「それから」がもつ前文と後文における文章の分離性に注目した研究を行っている。これらの先行研究によると、「それから」には区切り性(分離性)を示す特徴があることになる。学習者は「それから」の区切り性を意識しすぎ、前文にある出来事が終結した後に後文にある出来事が生じると思い込んでいるようである。

また、形式上のみならず意味上も一定の傾向が見られる。市川(2000:84)によると、「学習者は並列関係より時間の前後関係を表わす接続詞として『それから』をとらえている」と考えられる。(147)の「中学校の時」→「大学に入ってから」、(148)の「食事の時間になりました」→「カップ麺を食べて」、(149)の「晩ご飯を食べます」→「九時に勉強をします」のように、どの例の前後文も時系列関係にある。したがって、学習者は句点の後に時系列関係を表現したいときには「それから」を選択してしまう傾向が生じるのである。

5.4.5 「そして」の過剰使用の前後文に非時系列関係が見られる要因

5.3.2 節で、「そして」の過剰使用の前後文が非時系列関係にあることを明らかにした。(150)から(153)はその例である。

(150) 吳敏と申します。私は福建省の綺麗なところからきました。私が赤ちゃんの時、両親は私が将来美人になって、<*そして→〇>、頭がいい子になることを願って、この名前にしました。((119) を再掲)

(151) そのため、筆者は戦後の日本の女子教育の変遷の状況とその変遷の原因をまとめ、<*そして→〇>女子の価値観の変化の原因も分析しようと思う。((120) を再掲)

(152) 次に、日本での外国人労働者の現状とその特徴を述べ、特に、不法就労者の特徴について探究し、<*そして、→〇>日本における外国人労働者の問題点をまとめる。最後に、日本政府の最新政策を紹介し、日本の経験を整理する。

(153) 70年代の日本の女子教育は、教育内容において、男子より様々な不足点が見られ、<*そして→〇>内容も限定されていた。しかし、教育を受けられる範囲は大幅に拡大した。

学習者は、前後文に非時系列関係が現れるとき、なぜ「そして」を過剰に使用するのであろうか。4.4.3 節で、前後文の間には時系列関係がある場合、中国語では「意合法」という表現の時序範疇に従い接続詞を省略することを説明した。しかし、前後文には時系列関係がない場合、接続詞を使用しないと前後文の論理関係が理解できない。このことを念頭に置きつつ、(154)を見てみよう。

(154) a 野島は何となく淋しい気がした。そして、大宮が一人で波のりをしている方に出かけた。 『友情』

b 野島感到一种说不出的寂寞，于是往大宫玩滑板的那边走去。

*c 野岛感到一种说不出的寂寞。往大宫玩滑板的那边走去。

(154) において、「そして」の前文「野島は何となく淋しい気がした」と後文「大宮が一人で波のりをしている方に出かけた」との間に時系列関係はない。中国語に翻訳すると、「読点+于是」を使用する(154b)のほうが自然である。なぜなら、(154)は時系列関係にはないため中国語の文章では接続詞が必要になり、接続詞が使用されていない(154c)は非文になるからである。

日本語では、読点の場合には中立接続形などを使用して前後文の論理関係を表現する。他方、中国語では中立接続形がないため、「読点+接続詞」だけで前後文の関係を表す。したがって、(150) から (153) のような非時系列関係を表現するために、「そして」を用いてしまう。

5.4.6 過剰使用の傾向の要因のまとめ

以上、「YUK コーパス」から抽出した誤用例を対象に、学習者の「そして」「また」「それから」「それに」における過剰使用の傾向とその要因を究明した。その結果、次のようなことが明らかになった。

まず、読点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間に「そして」「また」「それに」が過剰に使用される傾向にある。過剰使用が読点の場合に頻出するのは、学習者の母語である中国語の接続詞の出現位置と文脈の展開が影響していると考えられる。

そして、文中で、読点の前に動詞が使用されると「そして」「それに」、動詞以外のものが用いられると「また」が過剰に使用される傾向にある。その要因としては、動詞の文中の接続表現を十分に理解していない学習者が独自の規則を作っていることが考えられる。動詞の文中接続であれば、形式上の類似性で「そして」が単に添加関係として選択され、中国語の連語の句型“而且…也”の影響で後ろに「も」などがある場合は「それに」が選択され、動詞以外であれば「また」が選択されている。

また、句点によって文章が接続される場合、文と文の間に「それから」が過剰に使用される傾向にある。その要因としては、「それから」の区切り性が反映されていると考えられる。

最後に、前後文が時系列関係にないとき、「そして」が使用されやすい。日本語は読点の場合には中立接続形などを使用して前後文の論理関係を表現するが、中国語は中立接続形がないため「読点+接続詞」だけで前後文の関係を表す。

以上の結果を表 5-9 にまとめておく。

表 5-9 「添加型」に見られる過剰使用の傾向と要因

	傾向	要因
①	読点によって文章が繋がれる場合、文と文の間に「そして」「また」「それに」が過剰に使用される傾向にある。	中国語の接続詞の出現位置と文脈の展開の影響。
②	文中で、読点の前に動詞が使用されると「そして」「それに」、動詞以外のものが使用されると「また」が過剰に使用される傾向にある。	文中の接続表現に関する知識の欠如による学習者独自の規則。 1) 動詞の場合、形式の類似性で「そして」を単に添加関係として使用する。中国語の連語の句型“而且…也”の影響で後文に「も」など付属する場合には「それに」を選択する。 2) 動詞以外の場合、「また」を選択する。
③	句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間に「それから」が過剰に使用される傾向にある。	前後文が時系列関係にあるとき、句点の場合区切り性で「それから」を使用するという規則。
④	「そして」の過剰使用の前後文には非時系列関係が見られる。	日本語と中国語とで文章構成が異なる。

5.5 おわりに

第四章で論じた「そして」「また」の不使用と、第五章で論じた「そして」「また」の過剰使用は対の関係にある。「そして」「また」の不使用と過剰使用には、二つの文章を区切るのが句点なのか、それとも読点なのかによって異なった傾向が見られた。句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間に「そして」と「また」は使用されない。他方、読点によって文章が接続される場合、読点の前に動詞が使用されると「そして」が過剰に用いられる。また、読点の前に動詞以外のものが使用されると「また」が過剰に使用される。以上をまとめると、図 5-3 のように表すことができる。

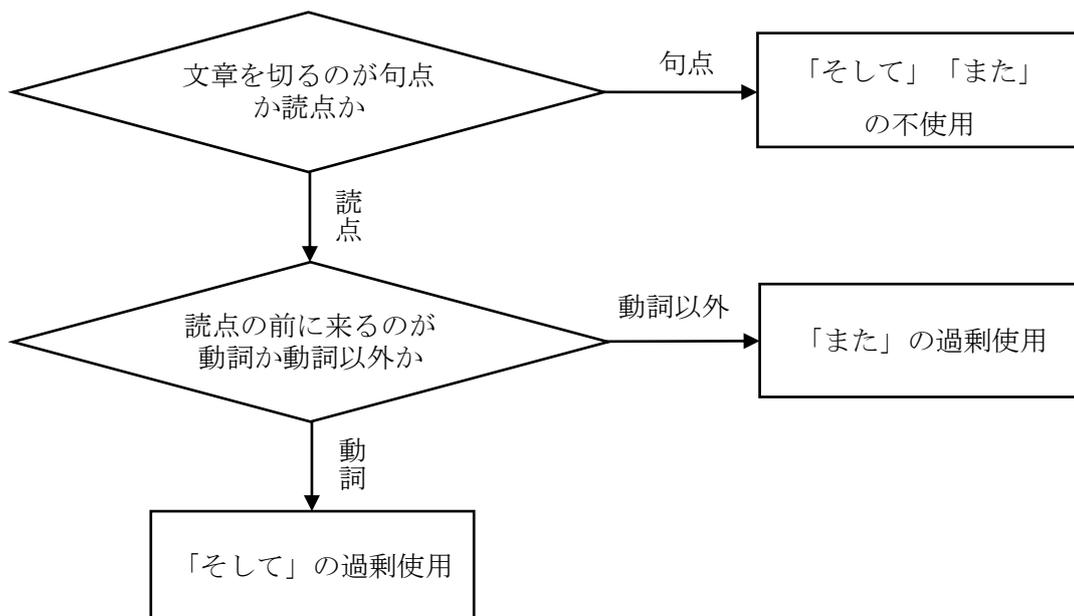


図 5-3 「そして」「また」の不使用と過剰使用の形式上に見られる規則性

また、「そして」の不使用と過剰使用には前後文の文脈関係に一定の規則性が見られる。第四章と第五章の分析結果を図に表すと、図 5-4 のようになる。第四章で明らかにしたように、「そして」の不使用は時系列関係にあるときに生じるものであった。他方、第五章で明らかになったのは、「そして」の過剰使用が時系列関係がないときに生じるというものであった。これらの結果から、「そして」の不使用と過剰使用には対の関係が見いだせると言える。

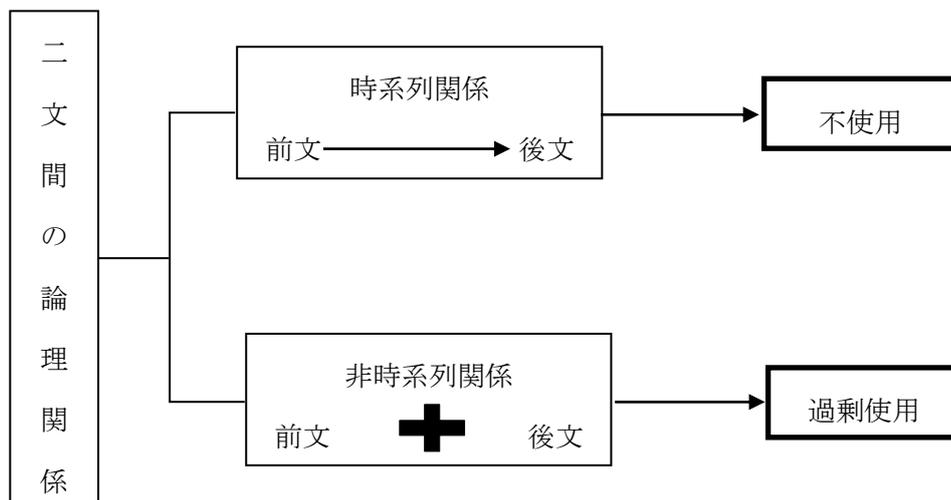


図 5-4 「そして」の不使用と過剰使用の文脈に見られる規則性

第六章 「添加型」における混用

—「そして」「それから」「それに」を中心に—³¹

6.1 はじめに

本章では、「YUK コーパス」から抽出した「添加型」の混用に関する誤用例を分析する。そのうえで、混用の誤用形態と誤用傾向を明らかにし、その誤用が生じる規則性を考察する。

「YUK コーパス」から収集した「添加型」の誤用例を精査してみると、「そして」「それから」「それに」を含んだ例文に混用が見いだせる。

(155) 日本政府の政策では、就職支援の需要政策の面でまだ不十分だということが分かる。

<*そして→また>、日本は大学生の総合的な素質と就職能力の教育を重視するが、大学生の就職観の教育はまだ不十分である。

(156) どこかであると思います。これらの問題は地球温暖化が要因でしょう。いろいろな環境問題はこれが要因です。<*それから→それで>、たくさんの地方が、「灯を閉て」に参加します。

(157) 本文はまず、中国の現行の医療制度と日本のを説明する。次に、両国の医療保険制度の利害を分析する。<*それに→そして>、日本医療制度からのヒントを指摘して、今後の改革に有用な意見を出す。最後に、本稿の内容をまとめる。

上記は、(155)では「添加型」の「また」、(156)では「順接型」の「それで」、(157)では「添加型」の「そして」を使用するほうが適切にもかかわらず、学習者が「添加型」の「そして」「それから」「それに」を使用することで生じた誤用である。「YUK コーパス」には「添加型」の誤用数が491例あるが、その中に混用の誤用数は第三章の表3-1で見たように280例(全体の57.0%)あり、第1位の誤用類型となる。

これまでの研究は、個別の「添加型」の用法や使い分けに焦点をあてたものを主としており、学習者による「添加型」の誤用例を対象としたものはわずかしかない。前者の代表的な研究としては、楊・馬場(2004)と森山(2016)がある。楊・馬場(2004)は、中国語訳との意味を比較し、「そして、それから」及び「それに、そのうえ」の意味の異同について考察している。森山(2016)は、「そして」「また」の使い分けに焦点をあて、言語の習熟について論じてい

³¹ 第六章は唐(2019)をもとに加筆修正したものである。

る。後者の研究としては守屋（2000）があり、日本語教育への応用および誤用の回避という観点から、「そして」と「それから」の意味上の違いを論じている。しかしながら、これらの研究は「添加型」の混用という誤用類型について、どのような誤用分布が見られるのか、そして、その誤用が生じる要因が何であるのかといった点は検討していない。

本章は、「YUK コーパス」から抽出した「添加型」の混用の誤用例を分析し、「添加型」「そして、それから、それに」を中心として、「添加型」の混用の傾向と要因を明らかにすることを目的とする。「そして、それから、それに」を研究対象とする理由は、6.2 節の分析結果が示すように、それらが混用の誤用形態の中で出現頻度の上位 3 位を占める接続詞であるからにほかならない。

そのうえで、本章は「添加型」の混用における三つの疑問を論じていく。その疑問とは、(1) 「そして、それから、それに」が最も混用しやすい接続詞は何であるのか、(2) 「そして、それから、それに」は互いに誤用が対の関係にあるのか、(3) 上の (1) と (2) で見られる傾向が生じる要因は何であるのか、というものである。

なぜ (2) の疑問が問われる必要があるのであろうか。第四章の不使用と第五章の過剰使用の分析では、「そして」「また」の不使用と過剰使用の間に句読点という文章の形式上から対の関係が見られた。すなわち、第五章 (5.5 節) でまとめたように、句点の場合「そして」「また」の不使用、読点の場合「そして」「また」の過剰使用が生じるという対の関係がわかった。この対の関係は誤用類型間関係である。では、常に接続詞を使用するという誤用である混用では、どのような規則性が見られるのであろうか。混用は不使用と過剰使用とは根本的に質が異なるため、「そして、それから、それに」の接続詞間の対の関係が見られるのかを検討する必要がある。

以下、6.2 節では「添加型」の混用実態を整理する。6.3 節では、「そして」「それから」「それに」の混用傾向を考察する。6.4 節では、混用傾向の要因を考察する。そして、6.5 節では本章で明らかになったことをまとめる。

6.2 「添加型」における混用の実態

図 6-1 は、第三章の表 3-1 に従い「添加型」の混用例の誤用分布を示したものである。この図 6-1 を見ると、「YUK コーパス」に現れる「添加型」の混用 280 例は「そして、それから、それに、また、そのうえ、しかも、つぎに」のいずれかである。

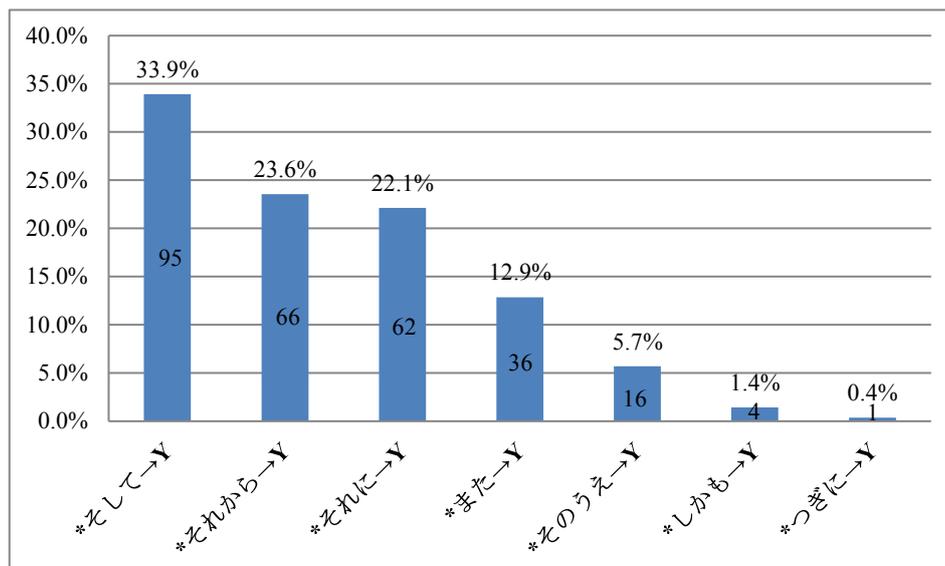


図 6-1 「添加型」の混用の誤用形態 (n=280)

図 6-1 に含まれる誤用例として、(158) から (163) のようなものがある。

- (158) 最初の一週間は大切な友達と会いました。毎日買い物に行ったり、ご飯を食べたりしました。<*そして→その後>、学校に帰って、高校の歴史先生とご飯を食べました。
- (159) 中国各地の風景は美しい。東北地方や西北地方などがきれいだ。最近、勉強やら部活やら忙しかった。<*それから→だから>、旅行に行つてのんびりしたいと思う。特に、東北地方に行きたいと思う。
- (160) あとでスーパーに行つて、カードを買いました。そのカードにお母さん、愛しているよと書いてありました。<*それに→また>、ジュースも買いました。
- (161) 中国で、酒は悠久の歴史がある。『汉书・食貨志』では、酒は天帝から人類に恵む贈り物であると述べている。<*また→そして>、中国には、「毎日酒一杯を飲めば、99歳まで生きられる」という諺がある。
- (162) 廃水を勝手に川の中に出す工場がたくさんあります。そして、魚などが生きられる環境がなくなっています。<*そのうえ→さらに>、そんな廃水にいる魚を食べる人間も病気になるかもしれません。((34) を再掲)
- (163) しかも、晩婚化や少子化が進むなどの現象が増えています。しかし、両者に大きな関係はないと思います。<*しかも→従つて>、晩婚化や少子化が進み、離婚率が上がったなどの現象が社会の進歩の過程に生まれて、簡単にこの現象が。

図 6-1 が示すように、「*そして→Y」の混用が 95 例 (33.9%) で最も多く、「*それから→Y」が 66 例 (23.6%)、「*それに→Y」が 62 例 (22.1%) と続き、これらは「*また→Y」などと比べ数値が圧倒的に高い。「*そして→Y」と「*それに→Y」と「*それに→Y」の混用は学習者にとって学習難易度が高いものであり、その要因は解明されなければならない。図 6-1 で示されたのは混用の誤用形態 280 例であったが、図 6-2 に添削者によって「添加型」に修正された「*X→添加型」200 例の状況を整理しておく。

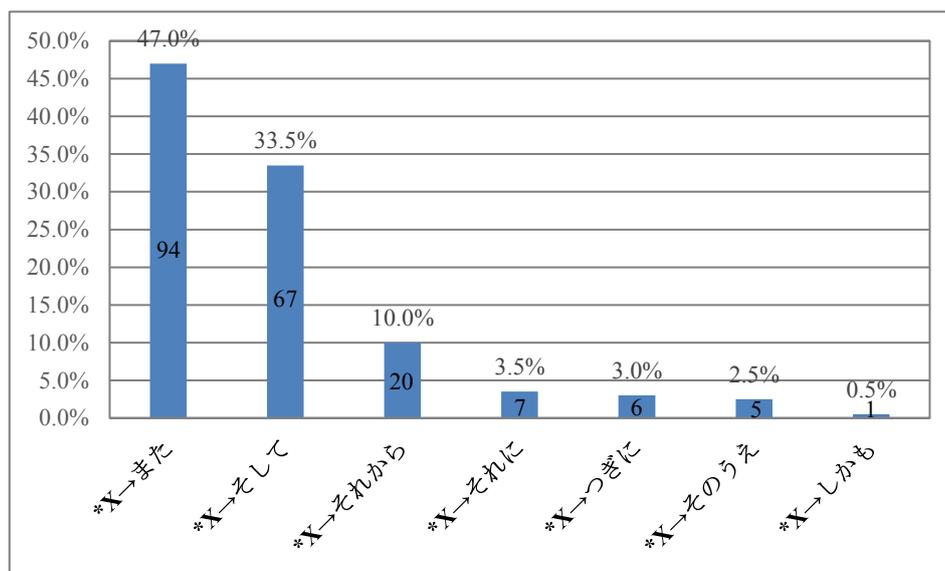


図 6-2 「添加型」に修正された混用の誤用形態 (n=200)

図 6-2 を見ると、「*X→また」の混用は 94 例 (47.0%) であり、最も多い。図 6-1 と図 6-2 を合わせて考えると、その「*X→また」は図 6-2 の中に最も多く出現しているが、それと対の関係にある「*また→Y」は図 6-1 にあまり出現していない。この事実は、学習者が「また」の代わりに他の接続詞を多用していること、つまり、「また」は学習者によって使用されにくいいため、「添加型」の「*また→Y」という混用が現れにくい傾向にあることを意味している。一方、図 6-2 が示すように「*X→そして」の混用は 67 例と「*X→また」に比べれば少ないが、それと対の関係にある「*そして→Y」の混用は図 6-1 で最も起きている。この事実は、学習者が他の接続詞の代わりに「そして」を多用していること、つまり、「そして」は使用頻度が高いことから、「添加型」の「*そして→Y」という混用が現れやすい傾向にあることを意味している。

以下では、「添加型」の混用の中から頻度が上位 3 位にある「*そして→Y」「*それから→Y」「*それに→Y」を取り上げる。

6.3 「添加型」における混用の傾向

前節では、「添加型」の混用の誤用形態やその傾向、誤用順位を示した。以下、6.3.1 節では「*そして→Y」の混用状況を、6.3.2 節では「*それから→Y」の混用状況を、6.3.3 節では「*それに→Y」の混用状況を分析する。そして、6.3.4 節では本節で明らかになったことをまとめる。

6.3.1 「*そして」

「YUK コーパス」から抽出した「*そして」の混用数は、図 6-1 で見た 95 例である。添削者によって修正された接続詞に従い用例を分類すると、その混用傾向と混用順位は図 6-3 のようになる。

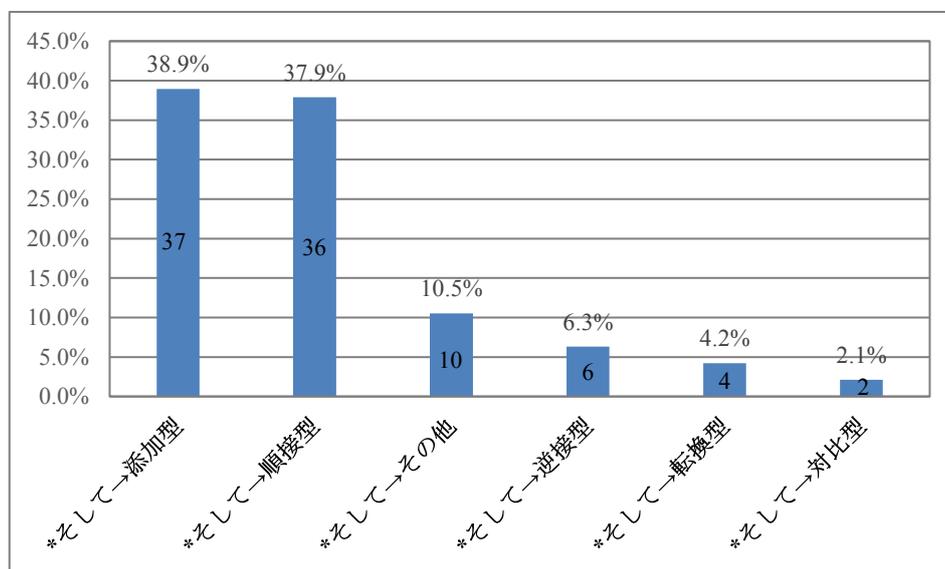


図 6-3 「*そして」の混用傾向 (n=95)

「*そして→添加型」が 37 例 (38.9%) で最も多く、「*そして→順接型」36 例 (37.9%) とあわせると、この二つの混用だけで 95 例中の 73 例を占め、8 割近くになる。そのほかの混用は「*そして→その他³²⁾」が 10 例 (10.5%)、「*そして→逆接型」³³⁾が 6 例 (6.3%)、「*そして→転換型」が 4 例 (4.2%)、「*そして→対比型」が 2 例 (2.1%) である。こうした事実は、学習者が「そして」以外の「添加型」や「順接型」を使用すべき場面で「そして」を数多く誤って使用していることを意味している。つまり、「そして」と「そして」以外の「添加型」、あるいは「そして」と「順接型」の区別の困難さが学習者にとって接続詞の用法の理解を妨げ

³²⁾ 「その他」とは、副詞や接続助詞といった接続表現に含まれるものである。

³³⁾ 本論文は出現率が高いものに焦点をあてているため、「*そして→逆接型」は研究すべき興味深い現象であるが、その考察は別稿に譲る。

の一因になっている。以下では、誤用が最も多い「*そして→添加型」を対象にその内訳を考察する。

「*そして→添加型」の混用は図 6-3 で示した 37 例であるが、その内訳を見ると「*そして→また」が 24 例、「*そして→それから」が 9 例、「*そして→さらに」が 3 例、「*そして→そのうえ」が 1 例である。図 6-4 に整理しておく。

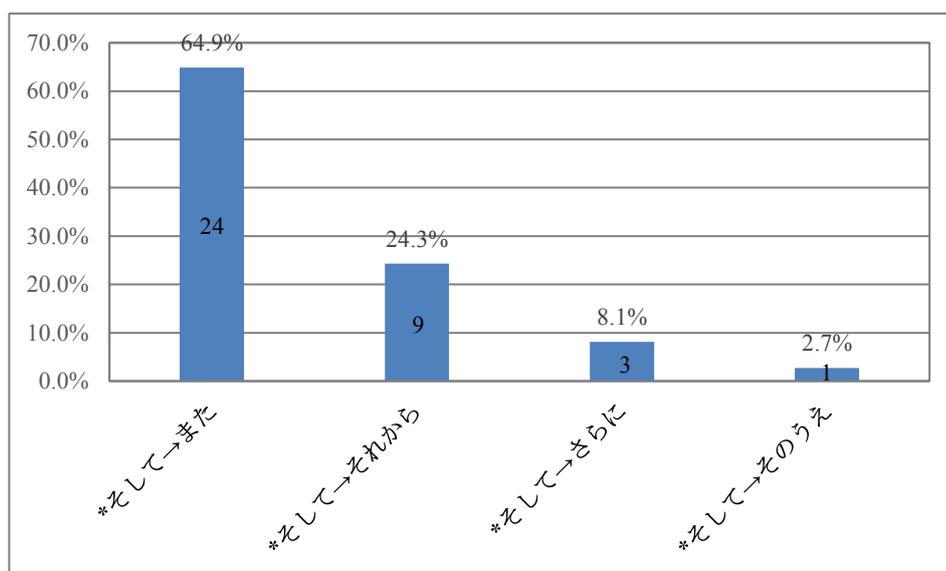


図 6-4 「*そして→添加型」の内訳 (n=37)

このように「*そして→また」と「*そして→それから」の混用が顕著である。つまり、学習者は「そして」と「また」、「そして」と「それから」とがもつ意味と使用条件に関する理解が不足しているため、「そして」を「また」あるいは「それから」と区別することなく混同して使用していると思われる。この点は 6.4.1 節と 6.4.2 節で詳細に考察する。

「*そして→添加型」の例として、(164) から (167) のようなものがある。

- (164) 先行研究の資料を分析すると、「個」のように、「つ」が使える名詞の範囲も大きいことに気がついた。<*そして→また>、形がある名詞と形がない名詞の比率はほぼ同じだ。
- (165) 日本の音楽を聞くのが大好きで、特にロックが好きです。日本のいろいろなバンドの歌を聞いています。<*そして→それから>、この前夏目漱石の「こころ」を読んで、日本文学にも興味を持ちました。

(166) 今の若い男性はますます「男らしさ」を失っていると様々な人が批判している。＜*そして→さらに＞、人々が心配しているのは、このままでは、将来の日本社会が「草食男子」のような弱くてネガティブな男ばかり…

(167) 宋孟元老『东京梦华录・元宵』（訳）内には数十丈もある二本の長竿が繪綵で結ばれ、＜*そして→その上＞紙で作った百劇の人物が置かれており、風に吹かれるとまるで神様のように見える。

6.3.2 「*それから」

図 6-1 で見たように、「YUK コーパス」に認められる「*それから」の混用は 66 例である。添削者によって修正された接続詞の種類に従い誤用例を整理すると、「添加型」が 24 例、「その他」が 23 例、「順接型」が 18 例、「転換型」が 1 例となる。混用傾向と順位を図 6-5 にまとめておく。

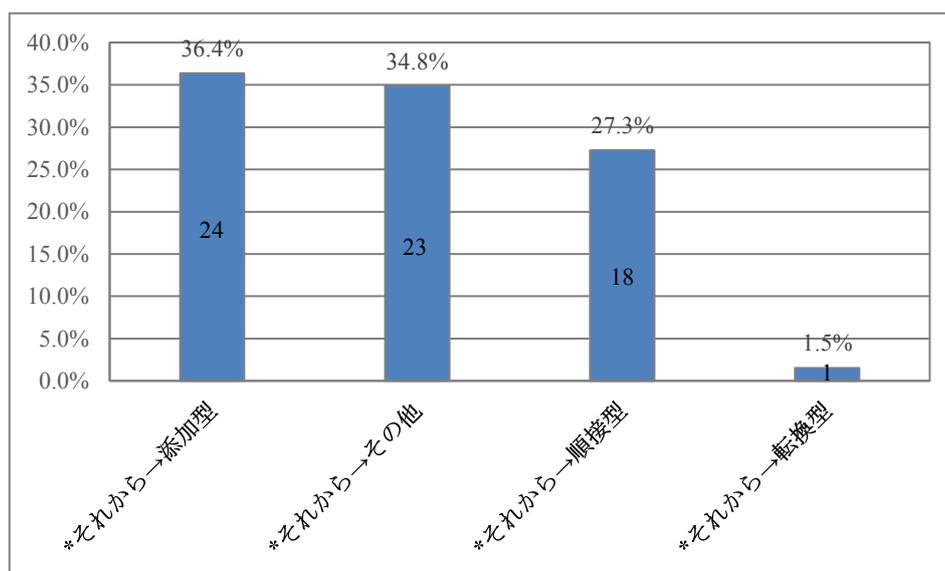


図 6-5 「*それから」の混用傾向 (n=66)

図 6-5 で示されているように、「それから」の混用は「それから」を使用すべきところに他の「添加型」が使用されている誤用が最も多い。その次に多いのが「順接型」が使用された誤用である。「それから」と他の「添加型」との意味機能の使い分けが学習者にとって大きな問題になっていると言える。

「*それから→添加型」の「添加型」の内訳を調べると、「*それから→また」が 13 例、「*それから→そして」が 6 例、「*それから→つぎに」が 4 例、「*それから→さらに」が 1 例ある。図 6-6 にその内訳を示す。

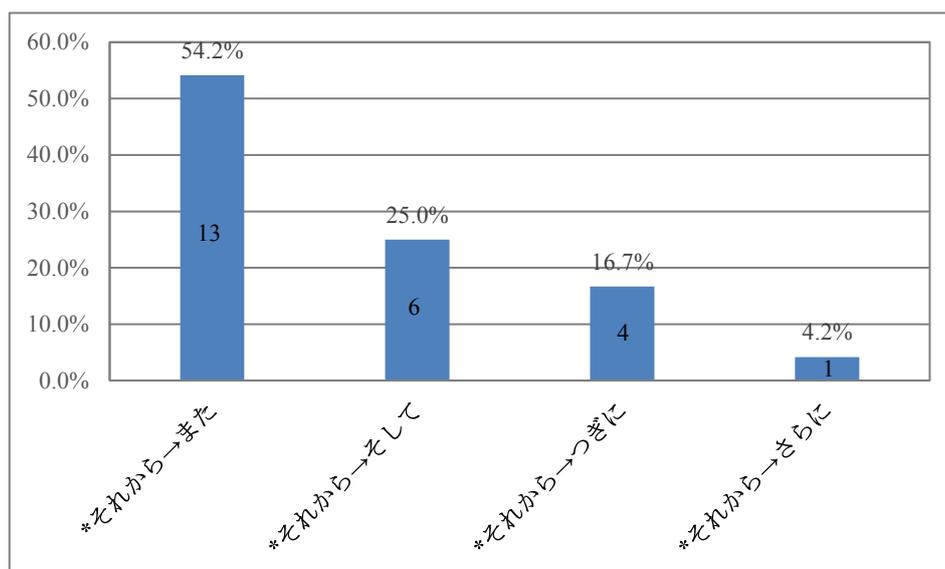


図 6-6 「*それから→添加型」の内訳 (n=24)

図 6-6 から「*それから→また」の誤用だけで過半数を超えている。学習者は「*それから」を「また」と頻繁に混用して使用する傾向にあると言える。図 6-6 の誤用例をそれぞれ (168) から (171) に示しておく。

- (168) 同浴も日本の独特の文化であり、時に家族と共に浴槽に入って、話したり笑ったりするのは楽しいものである。<*それから→また>お風呂についての産業も日本の経済の発展を促している。
- (169) 語として使われ、新しい語を作った。語構成の造語力を高めて、接頭語と接尾語を利用する造語法が入った。<*それから→そして>、動詞+補語の構造を発達させ、動詞を名詞化にさせた現象が増えた。
- (170) 語源由来を整理する。また時代によって変化した意味とそれに反映される文化、生活などをそれぞれ整理する。<*それから→次に>、実例などを通し、対照研究によって、両国の「黒」のイメージの異同を分析する。
- (171) 安全意識の普及の意味などの研究が少しあるが、日本人にとっての安全意識の重要性について検討し、<*それから→さらに>日本人の安全意識から何を勉強することができるのか、という論文はまずないのであろう。

6.3.3 「*それに」

図 6-1 に示したように、「YUK コーパス」には「*それに」の混用例が 62 例ある。添削者が修正した接続詞の種類によって誤用例を整理すると、「添加型」が 50 例、「順接型」が 7 例、「その他」が 5 例である。その結果を図 6-7 に示す。

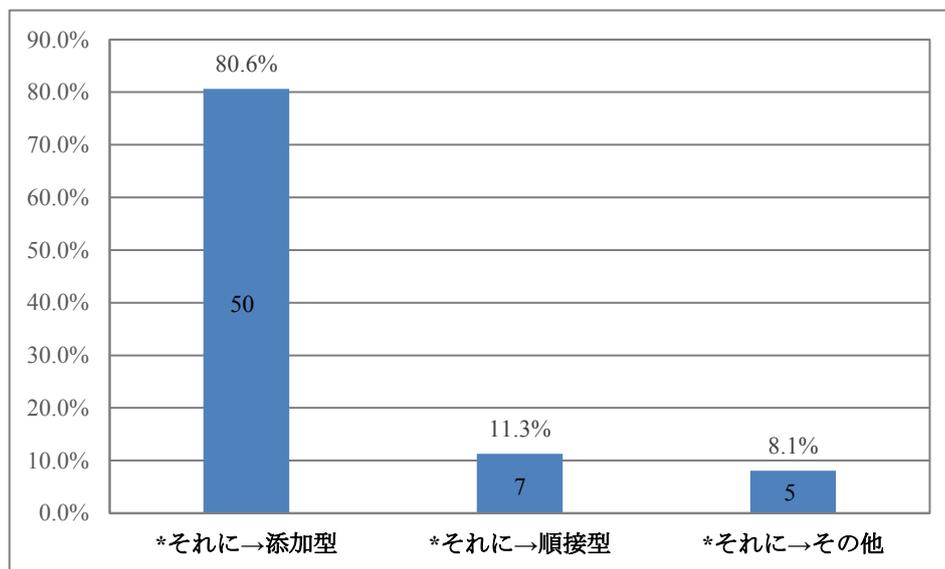


図 6-7 「*それに」の混用傾向 (n=62)

図 6-7 から、「*それに→添加型」の混用が多いことがわかる。「*それに→Y」のうち「*それに→添加型」が最も多いということは、学習者にとって「それに」と他の「添加型」の選択が難しいことを示している。

「*それに→添加型」の内訳は図 6-8 に示したとおりである。誤用の多いものから、順に「*それに→また」が 30 例、「*それに→そして」が 12 例、「*それに→さらに」が 5 例、「*それに→そのうえ」が 3 例である。

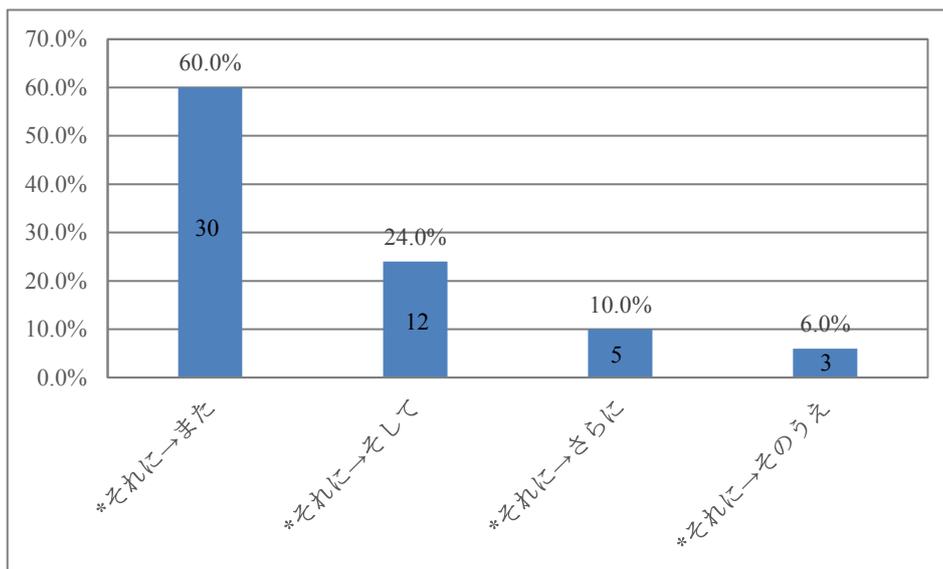


図 6-8 「*それに→添加型」の内訳 (n=50)

図 6-8 からわかるように、学習者にとって「*それに」と最も混用しやすい接続詞は「また」である。「*そして→添加型」それぞれの誤用例として、(172) から (175) のようなものがある。

- (172) 第一部は序論であり、このテーマを選んだ意義と理由を述べる。<*それに→また>、詫び表現についての先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。
- (173) その後自転車に乗っているいろいろな授業に行きます。四時間後、友達といっしょに昼ご飯を食べて、<*それに→そして> 寝室に帰ります。一時間の昼寝後、また四時間ほどの授業の時間です。
- (174) これらの研究を見ても、「はずだ」が自由に使えるようになったわけではなく、まだ理解できないこともある。<*それに→さらに>、これらの解説が抽象的で理解しにくく、すぐにそれを利用して表現できないことにも気がついた。
- (175) 私にとって、郭守敬は誇りである。彼はシンタイ市の水質を改善しただけではなく、庶民の生活も改善した。<*それに→そのうえ>、彼が教科書に出たことで、シンタイ市のことは全国で知られるようになった。

6.3.4 混用の傾向のまとめ

「YUK コーパス」から抽出した誤用例をもとに、「*そして」「*それから」「*それに」の混用を中心に観察し、その実態を明らかにした。「*そして→Y」「*それから→Y」「*それに→Y」といった混用の誤用形態の中で、最も多い混用、つまり「Y」にあたるものはいずれも「添加型」である。また、「*そして→添加型」「*それから→添加型」「*それに→添加型」の内訳の中で、それぞれに最も混用が多いのは「添加型」の「また」である。その次に混用されやすいのは、「*そして→添加型」は「それから」、「*それから→添加型」は「そして」、「*それに→添加型」は「そして」である。まとめると、表 6-1 のようになる。

表 6-1 「*そして」「*それから」「*それに」における混用傾向

	最も混用されやすい 類型	「添加型」の中で最も 混用されている接続詞	「添加型」の中で二番目 に混用されている接続詞
*そして	「添加型」	また	それから
*それから	「添加型」	また	そして
*それに	「添加型」	また	そして

どのような要因で「そして」「それから」「それに」における混用が生じるのであろうか。なぜ、学習者は「また」の代わりに「そして」「それから」「それに」を誤って用いてしまうのであろうか。次節では、「*そして・*それから・*それに→また」に焦点をあてるが、それと正反対の関係にある「*また→そして・それから・それに」の誤用も存在している。ただし、「そして」「それから」「それに」を使用すべきところで「また」を使用した誤用は、それぞれ 5 例、2 例、1 例しかない³⁴。対の関係という観点から考察するには例が少ない。「*また→そして・それから・それに」については、本章の分析対象とはしない。

「添加型」の中で二番目に混用される接続詞という視点から見ると、「*そして」が「それから」と、「*そして」が「それに」と混用されやすいことになる。6.1 節で述べた「そして、

³⁴ 8 例の共通点は前文のことをきっかけにして、後文のことが起こるという前後文関係にある。それぞれの誤用例は下記のとおりである。

「*また→そして」：中国で、酒は悠久の歴史がある。『汉书・食貨志』では、酒は天帝から人類に恵む贈り物であると述べている。<*また→そして>、中国には、「毎日酒一杯を飲めば、99 歳まで生きられる」という諺がある。

「*また→それから」：だから、私は先に、5 年間仕事して、経験やお金などを蓄えて、<*また→それから> 日本に行くつもりだ。今の私にとっては一番重要なのは一生懸命働くことだと思う。

「*また→それに」：しかし、中国語の“萌”は<*また→それに>新たな意味を生み出した。日本語の「ブサカワ」と似ている意味で、「ブサイクだけどかわいい」という意味である。

それから、それに」の誤用が互いに対の関係にあるのかといった点が本章で明らかにしたいことのひとつである。

次節では、「*そして、*それから、*それに」が「また」と混用される要因は何であるのか、また「そして、それから、それに」の誤用が互いに対の関係にあるのか否かといった二つの疑問について分析を進めていく。

6.4 「*そして」「*それから」「*それに」における混用

「*そして→添加型」「*それから→添加型」「*それに→添加型」という混用はどれも「添加型」間の誤用である。「添加型」間で誤用が生じるのはなぜだろうか。「添加型」間における混用の要因として、学習者が「添加型」それぞれの使い分けを認識できていないことが考えられないだろうか。この疑問に沿って、6.4.1 節では「*そして・*それから・*それに→また」における混用の要因を考察する。6.4.2 節では「*そして→それから」と「*それから→そして」、6.4.3 節では「*そして→それに」と「*それに→そして」、6.4.4 節では「*それから→それに」と「*それに→それから」の混用状況を考察する。そして、6.4.5 節では本節で明らかになったことをまとめる。

6.4.1 「*そして・*それから・*それに→また」

「*そして・*それから・*それに→また」の例は、「*そして→また」を(164)、「*それから→また」を(168)、「*それに→また」を(172)で示した。(176)から(181)も「また」を使用するのが適切にもかかわらず、学習者が(176)(177)では「そして」、(178)(179)では「それから」、(180)(181)では「それに」を使用した例である。

(176) 成長した環境、教育方法、それに人々の意識の変化なども「草食男子」の形成とは深い関係があると考えられる。<*そして→また>、「草食男子」は新しい時代に、生まれてきた新しいタイプの人類である。

(177) 普通の携帯電話を買えばいいと思う。電話をかけるのとメールを送るだけ。それで連絡することができる。<*そして→また>、勉強に影響することがない。

(178) 変化させることにより、詫びの度合いを調節することが多い。一方、中国語はよく副詞で定型表現を修飾する。<*それから→また>、詫びの定型表現で感謝の気持ちを表わすことがあり、特に日本語にはそのような特徴がある。

(179) 「聞き手の負担」であれ、「話し手の過失」であれ、中国語のほうが多いことがわかる。

＜*それから→また＞、付加表現の使用状況を全体から見れば、中国人の使った付加表現（合計 159）は日本人の（合計 94）…

(180) 要するに、なによりも清潔感があるものが基本である。＜*それに→また＞、場所によって調和を乱すような服装を避けて適当な服を選択するというルールを持っている。

(181) このような間違いは日本語を勉強している中国の初級学習者に普遍的に存在している問題である。＜*それに→また＞、日本人の中国語学者にも同じ問題が存在している。

「*そして・*それから・*それに→また」の例を詳しく見ていくと、そこには文体³⁵的な違いが認められる。「*そして→また」は(176)のように、その24例すべてが「だ・である調」で書かれている。「*それから→また」も(178)のように、その13例すべてが「だ・である調」で書かれている。「*それに→また」も30例のうち27例が(180)のように「だ・である調」であり、「です・ます調」は3例しかない。整理すると、表6-2のようになる。

表 6-2 「*そして」「*それから」「*それに」が「また」と混用された例における文体差

誤用形態	「だ・である調」	「です・ます調」	誤用例数
*そして→また	24	0	24
*それから→また	13	0	13
*それに→また	27	3	30

文体差について田中（1984）は、「そして」「また」は書き言葉であり、うちとけた会話などにはあまり用いられないと述べている。さらに、日常会話や普通の文章には「それから」「それに」を用いた列挙がよく見られるとも述べている。また、中田（1989）の調査結果から同じ書き言葉でも「また」より「そして」のほうが文体による使用範囲が広いこと、安藤（2002）の調査から「また」は文系論文に多く使用されていることが明らかにされている。

森田（1987b）は「それに、そのうえ」は前の事柄や状況に更にもう一つの事柄や状況が重なっていることを表し、両者の違いは「それに」が話し言葉的な接続詞であるのに対し、「そのうえ」は丁寧な改まり表現の場合使用されることであるとしている。グループ・ジャマシイ編（1998）は、「それに」は同様な事柄を次々に付け加えるのに使用され、「そのうえ」「し

³⁵ 本研究では、「だ・である調」のような常体と「です・ます調」のような敬体に限定して論じる。

かも」で言い換えられることもあるとしている。一方で、「それに」は「そのうえ」や「しかも」よりくだけた話し言葉であるとも説明している。広瀬他編（2001）では、「それに」はくだけた会話の中で、今述べた事柄にまた似たような事柄を付け加えるという機能をもっている」と述べている。このように、ここに挙げた三つは、「それに」をそれぞれ話し言葉的な接続詞であると述べ、「それに」はくだけた話し言葉として会話の中で用いられると説明している。

図 6-9 は、以上の先行研究から「そして」「それから」「それに」「また」の文体差を「硬度」³⁶からまとめたものである。

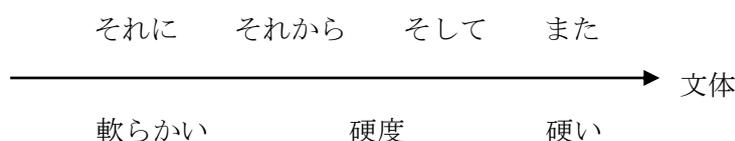


図 6-9 「そして」「それから」「それに」「また」の文体差

図 6-9 に従うと、「そして」「それから」「それに」とは異なり、「また」はより硬い書き言葉となる。このことを踏まえれば、(176) から (181) までの文体はすべて「だ・である調」であるため、「また」を使用するのが適切である。しかし、学習者は「また」の代わりに「そして」「それから」「それに」のいずれかを使用する傾向がある。学習者は文を作るとき、図 6-9 に示した文体差を認識できず、上に述べたような誤用が生まれていると考えられる。

しかし、中田（1989）からもわかるように、「そして」は文体による使用範囲が広い。硬い文章にも用いられる。ここから、当然のこととして「*そして→また」という混用には文体差以外に他の要因もあるのではないだろうかという疑問が生まれてくる。さらに、もう一つ疑問がある。「それから」と「それに」は軟らかい文章でしか使用できないにも関わらず、学習者は「それから」と「それに」を硬い文章で用いている。一体どのような意図で、学習者は「それから」と「それに」を硬い文章に使用しているのであろうか。次節では、この二つの疑問について分析していく。

³⁶ 硬度は、「テキストの文体の形式性、親疎性を捉えるために『硬いか軟らかいか』を判断することとした。『硬い』とは、かしくまっている感じ、堅苦しい感じであり、『軟らかい』とは、かしくまっていない感じ、親しみやすい感じである」と柏野他（2012：157）が述べている。

6.4.1.1 「*そして→また」

6.4.1.1.1 母語話者における「そして」と「また」の捉え方

森田（1987b：359）は、同じ話題の中で、「そして」は「ある事柄や叙述にもう一つの事柄や叙述を並べたり付け加えたりするときに用いる接続詞」とし、「並列」と「累加」に分類している。また、森田（1987b：360）は、「また」について、二つの状態や事柄などを並べる接続詞であると述べている。石黒（2008：92）は、無時間的な並列を表し、なおかつ時間性のある一連の事態の帰着点にも使用されると述べている。さらに、「それから」は「そして」よりも並列関係を自由に表し、「それから」は重複させ使用することが可能で、並列されたものに情報面での軽重は示さないと説明している。森山（2016：30-35）によると、「そして」と「また」は同文脈の累加に属しているが、三つの相違点がある。一つ目は、「そして」は同類別項目のことを挙げるのに対して、「また」は別のこととしての位置づけになること。二つ目は、「そして」が時間的な継起性をもつものに対して、「また」には継起性がないこと。そして、三つ目は異なる観点から述べる点で「そして」は別の論拠を挙げるのが難しいが、「また」を用いると論旨をより明確にできることである。岡本（1996：45）は、「また」は「内容を『事柄化』し、同一線上に並べ、以前にあった観点の定位点を移動させる」という機能を有すると述べている。上記の先行研究から、「そして」と「また」の異同点を表6-3のようにまとめることができる。

表 6-3 「そして」と「また」の異同点

		そして	また
共通点		共通点・類似点のある事柄を並べる	
相違点	意味	同類添加	別類添加
	時間継起性	あり	なし
	情報軽重	後文重要	なし
	論点挙げ	なし	あり

6.4.1.1.2 学習者における「そして」と「また」の捉え方

学習者はどのような文脈で「そして」を「また」と混同して使用するのであろうか。この点を明らかにするために、(182) から (184) の誤用例を見る。

- (182) 日本政府の政策では、就職支援の需要政策の面でまだ不十分だということが分かる。
<*そして→また>、日本は大学生の総合的な素質と就職能力の教育を重視するが、
 大学生の就職観の教育はまだ不十分である。（(155)を再掲）
- (183) 先行研究の資料を分析すると、「個」のように、「つ」が使える名詞の範囲も大きい
 ことに気がついた。<*そして→また>、形がある名詞と形がない名詞の比率はほぼ
 同じだ。（(164)を再掲）
- (184) 外部環境、自身の産業構造はアンバランスであったため、バブル経済崩壊後、不景気
 が続いている。<*そして→また>、アメリカからの経済的、政治的圧力を受け続け
 ているため、経済大国の地位に相応しい立場にいるとは言えない。

(182) から (184) は「また」を用いるほうが適切であるにも関わらず、学習者は「そして」を使用してしまった混用の誤用例である。(182)では、「就職支援の需要政策の面でまだ不十分」と「大学生の就職観の教育はまだ不十分」という二つの点から日本の就職状況の厳しさの原因を説明している。(183)では、先行研究から「『つ』が使える名詞の範囲も大きい」と「形がある名詞と形がない名詞の比率はほぼ同じだ」という二つの結果を見いだしたことを述べている。(184)では、「そして」で接続する前文「バブル経済崩壊後、不景気が続いている」と後文「経済大国の地位に相応しい立場にいるとは言えない」は日本の経済不景気に関わる二つの原因を説明する文章である。このように、これら三つの例には、異なる観点から論拠を挙げることで論旨を明確にしているという類似点が見てとれる。それゆえ、これら三つの例では、別類のものを添加する機能と論点をあげるという機能を合わせもつ「また」を使用することが文法的に正しい選択となる。しかし、学習者はどの例においても「そして」を用いるという間違いを起こしている。

このような誤用が生じる要因を考察する前に、例文に見られる前後文の文脈関係を整理しておきたい。例文から、「*そして→また」という混用における前後文脈の関係は図 6-10 のように示すことができる。長方形は 2 文間の論理関係を示し、長方形の中にある円はそれに従属する出来事を表している。「*そして」の前の出来事 A と後ろの出来事 B はプラスマークで繋がっている。A と B の外にある正方形は出来事の独立性を表す。ここでは (183) を代表例として説明する。「先行研究資料分析」について、「『個』のように、『つ』が使える名詞の範囲も大きい」と「形がある名詞と形がない名詞の比率はほぼ同じ」という出来事が独立性をもつて記述されている。このように前後文の論理関係の中でそれに従属する出来事が独立性をもつ、つまり 2 文間に区切りが感じられる場合、学習者は「そして」を使用する傾向があるのである。

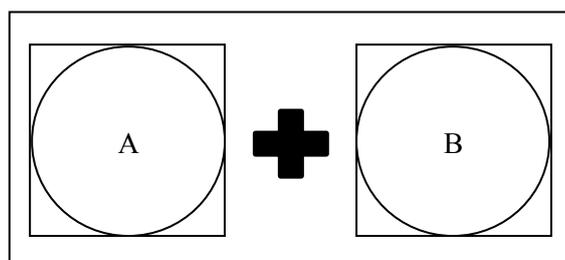


図 6-10 「*そして→また」の混用における前後文の関係

6.4.1.1.3 「そして」と「また」に見られる捉え方の違いの要因

以上、学習者がどのような文脈で「*そして」を「また」と混用するのかを明らかにした。ここからは、その混用に現れる前後文の文脈の捉え方の違いが生じる要因を考察していく。

石黒（2000）では、「そして」は、並列や因果関係、時間を表すような幅広い用法を有することを述べている。（182）から（184）に対応する中国語の表現³⁷は以下ようになる。

（185）日本政府の政策では、就職支援の需要政策の面でまだ不十分だということが分かる。

<*そして→また>、日本は大学生の総合的な素質と就職能力の教育を重視するが、大学生の就職観の教育はまだ不十分である。

*a 我们了解到日本政府政策方面，关于就业支援的政策还不充分。然后 / 接着，日本虽然重视 大学生综合素质和就业能力方面的教育，但是关于就业观的教育还不充分。

b 我们了解到日本政府政策方面，关于就业支援的政策还不充分。此外 / 另外，日本虽然重视大学生综合素质和就业能力方面的教育，但是关于就业观的教育还不充分。

（186）先行研究の資料を分析すると、「個」のように、「つ」が使える 名詞 の 範囲も大きいことに気がついた。<*そして→また>、形がある名詞と形がない名詞 の比率はほぼ同じだ。

*a 通过分析参考文献，我发现跟“個”一样，“つ”的可使用名词范围也很大。然后 / 接着，有形式的名词和无形式的名词的出现概率几乎是一致的。

b 通过分析参考文献，我发现跟“個”一样，“つ”的可使用名词范围也很大。此外 / 另外，有形式的名词和无形式的名词的出现概率几乎是一致的。

（187）外部環境、自身の産業構造はアンバランスであったため、バブル経済崩壊後、不景気が続いている。<*そして→また>、アメリカからの経済的、政治的圧力を受け続けているため、経済大国の地位に相応しい立場にいるとは言えない。

³⁷ 本研究で用いている「YUK コーパス」の誤用例の中国語訳文は、筆者が翻訳したものであるが、訳の適格さについては中国語母語話者 20 人による確認を得ている。

- *a 由于外部环境，自身产业结构不平衡，泡沫经济崩坏后，经济一直不景气。然后 / 接着，由于受到来自美国的经济和政治压力，也不能说是处于经济大国的地位。
- b 由于外部环境，自身产业结构不平衡，泡沫经济崩坏后，经济一直不景气。此外 / 另外，由于受到来自美国的经济和政治压力，也不能说是处于经济大国的地位。

“然后 / 接着”という表現を用いた(185a)と(186a)と(187a)は非文である。それに対し、“此外 / 另外”を用いた(185b)と(186b)と(187b)は文法的に適格である。王(1998)によると、“此外 / 另外”は連詞として前文で表すこと以外に他のこともあるという意味を表す。中国語の“此外 / 另外”は、日本語の「また」に対応し、別類のものを添加する接続詞として扱われることがある。母語の負の転移が作用したならば、学習者は“此外 / 另外”に対応する「また」を使用したはずであるが、そうやってはいない。学習者は、なぜ、「また」を使用していないのであろうか。同様の事柄を表現する場合、中国語では日本語の「また」に対応する“此外 / 另外”が用いられ、「そして」に対応する“然后 / 接着”が用いられることはない。つまり、(185)から(187)の誤用の要因を母語の干渉に求めることはできない。にもかかわらず、なぜ誤用例では「そして」が用いられているのであろうか。

通常、前後文が関連しておらず独立している場合、文章は句点で切られるが、前後文を確実に繋げようとするれば接続詞が必ず必要である。このとき学習者にとって最も使用しやすい接続詞が、第五章で明らかにしたように「そして」なのである。

「日中対訳コーパス」(第一版)を利用して、「そして」に対応する中国語を検索してみると、どの表現にも翻訳されなかったり、「連貫」や「通進」や「因果」などの連詞に翻訳されたり、多様な対応が見られる。「そして」に対応する中国語の連詞については、表 6-4 のように整理することができる。

表 6-4 「そして」に対応する中国語の連詞

日本語の接続詞	中国語の連詞
そして	翻訳されない
	連貫：于是，然后，后来，接着，至于，随后，及至，便
	通進：并，并且，而且，加上，而，又，此外
	因果：所以，因而

表 6-4 に出現する対応関係の例をそれぞれ下記に挙げておく。

まず、日本語では「そして」を使用するが、中国語では接続詞を使用しない例を(188)に示す。

- (188) a そうした考えを、その態度で教示してくれた両親。このふたりのもとに生を受けたことを、心から感謝したい。そして、今まで育ててくれて、本当にありがとう。

『五体不満足』

- b 使我获得这一教益的是我的父母。他们让我来到这个世界上，我感谢他们；他们养育我直到现在，我感谢他们。Ø我由衷地、真诚地感谢他们！

次に、中国語で「連貫」の連詞を使用する例を(189)に示す。

- (189) a と喜助はいった。そして玉枝の視線をさけて、また竹細工の仕事にとりかかるのだった。

『越前竹人形』

- b 喜助回答，然后避开玉枝的视线，又去干起他的竹工艺活儿了。

そして、中国語で「遁進」の連詞を使用する例を(190)に示す。

- (190) a 俺がどうやって笑いをこらえていたか想像してみるがいい。俺の内部は笑いに溢れていた。そして俺は露ほどもおのれを夢みてはいなかった。

『金閣寺』

- b 你也许想象得到，我是强忍着才没笑出声来的。我的心被笑憋得发痒。并且，我丝毫也没意识到自己在干什么。

最後に、中国語で「因果」の連詞を使用する例を(191)に示す。

- (191) a 同じ美でありながら、金閣ほど生命から遠く、生を侮蔑して見える美もなかった。

そして柏木が「御所車」を奏でおわった瞬間に、音楽、この架空の生命は死に、彼の醜い肉体と暗鬱な認識とは、少しも傷つけられず変改されずに、又そこに残っていたのである。

『金閣寺』

- b 音乐和金阁在美质上是相同的。但决没有象金阁那样远离了生命而又苛刻地蔑视人生的美。所以柏木在他《御所车》终了的一瞬，使音乐这个架空的生命死去，单把他丑陋的肉体以及灰暗的认识，毫无损伤也毫无改变地依旧留在那里。

日本語の「そして」が中国語に翻訳されると、省略されたり、連詞に翻訳されたりすることから、学習者は二つの文を繋げるそれだけのために最も使用しやすい「そして」を使用しているのではないかと考えられる。

6.4.1.2 「*それから→また」と「*それに→また」

6.4.1 節で論じたように、日本語の「それから」と「それに」は軟らかい文章でしか使用されない。では、なぜ、学習者は「それから」「それに」を「だ・である調」という硬い文章にも使用するのであろうか。(178) から (181) 以外の例として、(192) と (193) を示しておく。

(192) …にとって一番大切なことである。現在、大学三年生の私たちにとって、卒業後の就職が一番切実なことである。<*それから→また>、この二つは重要な関係がある。

(193) 続いて、竹は実用なものだけでなく、エネルギーに満ちている植物で生命力が強く、長寿を象徴している物である。<*それに→また>、日本人には物事に対する執着・現実的な態度があり、大自然に敬服する心がある。最後に、日本人は安定して…

学習者は「それから」と「それに」が硬い文体でも使用できると思っているのではないだろうか。この点を確認するために、筆者は広島大学の中国人留学生 20 名への聞き取りを行った。この 20 名は全員日本語能力試験一級を有している。聞き取りは 2018 年 10 月から 11 月にかけて、会話の中に出てくる「それに」「それから」「そして」についてどのようなイメージをもっているのかを、「軟らかい」「中立」「硬い」という三つの選択肢から選択してもらった。調査の結果は表 6-5 のとおりである。

表 6-5 「それに」「それから」「そして」についてのイメージ

	それに	それから	そして
軟らかい	2	3	14
中立	3	3	4
硬い	15	14	2

表 6-5 が示すとおり、学習者は「それから」「それに」が使用された文章は硬い文章というイメージをもっていることが明らかになった。ではどのように、学習者は「それから」と「それに」を区別して硬い文章に使用しているのであろうか。

6.4.1.2.1 「*それから→また」³⁸

森山 (2006) によると、「それから」と「また」は文脈共通の広義添加系に所属するが、「それから」は同類異項目の添加であるのに対して、「また」は異類異項目の添加となる。学習者

³⁸ 前後文の事柄について、学習者は同類のこととして認識していても、添削者が異類のこととして認識している可能性もある。

はどのような意図で「また」を使用するのが適切なところに、「それから」を使用してしまうのであろうか。(194)と(195)を見てみよう。

(194) 同浴も日本の独特の文化であり、時に家族と共に浴槽に入って、話したり笑ったりするのは楽しいものである。<*それから→また>お風呂についての産業も日本の経済の発展を促している。((168) を再掲)

(195) 今まで詫び表現に関する比較研究は主に日英比較と中英比較で、日中比較研究はまだ多くないことがわかる。<*それから→また>、社会言語学の分野では、詫びに関する総合的、体系的な研究が少ないというのが現状である。

(194) では、接続詞で繋ぐ前文「時に家族と共に浴槽に入って、話したり笑ったりするのは楽しいものである」と、後文「風呂についての産業も日本の経済の発展を促している」とは付け加えの関係にある。この点は(195)も同様である。

(194)と(195)の文体を「です・ます調」に変えると、「それから」で文章は成立する。(194)と(195)を使用し、「だ・である調」から「です・ます調」に書き換えると以下のような(196)と(197)になる。

(196) 同浴も日本の独特の文化であり、時に家族と共に浴槽に入って、話したり笑ったりするのは楽しいものです。それからお風呂についての産業も日本の経済の発展を促しています。

(197) 今まで詫び表現に関する比較研究は主に日英比較と中英比較で、日中比較研究はまだ多くないことがわかります。それから、社会言語学の分野では、詫びに関する総合的、体系的な研究が少ないというのが現状です。

すなわち、学習者は「それから」の添加の意味を正確に理解しているが、話し言葉の場面では使用できない「それから」をそのまま硬い文章に持ち込んでしまっていると考えられる。

6.4.1.2.2 「*それに→また」

森山(2006)によると、「それに」と「また」は文脈共通の広義添加系に所属するが、「それに」は同類異項目同傾向の添加であるに対して、「また」は異類異項目の添加となる。学習者はどのような意図で「それに」を使用しているのであろうか。(198)と(199)を参照されたい。

- (198) 第一部は序論であり、このテーマを選んだ意義と理由を述べる。<*それに→また>、詫び表現についての先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。((172) を再掲)
- (199) 『くろご式慣用句辞典』について説明する。『くろご式慣用句辞典』はインターネットの辞書で、数多くの慣用句を収録している。<*それに→また>、慣用句はいつも更新されている。

(198) は、論文の構成である第一部について書かれたものである。接続詞で繋がれた前文「このテーマを選んだ意義と理由を述べる」と後文「詫び表現についての先行研究を紹介し、その問題点を指摘する」は論文の構成である第一部に従属する出来事である。(199) は、『くろご式慣用句辞典』について書かれたものである。接続詞で繋がれた前文「『くろご式慣用句辞典』はインターネットの辞書で、数多くの慣用句を収録している」と後文「慣用句はいつも更新されている。」は『くろご式慣用句辞典』についての説明の内容である。これら二つの例文は、2文間の論理関係に従属する出来事が二つ含まれた文章であるという共通点をもっている。

学習者は「それに」を使用するのに対して、母語話者は「また」を使用している。母語話者は同じ論理関係であっても、前後文を重要な出来事の添加関係とし、別項目の添加を示す「また」を用いて前後文の出来事をそれぞれ独立させている。言い換えれば、母語話者は出来事が更新しているという「発想」³⁹をもっている。他方、前後文にある二つの出来事が同じ論理関係に属すると捉え、学習者は「それに」を使用している。

6.4.2 「*そして→それから」と「*それから→そして」

6.4.2.1 母語話者における「そして」と「それから」の捉え方

栗原 (1968) は、「それから」の前文と後文は独立した二つの存在であり、論理的かつ必然的な関係はないと説明している。ひけ (1985) は、「そして」と「それから」の文中での働きを分析し、「並列的な関係の文」で対象を複数の部分に分けられたそれぞれの文の場合、「そして」を用いることで連結し全体像を作り出すことができ、「それから」は前文の内容とは関係性がない文を単につけだす機能であると述べている。比毛 (1989) は、動作の継起的関係を表す場合の「そして」と「それから」を基本的な用法として取り上げている。「そして」は主に同一主体のひとまとまりの継起的動作について述べる場合に使用され、「それから」は時間

³⁹ 于 (2011b : 14) によると、学習者が言語を習得する際に見られる誤用は、単なる文法知識の欠如やミスによる誤用と、母語の負の転移が作用する発想の違いによる誤用という2種類に分けられる。

的な順序で関係づけられた動作について述べる場合に用いられると述べている。浜田（1995）は、「そして」「それで」「それから」を後文の表現類型に注目して比較している。その中で、「そして」「それで」「それから」はいずれも演述型の文が後文にきても問題はないが、「そして」の後ろに疑問型や情意表出・訴え型がくることには制限があり、また「それから」の後ろに感嘆型がくることには制限があると述べている。森田（1998）は、接続語の前後の話題のあり方の違いから用法の違いを説明している。すなわち、同一の話題の中では「そして」が用いられ、次の話題に移る場合は「それから」が用いられるとする。守屋（2000）は、「そして」の前後文のひとまとまり性と「それから」の分離性といった両者の性質、および発話時や談話時における想起したことを言い足す用法を理解して使い分ける必要があると指摘している。

先行研究では用例等を手がかりに「そして」と「それから」の異同点を記述するが、両者は時間的継起性が用法全体の特徴となっている。また、「そして」のひとまとまり性と「それから」の分離性への言及にも注目する必要がある。「そして」と「それから」の異同点を表 6-6 にまとめておく。

表 6-6 「そして」と「それから」の異同点

		そして	それから
共通点		共通点・類似点のある事柄を並べる	
相違点	意味	同類添加	同類添加
	時間継起性	あり（短い間隔）	あり（長い間隔）
	情報軽重	後文重要	なし
	そのほか	まとまり性	分離性

6.4.2.2 学習者における「そして」と「それから」の捉え方

「YUK コーパス」から抽出した「そして」と「それから」の混用は 15 例あり、「*そして→それから」が 9 例、「*それから→そして」が 6 例である。「そして」と「それから」の混用例数を表 6-7 に示しておく。

表 6-7 「そして」と「それから」の混用例数（n=15）

誤用形態	混用例数
*そして→それから	9
*それから→そして	6

「*そして→それから」の例を(200)と(201)に、「*それから→そして」の例を(202)と(203)に挙げておく。

(200) 日本の音楽を聞くのが大好きで、特にロックが好きです。日本のいろいろなバンドの歌を聞いています。<*そして→それから>、この前夏目漱石の『こころ』を読んで、日本文学にも興味を持ちました。((165) を再掲)

(201) まわりが静かで、世の中ただ私ひとりが残っている感じがするので、不思議な気持ちが高まります。<*そして→それから>、私はバレーボールの試合にも参加します。疲れるほどに精が出ます。変なひとですね。

(202) 語として使われ、新しい語を作った。語構成の造語力を高めて、接頭語と接尾語を利用する造語法が入った。<*それから→そして>、動詞+補語の構造を発達させ、動詞を名詞化にさせた現象が増えた。((169) を再掲)

(203) したがって、日本人の「他人に迷惑をかけない」意識はすでに古くから日本の社会に存在していた。<*それから→そして>、現代社会に入っても、この意識は揺らぎもなく日本人の基本精神として受け継がれてきた。

(200) では、接続詞で繋ぐ前文「日本のいろいろなバンドの歌を聞いています」と後文「この前夏目漱石の『こころ』を読んで、日本文学にも興味を持ちました」とが、ある出来事を述べ終えてから次の出来事へと転じる関係にある。この点は(201)も同様である。(200)と(201)の前後文の間にはそれぞれ独立性が存在するので、区切りを感じさせる「それから」が使用されなければならない。

(202) では、接続詞で繋ぐ前文「語構成の造語力を高めて、接頭語と接尾語を利用する造語法が入った」と後文「動詞+補語の構造を発達させ、動詞を名詞化にさせた現象が増えた」とが一つの論理関係で最後まで一貫している。(203)も同様である。このような場合、連続性が感じられる「そして」が使用されなければならない。

ところが、学習者は前後文に区切りが感じられるとき、「そして」を使用してしまう。それに対し、前後文に連続性が現れるとき、学習者は「それから」を選択してしまう。要するに、「そして」と「それから」の使用される前後文の関係について、学習者は母語話者と反対の捉え方をしている。母語話者と学習者における「そして」と「それから」の捉え方を表6-8にまとめておく。

表 6-8 母語話者と学習者における「そして」と「それから」の捉え方

	日本語母語話者	学習者
前後文における	連続性→そして	連続性→それから
関係の捉え方	区切り→それから	区切り→そして

6.4.2.3 「そして」と「それから」に見られる捉え方の違いの要因

楊・馬場（2004）は、中国語訳の観点から、“然后”はある事に引き続いて別の事が生じる時に用いられる語で、前にあることが生じた後出現した状況を表す。“然后”は、区切り性が強いことから時間的な間隔が長いと考えられ、「それから」と対応すると説明している。“接着”は「引き続いて、続いて」という意から転化してきた語だと考えられ、“然后”より区切り性が強くないと捉えている。このことから、“接着”は連続性を感じさせる「そして」と対応すると指摘している。（200）から（203）を中国語で表現すると以下ようになる。

(204) 日本の音楽を聞くのが大好きで、特にロックが好きです。日本のいろいろなバンドの歌を聞いています。<*そして→それから>、この前夏目漱石の「こころ」を読んで、日本文学にも興味を持ちました。

*a 我很喜欢日本音乐，特别是摇滚。平常会听很多日本乐队的歌。**接着**，我之前读了夏目漱石的《心》，对日本文学也产生了兴趣。

b 我很喜欢日本音乐，特别是摇滚。平常会听很多日本乐队的歌。**然后**，我之前读了夏目漱石的《心》，对日本文学也产生了兴趣。

(205) まわりが静かで、世の中ただ私ひとりが残っている感じがするので、不思議な気持ちが高まります。<*そして→それから>、私はバレーボールの試合にも参加します。疲れるほどに精が出ます。変なひとですね。

*a 周围一片寂静，感觉世界上就只剩下了我一个人，觉得特别不可思议。**接着**，我还参加了排球比赛。感觉筋疲力尽。真是奇怪的人呢。

b 周围一片寂静，感觉世界上就只剩下了我一个人，觉得特别不可思议。**然后**，我还参加了排球比赛。感觉筋疲力尽。真是奇怪的人呢。

(206) 語構成の造語力を高めて、接頭語と接尾語を利用する造語法が入った。<*それから→そして>、動詞+補語の構造を発達させ、動詞を名詞化にさせた現象が増えた。

*a 词构成的造词能力提高，利用前缀词和后缀词来制造新词的造词法产生了。**然后**，使得动词+补语的构造变得发达，动词名词化的现象增加了。

- *b 词构成的造词能力提高, 利用前缀词和后缀词来制造新词的造词法产生了。**接着**, 使得动词+补语的构造变得发达, 动词名词化的现象增加了。
- c 词构成的造词能力提高, 利用前缀词和后缀词来制造新词的造词法产生了。**于是**, 使得动词+补语的构造变得发达, 动词名词化的现象增加了。

(207) したがって、日本人の「他人に迷惑をかけない」意識はすでに古くから日本の社会に存在していた。<*それから→そして>、現代社会に入っても、この意識は揺らぎもなく日本人の基本精神として受け継がれてきた。

- *a 因此, 日本人的“不给他人添麻烦”的意识自古就存在。**然后**, 即使进入现代社会, 这种意识作为日本人的基本精神被牢牢地继承下来了。
- *b 因此, 日本人的“不给他人添麻烦”的意识自古就存在。**接着**, 即使进入现代社会, 这种意识作为日本人的基本精神被牢牢地继承下来了。
- c 因此, 日本人的“不给他人添麻烦”的意识自古就存在。**于是**, 即使进入现代社会, 这种意识作为日本人的基本精神被牢牢地继承下来了。

「そして」に“接着”が用いられている(204a)と(205a)は非文である。他方、「それから」に“然后”が用いられている(204b)と(205b)は適格な文である。これらの用例を見ると、中国語も日本語と同様、前後文が独立性をもつ場合、区切り性を表す接続詞が必要であることになる。このことから、母語の負の転移が作用したという要因は排除されうる。

では、“然后”に対応する「それから」を使用するはずにもかかわらず、学習者はなぜ「そして」を使用してしまうのであろうか。専門的な語学の知識がなければ、「そして、それから」と“接着/然后”の意味用法の対応を理解するのは難しい。なぜなら、一般の中国語母語話者は、生活の中で“然后”を母語話者の判断で使用するからである。“然后”は時間的な流れだけではなく、前後文を繋げるとき頻繁に使用される接続詞である。それゆえ、学習者が日本語を勉強する際に、“然后”は日本語の「そして」の意味に対応すると思う可能性がある。しかし、いずれの用例も前後文には独立性がある出来事について述べているため、区切りを感じさせる「それから」を用いるほうが選択肢としては相応しい。

(206a)と(207a)に使用されている“然后”、(206b)と(207b)に使用されている“接着”はいずれも非文である。(206c)と(207c)のように“于是”を用いるのが適切である。赵(2001)や赵(2003)や张(2008)は“于是”の意味機能について、「時間上先后相继, 事理上前后相因(時間上の前後文の連続関係、事理上の前後文の因果関係)」と指摘している。石黒(2000)は、「そして」は並列、因果関係、時間という幅広い用法を有することを述べて

いる。「そして」は「そうして」の縮約形なので、「そう」と「して」に分解できる。さらに、「そして」は時間的な関係を示す役割を担っている。また、「そうすることで」何かが起こされるというニュアンスがあり、因果関係をも示す役割を担っている。したがって、時間的關係も因果關係も表現できる“于是”と対応する日本語の接続詞は「そして」である。

では、なぜ学習者は「それから」を用いるのであろうか。仁田（1987：393）によると、格助詞としての「から」は「動作や状態の始まる時を表す」という意味をもっている。また、グループ・ジャマシイ編（1998：248）では、格助詞の「から」について、「XてからY」の形で、XのほうがYより先行することを表すと述べている。「それから」は「それ」と「から」に分解できるため、その時間的關係も明確に示されている。また、仁田（1987：398）によると、「から」は接続助詞として「次に述べる動作・作用・状態等の原因や理由や根拠などを表す」という機能をもっている。「それから」は「それ」と「から」で構成されているので、学習者は「それから」も原因を表すと誤認してしまう可能性もあると考えられる。以上の分析から学習者が語形の類似性で「それから」が時間的關係と因果關係を表現できると誤認識して、「そして」を使用すべきところに「それから」を使用してしまったと考えられる。

以上の分析からわかったように、「そして」と「それから」に認められる誤用には、いくつかの要因が混在している。第一に、学習者は、中国語の“然后”の用法を「そして」にもあてはめることができると誤認している。ここでもう一度整理しておくが、“然后”は区切り性を表すのに対して、「そして」は連続性を表すという違いがある。それにも関わらず、区切り性を表す場合に「そして」を使用してしまっている。その要因として、“然后”と「そして」は並列關係や時間的關係などを示す幅広い用法をもっており頻繁に使用されることが考えられる。第二に、語形が類似している理由から、時間的關係と因果關係という両機能を兼ね備えた接続詞として学習者は「それから」の用法を誤認している。したがって、「そして」と「それから」の混用は、文法知識の欠如か母語の負の転移かといった単一の要因から生じるのではなく、複数の要因から生じている。この現象は、ねじれ誤用とも言える。

6.4.3 「*そして→それに」と「*それに→そして」

6.4.3.1 母語話者における「そして」と「それに」の捉え方

石黒（2008：97）によれば、「そして」は「添加の接続詞」と呼ばれ、「それに」は「累加の接続詞」と呼ばれる。「累加の接続詞」については、「それだけでなく、まだ他にもある」という、すでに示したものに重ねて示す感じが強いと説明している。伊豆原（2004：15-16）に

よると、「X それに Y」は重要な情報をまず X で表し、次に従情報を Y で表すのに使用されるものとなる。上記の先行研究から添加を表す「そして」と累加を表す「それに」の区別を表 6-9 にまとめておく。

表 6-9 「そして」と「それに」の異同点

		そして	それに
共通点		共通点・類似点のある事柄を並べる	
相違点	意味	添加	累加
	時間継起性	ある	なし
	情報軽重	後文重要	前文重要

6.4.3.2 学習者における「そして」と「それに」の捉え方

「YUK コーパス」から抽出した「そして」と「それに」の混用は 12 例であるが、「*そして→それに」の例は無く、すべて「*それに→そして」の例である。「そして」と「それに」の混用例数を表 6-10 のようにまとめる。

表 6-10 「そして」と「それに」の混用例数 (n=12)

誤用形態	混用例数
*そして→それに	0
*それに→そして	12

「*それに→そして」の例として、(208) から (210) のようなものがある。

- (208) 本文はまず、中国の現行の医療制度と日本のを説明する。次に、両国の医療保険制度の利害を分析する。<*それに→そして>、日本医療制度からのヒントを指摘して、今後の改革に有用な意見を出す。最後に、本稿の内容をまとめる。((157) を再掲)
- (209) その後自転車に乗っていろいろな授業に行きます。四時間後、友達といっしょに昼ご飯を食べて、<*それに→そして> 寝室に帰ります。一時間の昼寝後、また四時間ほどの授業の時間です。((173) を再掲)
- (210) 23 日に神様をまつります。民間で伝わっている神話の中で、神は家内の禍福財運をつかさどるといわれています。<*それに→そして> 家族のみんなはゴマを利用して作った物を食べます。24 日に、掃除します。それから、25 日に豆腐を買います。

(208) では、接続詞で繋ぐ前文「両国の医療保険制度の利害を分析する」と後文「日本医療制度からのヒントを指摘して、今後の改革に有用な意見を出す」との間に連続性がある。(209) と (210) も同様である。そのため、これらの例文の前後文を繋げる接続詞としては「そして」が用いられるべきである。母語話者は、前後文で表される出来事が時間の流れに沿って移動していると捉えているため、「そして」を使用する。つまり、母語話者は前文と後文とが表す出来事を横に並列しているというイメージで「そして」を用いている。

それに対し、学習者は「それに」を使用してしまふ。学習者は前後文の関係をどのように捉えているのであろうか。学習者は横に並列しているというイメージではなく、上に重なるというイメージから「それに」を選択し誤用を生じさせている。母語話者と学習者における「そして」と「それに」の捉え方の違いを表 6-11 に示しておく。

表 6-11 母語話者と学習者における「そして」と「それに」の捉え方

	母語話者の視点	学習者の視点
時間的流れに沿って起こった出来事への捉え方	出来事が移動している	出来事が移動していない
	前後文が横に並列しているというイメージがある	縦に重ね置かれ累加しているというイメージがある

6.4.3.3 「それに」と「そして」に見られる捉え方の違いの要因

母語話者は、「まず、次に、最後に」などの表現が使用された時間的な流れがある論理関係の中で起きた出来事をどのように捉えているのであろうか。母語話者の文章を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて分析していく。(211) と (212) を参照されたい。

(211) まず魚料理、つぎに添えもの付きのしっかりした (!) 肉料理、その次にとくに野菜だけの料理、そして鳥の丸焼き、昨夜に負けぬ甘味の大プディング、最後に…

(212) 回避は反逆罪に等しい重罪であり、以前には労働を求められなかった人々も、まず女性、次に結核患者、そして年少者、高齢者と動員され、最終的には占領地から連行した何百万もの…

(211) において、「そして」が使用されているのは「その次にとくに野菜だけの料理、そして鳥の丸焼き、昨夜に負けぬ甘味の大プディング」の箇所である。「そして」を使用することで、書き手の視点は「野菜だけの料理」から「鳥の丸焼き」に移動している。(212) も (211) と同様である。「そして」を用いることで、「結核患者」から「年少者、高齢者」に書き手の視点は移動している。

一方、中国語母語話者は“首先、然后、最后”などが使用される時間的な流れがある論理関係において文が表す出来事をどのように捉えているのであろうか。「CCLコーパス」(北京大学中国語言語学研究センターコーパス)から、(213)と(214)が検索できた。

(213) 首先, 绷紧肌肉, 并注意这时有什么样的感觉; 然后突然放松力量, 并注意有什么样的感觉; 最后, 仔细比较这两种感觉有什么不同。(まず, 筋肉がぴんと張って、その上自分の感覚に注意する。次に, 突然力を抜いて、さらに自分の感覚に注意を向ける。最後に, この二つの感覚の違いを比べてください。)

(214) 首先分因素划分等性块段, 然后对各因素的复杂程度进行分级, 并分级赋予一定的指数值, 最后对各类块段进行叠加合成。(まず, 因素によって等性ブロックを分けます。次に, 各因素の複雑程度を分級する。その上各段級に指数値を与える。最後に, 各類のブロックを重ね合わす。)

(213)では、「首先、绷紧肌肉, 并注意这时有什么样的感觉(まず、筋肉をぴんと張って、その上自分の感覚に注意する)」と「然后突然放松力量, 并注意有什么样的感觉(次に、突然力を抜いて、さらに自分の感覚に注意を向ける)」において、“并”が使用されている。この“并”を使用することで、書き手の視点は移動せず上に重なるというイメージで文が表す出来事が捉られている。(214)も(213)と同様である。「然后对各因素的复杂程度进行分级, 并分级赋予一定的指数值(次に、各因素の複雑程度を分級する。その上各段級に指数値を与える)」においても、“并”を用いることで書き手の視点は移動せず上に重なるというイメージで文が表す出来事が捉えられている。

以上述べてきたように、時間的な流れに沿って文が表す出来事を述べる時の捉え方が日本語母語話者と中国語母語話者とでは一致していない。そのため、「*それに→そして」の混用には、中国語の発想にもとづく文が表す出来事に関する捉え方が影響している。

6.4.4 「*それから→それに」と「*それに→それから」

「YUKコーパス」には「それから」と「それに」の混用に関する誤用は1例も見いだせなかったため、ここでは論じないことにする。

6.4.5 混用の傾向の要因のまとめ

「YUKコーパス」から抽出したデータをもとに、「添加型」の「*そして→Y」と「*それから→Y」、「*それに→Y」における混用について考察した。次のことが明らかになった。

まず、混用の誤用類型において、誤用の分布は均等ではなく、誤用形態「*そして→Y」と「*

それから→Y」、「*それに→Y」に偏るという傾向が見られる。これら三つの誤用形態の中で最も多く現れるYは「また」である。

そして、「*そして」「*それから」「*それに」が「また」と混用されやすいのは、「また」を含む四つの接続詞の文体差に関する知識が学習者に不足しているからである。「*そして」と「また」との混用の要因は、学習者が両者の意味の差異を理解せず、区切りを感じさせる言葉として「そして」を使用することにある。「*それから、*それに」と「また」との混用の要因は、学習者が「それから」「それに」をより文章の言葉として用いていることにある。また、学習者は「それから」を付け加えの接続詞として、「それに」を文が表す出来事を上に重ねる接続詞として扱っている。「*また→そして・それから・それに」の8例について深く分析していないが、前文のことをきっかけにして、後文のことが起こるという前後文関係にあるという共通点が見いだせた。

また、「そして」と「それから」の混用に関して、日本語母語話者と異なり、学習者は前後文に区切り性がある場合には「そして」を使用し、連続性がある場合には「それから」を使用する傾向がある。「*そして→それから」の場合、学習者は文法知識の不足から、もっとも使用しやすい日本語の「そして」をもっとも使用しやすい中国語の“然后”にあてはめ、前後文を接続するためだけに使用している。「*それから→そして」の場合、学習者は語形の類似性（引き続きを表す格助詞「から」と原因を表す格助詞「から」）から、「それから」を時間的關係と因果関係という両機能をもっている接続詞として誤って使用している。

さらに、「そして」と「それに」の混用に関しては、「*それに→そして」の誤用例しか出現しなかった。時間的な流れに沿って出来事を述べる時、学習者は文が表す出来事を上に重ねるイメージとして見る傾向がある。「それに」が「上に重ねる」という意味をもつことは正しく理解しているものの、日本語が出来事をどう捉えているのかまでは理解しておらず、この点が誤用の要因となっている。ここには日本語と中国語における文が表す出来事の捉え方の違いが反映されている。時間的な流れに沿って出来事を述べる時、それを、日本語は横に並列したそれぞれが独立した出来事として捉えているのに対して、中国語は縦に重ね置かれ累加した一つの出来事として捉えている。

以上の分析から、学習者の作文には「そして」「それから」「それに」に関する誤用の規則性を見いだすことができた。「そして」「それから」「それに」における誤用の規則性まとめて示すと、表 6-12 のように表すことができる。学習者が日本語の「添加型」を学習するとき、独自に創りあげた接続詞の規則に従い他の接続詞と混用したりする現象が生じているのである。

表 6-12 「添加型」に見られる混用の傾向と要因

	傾向	要因
①	「*そして→Y」と「*それから→Y」、「*それに→Y」三つの誤用形態の中で最も多く現れるYは「また」である。	<input type="checkbox"/> 「*そして・*それから・*それに→また」 ・四つの接続詞の文体差に関する知識が不足している。 ・区切りを感じさせる言葉として「そして」を使用する。 ・「それから」「それに」をより文章的言葉として使用する。 ・「それから」を付け加えの接続詞として、「それに」を文が表す出来事を上に重ねる接続詞として扱っている。 <input type="checkbox"/> 「*また→そして・それから・それに」 ・前文が後文のきっかけになる場合の接続詞として「また」を使用する。
②	学習者は前後文に区切り性がある場合には「そして」を使用し、連続性がある場合には「それから」を使用する傾向がある。	<input type="checkbox"/> 「*そして→それから」 ・文法知識の不足から、「そして」を中国語の“然后”にあてはめ、前後文を接続するためだけに使用している。 <input type="checkbox"/> 「*それから→そして」 ・語形の類似性から、「それから」を時間的關係と因果關係という両機能をもっている接続詞として使用している。
③	時間的な流れに沿って出来事を述べる時、学習者は文が表す出来事を上に重なるイメージとして見る傾向がある。	<input type="checkbox"/> 「*それに→そして」 ・日本語と中国語における文が表す出来事の捉え方が異なる。 <input type="checkbox"/> 「*そして→それに」 ・出現なし

6.5 おわりに

「そして」と「それから」「それに」は同じ「添加型」に属しているが、それらには使い分けがある。したがって、学習者はこうした使い分けについて明確に理解する必要がある。しかしながら、学習者は「そして」と「それから」「また」「それに」の使い分けを把握していないため、その区別が曖昧になってしまっている。その結果として、文と文を繋ぐときに、学習者はそれぞれの「添加型」を混用して使用している。「添加型」がすべて同じ働きをするものと学習者が認識しているならば、それは基本的には正しいが、互いに常に互換可能なわけではない。この点を、学習者は認識していないようである。学習者の「添加型」に関する混用は、文法の知識の欠如や母語の干渉や過剰般化などのほかに、ねじれ誤用に起因するものもある。

例えば、学習者は自分の判断にもとづいて「それから」に時間的關係と因果關係をもたせるという学習者の独自のルールを創りあげている。

それ以外にも、日本語と中国語における出来事の捉え方の違いが引き起こしている誤用がある。中国語では、文あるいは文が表す出来事を縦に積み重ね一つの文章を作りあげていく傾向がある。一方、日本語では、個々の文あるいは出来事をそれぞれ独立させ横に並列させ文章を作りあげていく傾向がある。

図6に示すように、学習者の混用例には一定の誤用の規則性が見いだせた。一つの論理關係の中、二つの文の間の区切り性を示す場合、学習者は「そして」を使用する。二つの文の間の連続性（時間的關係と因果關係）を示す場合、学習者は「それから」を使用する。文の表す出来事を重なる關係を表す場合、学習者は「それに」を使用する。前文が後文のきっかけになるとき、学習者は「また」を使用する。

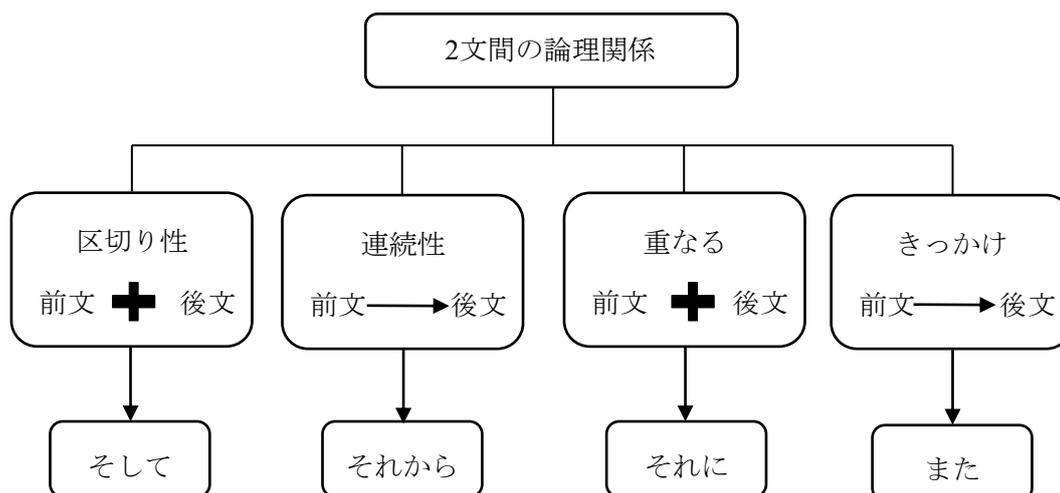


図 6-11 学習者における「そして」「それから」「それに」「また」に関する誤用規則性

第七章 結論

接続詞は文脈を展開するのに重要な役割を担っている。日本語と中国語の文章構成は異なっており、とりわけ日本語の接続詞は種類が多種多様である。また、類似した意味や形をもつ接続詞の存在は学習者が接続詞の用法を理解する妨げとなることがあり、それが学習者の作文に接続詞の誤用が多く見られる引き金となっている。学習者の接続詞に関する誤用実態を把握するには、誤用傾向の全体像を把握したうえで、誤用の規則性を究明する必要がある。

本研究で試みてきたことは、「YUK コーパス」から抽出した学習者の作文データを用いて、「添加型」の誤用実態と要因を解明することであった。その際、誤用例として頻繁に出現する「そして」「また」「それから」「それに」を研究対象とした。

本章は、本論文の結論として、各章で論じてきた「添加型」の誤用傾向と要因を整理し総合的な考察を行う。また、本研究では明らかにしきれなかった今後の研究課題についても述べる。

7.1 本研究のまとめ

本研究の目的は、「添加型」の誤用類型と傾向を分析したうえで、その誤用が生じる要因を分析し、その規則性を明らかにすることであった。この研究目的に従い、「添加型」の誤用を第四章から第六章にかけて分析し考察した結果、次が明らかになった。

7.1.1 「添加型」の不使用における傾向と要因

第四章では「添加型」における不使用の誤用例の分析を行い、「そして」と「また」をめぐる不使用の傾向およびその要因について検討した。誤用が生じる要因を分析し、「そして」と「また」の不使用が文章の形式上の違いによって引き起こされることが明らかになった。つまり、不使用の傾向には、前後の文を区切るのが句点であるかどうかに関係していた。文章が句点で分割される場合、文と文の間に「そして」と「また」は使用されにくいという傾向が見られたのである。この傾向を踏まえると、「添加型」の不使用が句点の場合に頻出するのは、学習者の母語である中国語の影響が考えられることになる。中国語では文頭より文中に接続詞が多く使用され、句点は関連ある文章の終わりを意味する。その中国語の特徴から、学習者は、句点の一つの文章の終わりを表し、句点の後ろの文章は前の文章とは異なる論理関係として位置づけできる文章であると認識してしまう。そのため、学習者は接続詞を使用せず、接続詞の不使用という誤用を生じさせるのである。

また、句点に続く後文に「も」が現れると「また」が使用されない傾向があることも明らか

になった。この要因としては、「も」と対応する中国語の副詞“也”で前後文の添加関係を表現することができるという中国語の文法規則をそのまま日本語に適用し、それが誤用を引き起こす引き金になったと考えられる。

「そして」の不使用の前後文には時系列関係が見られる。これは日本語と中国語における文章構成が異なるためである。

7.1.2 「添加型」の過剰使用における傾向と要因

第五章では「添加型」における過剰使用の誤用例の分析を行い、「そして」「また」「それから」「それに」の誤用傾向およびその誤用が生じる要因について考察した。その結果、次のことが明らかになった。

「そして」「また」「それから」「それに」の過剰使用における誤用傾向は、文章の形式、すなわち二つの文章がどのように接続しているかによって異なっていた。二つの文章が読点によって繋がられる場合、学習者は前文と後文の間に「そして」「また」「それに」を過剰に用いる傾向がある。不使用の場合と同様、過剰使用が読点の場合で頻出するのは、学習者の母語である中国語の接続詞の出現位置と文脈の展開が影響しているためである。

また、文中では、読点の前に使用される語句の品詞によって過剰に使用される「添加型」が異なることも明らかになった。それは、読点の前に動詞が用いられると「そして」と「それに」が過剰に使用され、他方で読点の前に動詞以外のものが用いられると「また」が過剰に使用されるというものであった。この要因としては、学習者が日本語における「て」や「し」などのような動詞の文中の接続表現を十分に理解しておらず、学習者独自の規則を作っていることが考えられる。その規則の第一は、「～して…する」のような動詞の文中接続であれば、「～して…する」と「そして」の形式上の類似性から学習者が「そして」を過剰に使用してしまうというものである。第二は、文中接続が使用される場合であっても後文に「も」などがある場合、中国語の連語の句型“而且…也”の影響から、学習者は「それに」を使用するというものである。第三は、読点の前に動詞以外が使用される場合には、後文で情報追加を示すため「また」が使用されるというものである。

さらに、「そして」「それに」「また」と異なり、句点によって文章が接続されると、文と文の間に「それから」が過剰に使用される傾向にある。「それから」の過剰使用で句点が多く観察されるのは、「それから」のもつ区切り性が反映されているからと考えられる。前後文が時系列関係にあるとき、句点の場合区切り性を表す「それから」が使用されやすい。

「そして」の過剰使用の前後文には非時系列関係が見られる。これは日本語と中国語における文章構成が異なるためである。

7.1.3 「添加型」の混用における傾向と要因

第六章では「添加型」における混用の誤用例を分析し、「*そして→Y」と「*それから→Y」「*それに→Y」の誤用傾向およびその要因について考察した。その結果、次のことが明らかになった。

「*そして」「*それから」「*それに」の三つの接続詞は他の添加型の接続詞と最も多く混用され、とりわけ「また」との混用が目立つ。「*そして」「*それから」「*それに」が「また」と混用されやすいのは、「また」を含む四つの接続詞の文体差に関する知識が学習者に不足しているからである。「*そして」と「また」との混用の要因は、「そして」の使用しやすさから両者の意味上の差異を理解せず多用し、さらに区切り性を感じさせる接続詞として「そして」を捉えたためである。「*それから、*それに」と「また」との混用の要因は、学習者がより文章的な言葉として「それから」「それに」を捉えているためである。また、学習者は「それから」を付け加えの接続詞、「それに」を文が表す出来事を上に重ねる接続詞として扱っている。「*また→そして・それから・それに」の8例は、前文が後文のきっかけになるという前後文関係をもつという共通点が見いだせた。

「そして」「それから」「それに」という三つの「添加型」は互いに対として、どのような混用傾向と規則性があるのかを考察した。「そして」と「それから」の混用には、日本語母語話者と異なり学習者には、前後文に区切り性があると「そして」、連続性があると「それから」を使用する傾向が見られた。「*そして→それから」の場合、学習者は文法知識の不足のため、多様な意味を含む「そして」と“然后”を混同し、その使用しやすさから前後の文を接続するためだけに「そして」を使用している。「*それから→そして」の場合、学習者が語形の類似性（引き続きを表す格助詞「から」と原因を表す格助詞「から」）で時間的關係と因果關係という機能を合わせもつ接続詞として「それから」を誤って使用している。「そして」と「それに」の混用に関しては、「*それに→そして」の誤用例のみが出現した。時間的流れに沿って出来事を述べる時、学習者はその出来事が上に重なるというイメージとして捉える傾向がある。学習者は「それに」が「上に重なる」という意味を理解しているものの、文が表す出来事を正しく捉えていないことが誤用の要因である。ここには日本語と中国語において文が表す出来事の捉え方に違いがあることが関係している。時間的流れに沿っていくつかの文が表す出来事を述

べるとき、それを日本語母語話者は横に並べ、それぞれ独立した出来事として捉えている。それに対して、中国語母語話者は縦に重ね置かれ累加した一つの出来事として捉えている。

7.2 「添加型」における誤用の規則性

第四章から第六章の分析を踏まえて、「添加型」における誤用の規則性は以下の3点にまとめることができる。

第一の誤用規則性は、文章の形式上の特徴によって規則的な「添加型」の不使用と過剰使用が生じるという誤用の様相である。簡単に言えば、「添加型」の不使用と過剰使用は、前後文を区切るのが句点なのか読点なのかによって異なった傾向をもつ。句点によって文章が二つに分割される場合、文と文の間に「そして」と「また」は使用されない。他方、読点によって文章が接続される場合、読点の前に動詞以外のものが使用されると「また」が過剰に使用される。読点の前に動詞が使用される場合、前後文が非時系列関係にあると「そして」が過剰に用いられる。第五章でも示したが、「そして」「また」の不使用と過剰使用に見られる誤用の規則性を再度図 7-1 として掲示しておく。

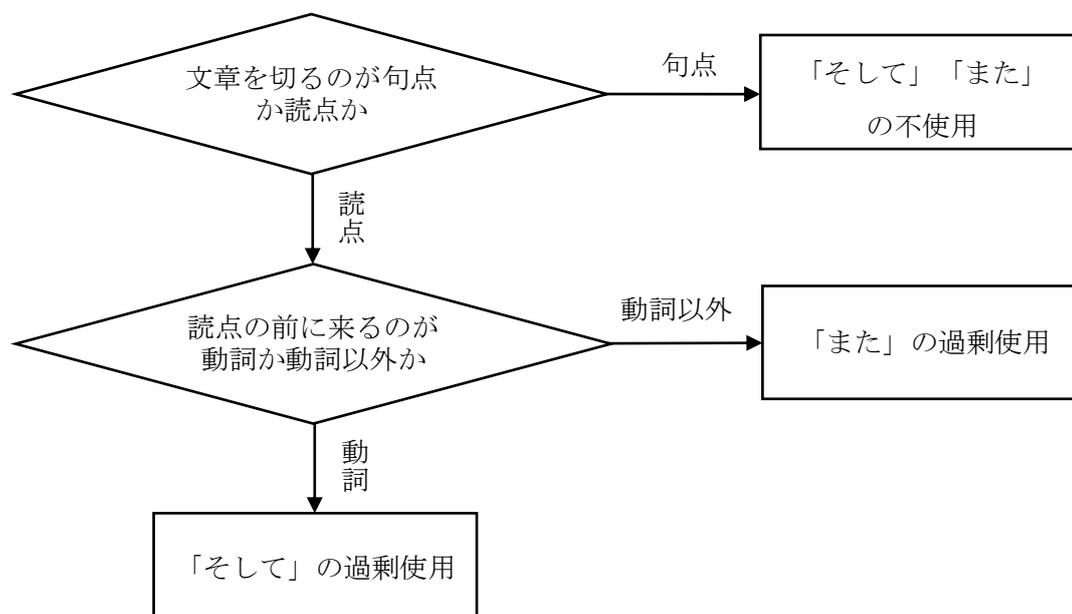


図 7-1 「そして」「また」の不使用と過剰使用に見られる誤用の規則性

第二の誤用規則性は、日本語と中国語の文章構成の違いによって「添加型」の不使用と過剰使用が生じるという誤用の様相である。これは、化石化の傾向がある「添加型」の「そして」の不使用と過剰使用における前文と後文の文脈関係の特徴を明らかにしたことで見出した誤用規則性である。この誤用規則性の第一の特徴は、前後文が時系列関係で接続されるとき、「そ

して」は使用されないことである。そして、その第二の特徴は、前後文が非時系列関係で読点を用いて接続される場合、「そして」が過剰に使用されることである。第五章にも示したが、「そして」「また」の不使用と過剰使用に見られる誤用の規則性を再度図 7-2 として掲示しておく。

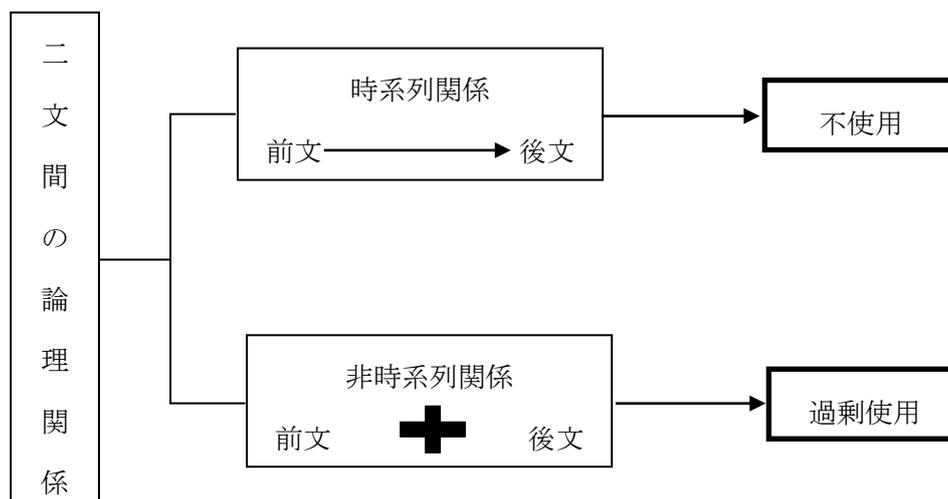


図 7-2 「そして」の不使用と過剰使用の文脈に見られる誤用の規則性

第三の誤用規則性は、一つの論理関係の中で、学習者は独自の誤用規則を適用することによって「添加型」の混用が生じるという誤用の様相である。学習者独自の誤用規則には四つある。一つ目は「そして」が二つの文の間の区切り性を示すことである。二つ目は、「それから」が二つの文の間の時間的關係と因果關係を示すことである。三つ目は、「それに」が文の表す出来事を上に重ねる関係で示すことである。四つ目は、「また」が前後文のきっかけを示すこと。学習者は以上の四つの誤用規則のもとで、「そして」「それから」「それに」「また」の混用を生じさせる。第六章にも示したが、この誤用規則性を図 7-3 に示しておく。

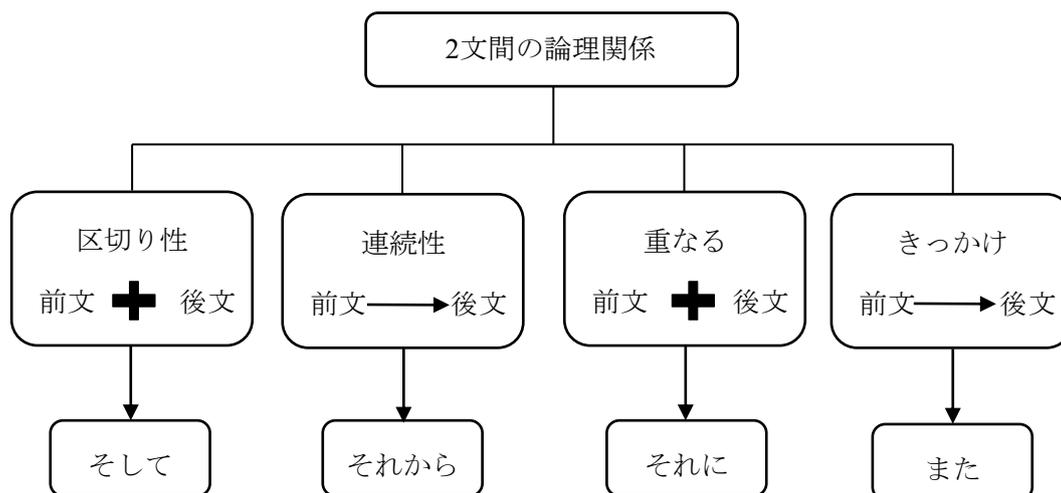


図 7-3 学習者における「そして」「それから」「それに」「また」に関する誤用の規則性

以上の分析結果から、これらの誤用の規則性には一貫した性格が見られる。それは、日本語と中国語における文章構成の違い、つまりは接続詞の出現位置と文脈の展開と出来事の捉え方の違いである。

本研究で見たように、各誤用類型の誤用には複雑な要因が関わっている。そのため、誤用の要因を究明するには、「添加型」の個別具体的な用例の分析にとどまらず、接続詞の意味上及び形式上の特徴を考察する必要がある。中国語母語話者が第二言語として日本語の「添加型」を学習する場合、接続詞に関する知識の欠如とともに母語である中国語の影響を受けて学習者が独自に創りあげた接続詞の規則に従い、接続詞を使用しなかったり、過剰に使用したり、他の接続詞と混用したりする現象が生じるということが明らかになった。

7.3 今後の課題

本研究を終えるにあたり、「添加型」の誤用の規則性は明らかにされたが、本研究で究明しきれなかった課題はいまだ残されており、今後はその課題を焦点に研究を進めていきたい。本研究では「添加型」のみを扱ったため、他の類型の接続詞の誤用の規則性を明らかにするには至らなかった。したがって、「順接型」や「逆接型」を中心にして他の類型の誤用の規則性を明らかにしたい。「順接型」と「逆接型」の関係には非常に興味深い点がある。例えば、「順接型」を使用すべきところに学習者は「逆接型」を使用し、「逆接型」を使用すべきところに学習者は「順接型」を使用する点などである。その点を解明することで、日本語と中国語の発想における相違を明らかにしていきたい。

参考文献

【日本語文献】

- 浅井美恵子 (2003) 「論説的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較—」 『言葉と文化』 4, 87-98.
- 天野みどり (1994) 「『また』の語彙的意味と言語理解に果たす機能—会話資料による考察—」 森野宗明教授退官記念論集編集委員会編『森野宗明教授退官記念論集言語・文学・国語教育』三省堂, 299-312.
- 安藤淑子 (2002) 「上級レベルの作文指導における接続詞の扱いについて—文系論文に用いられる接続詞語彙調査を通して—」 『日本語教育』 115, 81-89.
- 石黒圭 (2000) 「『そして』を初級で導入すべきか」 『言語文化』 37, 27-38.
- 石黒圭 (2008) 『文章は接続詞で決まる』 光文社新書.
- 伊豆原英子 (2004) 「添加の接続詞『それに、そのうえ、しかも』の意味分析」 『愛知学院大学教養部紀要』 52 (1), 1-17.
- 伊藤俊一・阿部純一 (1991) 「接続詞の機能と必要性」 『心理学研究』 62 (5), 316-323.
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版.
- 市川保子 (1998) 「接続詞と外国人日本語学習者の誤用」 『九州大学留学生センター紀要』 9, 1-18.
- 市川保子 (2000) 『続・日本語誤用例文小辞典』 凡人社.
- 井手至 (1988) 「接続詞」 国語学会編『国語学大辞典』 東京堂出版, 553-554.
- 于康 (2011a) 「『中国語母語話者の日本語習得プロセスコーパス』 『中国語母語話者の日本語誤用コーパス』 の構築と中国語母語話者の日本語誤用研究のストラテジー」 『エクス：言語文化論集』 7, 75-93.
- 于康 (2011b) 「統計から見る中国語母語話者の『に』の誤用について」 『北研学刊』 7, 14-25.
- 于康 (2012) 「『ねじれ誤用』について—中国語母語話者のテンス・アスペクトの誤用を手がかりに—」 漢日対比言語学研究(協作)会・杭州师范大学日语系(合編) 『漢日語言対比研究論叢(第3輯)』 北京大学出版社, 32-45.
- 于康 (2015) 「格助詞や連体助詞の誤用実態や学習難易度について」 第42回中日理論言語学研究会, 同志社大学大阪サテライト・オフィス, 2015年7月19日.
- 江後千香子 (2007) 「論説的な文章を書くために必要な接続詞—留学生の作文指導のために—」 『日本語論叢の会』 特別号岩淵匡先生退職記念, 292-302.

- 遠藤織枝 (1978) 「作文における誤用例—モスクワ大学生の場合—」『日本語教育』34, 35-46.
- 大河内康憲 (1977) 「副助詞『モ』と副詞『也』など」『日本語と中国語の対照研究』2, 12-18.
- 岡本宜子 (1996) 「『また』の構文的特徴と機能についての覚え書き」『日本語・日本文化研究』4, 37-45.
- 柏野和佳子他 (2012) 「書籍テキストへの文体情報付与の試み—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象に—」国立国語研究所言語資源研究系・コーパス開発センター『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 155-164.
- 鎌田修 (2006) 「KYコーパスと日本語教育研究」『日本語教育』130, 42-51.
- 川端元子 (2006) 「接続詞からみたテキストの構造—マンガにおける『そして』の機能—」『Journal of studies for the integrated text science : SITES : 21st century COE program』4 (2) , 77-94.
- 北條淳子 (1980) 「中級読解教材における接続詞の問題」『講座日本語教育第16分冊』, 20-36.
- 倉持益子・鈴木秀明 (2007) 「日本語学習者における接続詞の習得—留学生の接続詞使用状況—」『神田外語大学紀要』19, 211-234.
- 栗原宜子 (1968) 「それから・すると・では」『たより』31, 28-36.
- グループ・ジャマシイ編 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
- 小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク.
- 佐久間鼎 (1983) 『現代日本語法の研究』くろしお出版.
- 佐久間まゆみ (1983) 「文の連接—現代文の解釈文法と連文論—」『日本語学』2 (9) , 33-44.
- 佐久間まゆみ (1991) 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要文学部』41, 9-22.
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク.
- 迫田久美子 (2009) 「学習者の視点から始める第二言語習得研究—コーパス分析のススメ—」『日本語学』28 (10) , 24-32.
- 佐治圭三 (1970) 「接続詞の分類」『月刊文法』2 (12) , 明治書院, 28-39.
- 佐治圭三 (1987) 「文章中の接続語の機能」『国文法講座』6, 明治書院.
- 佐藤政光 (1992) 「日本語学習者の作文における連文レベルの誤用について」『明治大学教養論集』251, 173-187.
- 信太知子 (1989) 「接続語と独立語」北原保雄編『講座日本語と日本語教育4日本語の文法・文体 (上)』明治書院, 276-301.
- 柴田俊造 (1986) 「『日本語中級 I』における接続語について (I)」『東海大学紀要 留学生教育センター』7, 1-25.

- 柴田俊造（1988）「『日本語中級Ⅰ』における接続語について（Ⅱ）」『東海大学紀要 留学生教育センター』8, 33-51.
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁（2010）『詳説第二言語習得研究—理論から研究法まで—』研究社.
- 高橋太郎（2008）『日本語の文法』ひつじ書房.
- 財部仁子（2001）「作文における接続語句のレベル別問題点」『日本語・日本文化研究』11, 129-138.
- 田代ひとみ（2007）「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14, 131-144.
- 田中章夫（1984）「接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法4 修飾句独立句編』明治書院.
- 唐彬（2019）「中国語を母語とする日本語学習者における『並列の接続詞』の混用について」『北研学刊』15, 77-100.
- 唐彬（印刷中）「『並列型の接続詞』の不使用と過剰使用に関する一考察—「そして」「また」を中心に—」『日語偏誤と日語教学研究（第四輯）』浙江工商大学出版社, 107-125.
- 徳田裕美子（1995）「接続助詞及び接続詞の誤用について」窪田富男教授退官記念論文集編集世話人編『日本語の研究と教育窪田富男教授退官記念論文集』専門教育出版, 409-422.
- 中川正之（1982）「中国語—とくに助詞『も』に対応する—音節副詞をめぐって—」森岡健二他編『講座日本語学11巻』明治書院, 142-160.
- 中田敏夫（1989）「国語教科書接続詞にみる男女差」『金沢大学語学・文学研究』18, 6-17.
- 永野賢（1986）『文章論総説—文法論的考察—』朝倉書店.
- 西谷元夫（1973）「国語教室の窓表現上の問題点二つ」『解釈』19（5）, 70-72.
- 西由美子（1995）「新聞社説における接続表現の出現傾向」『国文目白』34, 85-93.
- 仁田義雄（1987）「助詞類各説」日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店, 392-417.
- 沼田善子（1986）「第2章とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武編『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, 107-225.
- 沼田善子（2000）「第3章とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子編『時・否定と取り立て』岩波書店, 153-227.
- 沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.
- 浜田麻里（1995）「ソシテとソレデとソレカラ—添加の接続詞—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版, 575-583.

- 浜田麻里 (2006) 「並べたてる接続詞をめぐって—「あるいは」「また」をてがかりに—」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平3 複文・談話編』くろしお出版, 169-185.
- 馬場俊臣 (2010) 『現代日本語接続詞研究—文献目録・概要及び研究概観—』おうふう.
- 林謙太郎 (1986) 「現代語における接続詞の用法 (1)」『語学研究』45, 39-48.
- 範海翔 (2012) 「日本語の接続表現と中国語の連詞の類型に関する比較」『言語の普遍性と個別性』3, 65-73.
- ひけひろし (1985) 『『そして』と『それから』』教育科学研究会・国語部会編『教育国語』83, むぎ書房, 44-53.
- ひけひろし (1996a) 「接続詞のはなし (1) —そして—」教育科学研究会・国語部会編『教育国語第2期』20, 13-19.
- ひけひろし (1996b) 「接続詞のはなし (2) —「それから」と「そして」—」教育科学研究会・国語部会編『教育国語第2期』22, 15-26.
- 比毛博 (1989) 「接続詞の記述的な研究」言語学研究会編『ことばの科学2』むぎ書房, 49-108.
- 広瀬正宜他編 (2001) 『日本語使い分け辞典』講談社インターナショナル.
- 福島佐知 (1997) 「話しことばにおける『添加』の接続表現について—「そして」「それで」「それから」—」東京外国語大学日本課程編『日本研究教育年報 (1996年度)』, 49-70.
- 益岡隆志 (2012) 「中立形接続とテ形接続の分化」共同研究プロジェクト『複文構文の意味の研究』研究発表会.
- 水谷静夫・田中幸子 (1972) 「語の並列結合子」『計量国語学』63, 19-36.
- 森田良行 (1987a) 「接続詞」日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店, 141-142.
- 森田良行 (1987b) 「接続詞・副詞類各説」日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店, 359-366.
- 森田良行 (1998) 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 守屋三千代 (2000) 「添加型の接続語について」『日本語日本文学』10, 45-58.
- 森山卓郎 (2006) 「『添加』『累加』の接続詞の機能—「そして」「それから」などをめぐって—」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平3 複文・談話編』くろしお出版, 187-207.
- 森山卓郎 (2016) 「文法と論理の意識を育てる—累加の接続詞『そして』『また』を中心に—」『特集ことばの意識を育てる』明治書院, 26-38.
- 楊凱榮 (2018) 『中国語学・日中対照論考』白帝社.
- 楊曉輝・馬場俊臣 (2004) 「接続詞『そして、それから、それに、そのうえ』の用法」人文科学・社会科学編『北海道教育大学紀要』54 (2), 27-41.

- 李宗禾（2008）「日中両語における接続語句の対照研究」『明海日本語』13, 33-43.
- 呂叔湘〔牛島徳次・菱沼透監訳〕（2003）『中国語文法用例辞典—《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』東方書店.
- 渡邊亜子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版.

【中国語文献】

- 李春（2016）《现代汉语时序范畴》吉林大学博士学位论文.
- 呂叔湘（2005）《语法修辞讲话》辽宁教育出版社.
- 秦礼君（1994）〈汉语连词与日语接续（助）词〉《日语学习与研究》2, 40-43.
- 赵新（2003）〈“因此、于是、从而”的多角度分析〉《语文研究》1, 26-29/34.
- 赵运普（2001）〈说“于是”——兼谈顺承、因果复句的划界〉《新乡师范高等专科学校学报》15（1）, 26-27.
- 张亚茹（2008）〈“于是”句的多角度分析〉《云南师范大学学报（对外汉语教学与研究版）》6（1）, 51-57.
- 张谊生（2000）《现代汉语虚词》华东师范大学出版.
- 于康等（2017）《日语格助词的偏误研究（上）》浙江工商大学出版社.
- 王自强（1998）《现代汉语虚词词典》上海辞书出版社.

用例出典

1. 「YUK タグ付き中国語母語話者の日本語学習者作文コーパス」 Ver.8
(関西学院大学于康研究室, 2018 年)

2. 「中日対訳コーパス (第一版)」 (北京日本学研究中心, 2003 年)

【中訳】

- 乙武洋匡 (1998) 『五体不満足』講談社. → 《五体不満足》
石川達三 (1968) 『青春の蹉跎』新潮社. → 《青春的蹉跎》
川端康成 (1947) 『雪国』新潮社. → 《雪国》
中根千枝 (1972) 『適応の条件』講談社. → 《适应的条件》
井上靖 (1954) 『あした来る人』筑摩書房. → 《情系明天》
村上春樹 (1987) 『ノルウェイの森』講談社. → 《挪威的森林》

【和訳】

- 莫言 (1986) 《红高粱》解放军文艺出版社→『赤い高粱』
浩然 (1994) 《金光大道》京华出版社→『輝ける道』
毛泽东 (1991) 《毛泽东选集第四卷》人民出版社→『毛沢東選集四』
史铁生 (2008) 《插队的故事》中国盲文出版社→『遙かなる大地』
冰心 (2012) 《关于女人》外语教学与研究出版社→『女の人について』

3. CCL コーパス (北京大学中国語学研究中心, 2000 年)

http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus

4. その他

- 村上春樹 (1985) 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド (下)』新潮文庫, 新潮社.
郭敬明 (2003) 『梦里花落知多少』春风文艺出版社.

謝辞

本博士論文は、筆者が広島大学大学院国際協力研究科教育文化専攻博士課程後期に在籍中の研究成果をまとめたものです。本研究を遂行し博士論文を提出するにあたり、実に多くの方々にご指導とご助言を賜りました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきたいと思えます。

指導教員主査である佐藤暢治先生は、穏やかな雰囲気のもとに私の研究環境を作っていただき、研究の方向付けから論文執筆まであらゆる面に渡り温かく見守っていただきました。博士課程後期の三年間、佐藤先生はご自身も大変ご多用の中、毎週ゼミの場で幾度にも渡りご指導を賜り、また投稿論文の要旨の書き方に至るまで丁寧にご指導をいただきました。さらには、何度も佐藤先生にはご迷惑もおかけいたしました。博士課程後期の三年間の中、二年目にして博士論文のテーマを変更した際には温かく励ましていただき、交通事故や盗難事件の際には迅速に問題を解決していただきました。私が博士論文を無事に仕上げることができたのは、ひとえに佐藤先生から厚いご指導をいただけたからだと思っております。この三年間、終始暖かい支えとご指導を頂いたことに深く感謝を申し上げます。

副査である関西学院大学の于康先生、ならびに、本学の高永茂先生、深見兼孝先生、堀田泰司先生からも大変有用なご指導とご助言をいただきました。于康先生は、本論文のテーマから研究方法までについてご指導をいただきました。とくに于康研究室が作成した「YUKタグ付き中国語母語話者の日本語学習者作文コーパス」の貴重なデータを使用させていただきました。誠にありがとうございました。と同時に、「YUKコーパス」の作成にご尽力された先生方に心よりお礼を申し上げます。高永茂先生には、接続詞の分類に関してなどたくさんのご指導をいただいたことはもちろん、口頭試問の際には研究者として磨くべき批判的思考力と機敏に問題を捉えることの大切さを教えていただきました。深見兼孝先生には、定義の説明や日本語表現などについて多大なご指導をいただきました。これから一人前の研究者として、先行研究で述べられている議論や分析を積極的にかつ批判的に捉え、それらの正当性を自身で考える姿勢を培っていきます。堀田泰司先生は、先生の研究関心や研究テーマとは異なるものの、私の副査を引き受けていただき感謝いたしております。そして、堀田先生には、恥ずかしながら私自身が見落としていた、研究に向かうべき基本的姿勢や引用の仕方など研究者としての基本の重要性を教えていただきました。この場を借りて、心より感謝を申し上げます。

また、博士課程後期進学以前から現在に渡り温かく見守っていただいている中国人民大学の張威先生と張昌玉先生、東京大学の楊凱榮先生、湖南大学の張佩霞先生にも深く感謝しております。本研究を進めるに当たり、愛媛大学の時衛国先生にも数々の貴重なご助言をいただき、

大変お世話になりました。厚く感謝を申し上げます。

博士論文執筆中、多くの友人に恵まれ、大きな励みとなりました。とくに、友人の内田涼さんには論文執筆にあたり、日本語の校正を手伝っていただき、また論文に関して相談に乗っていただき感謝しております。そして、友人の土井百合子さん、何妨容さん、郷司寿朗さん、同じゼミのみなさんには研究を進めるにあたり、日頃から多大なご助言をいただきました。ここで謝意を表します。とても全員の名前を挙げることはできませんが、それぞれのお立場から様々な形でお力添えをいただきました。本当にありがとうございました。

研究活動費においては、幸いに、中国政府による「国家建設高水平大学公派研究生項目」に選抜され、経済的に多大な支援をいただき、研究活動に集中することができました。中国国家留学基金管理委員会に心より感謝しております。

最後に、これまで自分の思う道を進むことに対して、いつも無条件に辛抱強く支援してくれた中国の両親と姉に心から感謝したいと思います。

令和元年8月1日 唐彬